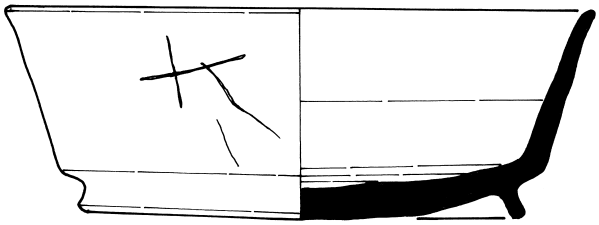
茨城県石岡市

東成井東原遺跡

－H26県営畑地帯総合整備事業に伴う発掘調査－



2015

茨　　城　　県
石 岡 市 教 育 委 員 会
有限会社　日 考 研 茨 城

航空写真（西から）

航空写真（北から）

茨城県石岡市

東成井東原遺跡

－H26県営畑地帯総合整備事業に伴う発掘調査－

2015

茨　　城　　県
石 岡 市 教 育 委 員 会
有限会社　日 考 研 茨 城

序

石岡市内には400か所近い遺跡が存在しています。石岡市にはこれらの埋蔵文化財に加え、建造物・古文書・民具など多くの文化財が存在しています。近年では古代の瓦窯である瓦塚窯跡、古代の郡寺である茨城廃寺跡を国指定史跡化を目指し調査を行い、中世府中の行政文書である税所文書が県指定文化財に指定されています。これらの文化財は一度破壊されてしまうと二度とはもとに戻すことはできないもので、その取扱いには慎重を期さねばなりません。

その一方で文化財は国民全員の共有財産であり、広く市民にその存在を周知することにより、誇りをもてる石岡市、石岡市のふるさと再生に寄与するべきものでもあるのです。

今回の調査では古墳時代を中心として住居跡20軒が検出されるなど大きな成果があがりました。これらの成果が石岡市の歴史に関する理解を深め、教育・文化の向上の一助として、広くご活用いただければ幸いです。

最後になりますが、調査にあたりご理解とご協力を頂いた皆様、ご指導・ご助言をいただきました皆様に心より感謝申し上げ、あいさつとさせていただきます。

平成27年３月

石岡市教育委員会
教育長　櫻井　信

例　　言

1．本書は茨城県石岡市東成井1407ほかに所在す東成井東原遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は県営畑地帯総合整備事業に伴い、石岡市長　今泉 文彦の委託契約を受けた有限会社 日考研茨城が実施した。

3．調査は石岡市教育委員会指導の下に行った。調査内容及び調査組織は下記の通りである。

所在地　　茨城県石岡市東成井1407ほか
調査面積　1,630㎡
調査期間　平成26年７月10日～平成26年９月22日
整理期間　平成26年９月１日～平成27年２月28日
事務局・調査指導
石岡市教育委員会教育長　櫻井　信
教育部長　鈴木　信充
次長　大関　敏文
文化振興課長　武石　誠
文化振興課長補佐　櫻井　浩司
文化振興課係長　安藤　敏孝
文化振興課係長　小杉山大輔
文化振興課主幹　谷仲　俊雄
調査担当者　発掘　大渕淳志（有限会社　日考研茨城）
整理　小川和博・遠藤啓子・大渕淳志・大渕由紀子・大野美佳（有限会社　日考研茨城）
調査参加者　相田三郎・大谷和枝・小野豊・海老原龍生・海老原光・佐賀剛・佐賀実・島崎清子・鈴木利勝・露久保三郎・中村薫・中島貞雄・沼田久男

4．本書は、小杉山大輔・小川和博・大渕淳志・遠藤啓子・大渕由紀子が分担執筆し、編集は石岡市教育委員会の助言のもと小川和博・大渕淳志が行った。

5．執筆分担は下記の通りである。

第１章第１節・・谷仲俊雄、第１章第２節・・大渕淳志・大渕由紀子、第２章・・遠藤啓子・大渕由紀子、第３章第１・２節・・大渕由紀子、第３節・・小川和博、第４章・・小川和博・遠藤啓子、第５章・・小川和博

6．遺構の写真撮影は大渕淳志が、遺物の写真撮影は大渕淳志・小川和博が行った。

7．遺物の基礎整理・実測・観察表作成は遠藤啓子・小川和博が、遺構図面整理は大渕由紀子・大野美佳・小川和博が行った。

8．記録類及び出土遺物は石岡市教育委員会が保管している。

9．発掘調査から本書の刊行に至るまで、下記の諸機関及び諸氏のご教示・ご協力を得た。記して謝意を表します。
［順不同、敬称略］
茨城県教育庁文化課、茨城県教育財団、ひたちなか市埋蔵文化財センター、上高津貝塚ふるさと歴史の広場、千葉県教育振興財団、佐藤政則、佐々木義則、橋本勝雄、比毛君男

凡　　例

1．本書に記してある座標値は世界測地系第Ⅸ系を用いている。方位は座標北を示す。

2．本文中の色調表現は『新版標準土色帖』2008年版(農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修)を用いた。

3．標高は海抜標高である。

4．掲載した図面の基本縮尺は以下の通りである。

遺構図　調査区全体図1/400 住居跡・井戸跡・溝跡・土坑・土層図1/80　住居跡カマド1/50

遺物図　土師器・須恵器・陶器類・土製品・鉄製品・石製品1/4　縄文土器1/3　銭貨1/2

なお、変則的な縮尺を用いた場合には、スケールをもってその縮尺率を表した。

5．遺物写真は基本的に実測図の縮尺に合わせて掲載した。

6．掲載図中のスクリーントーン及び記号は以下に示す通りである。

遺構図　カマド袖　遺構断面　撹乱

遺物図　須恵器断面　陶器類断面　赤彩

黒色処理

―――・・―――・・硬化面範囲

遺物　遺構図内における●印はすべての種類の遺物を表示した。

7．実測図・本文中に用いた略記号は以下を示す。

SI：竪穴住居跡　SE：井戸跡　SD：溝跡　SK：土坑・土坑墓　P：柱穴　K：撹乱

8．本遺跡の略語はHHH－2014とした。遺物の注記もこれに従っている。

9．遺構一覧表・遺物観察表の表記については、次のとおりである。

(1)計測値の単位はm、cm、ｇで示した。法量に付した(　)は残存値を示す。

(2)遺物番号は遺構ごとの通し番号とし、本文、挿図、観察表に記した番号と同一とした。

10．遺構の「主軸」は、最長の軸線とし、主軸方向は、その他の遺構の長軸方向と共に、座標北からみて、どの方向にどれだけ振れていることを角度で表示した（例　N-10°-E)。

本　文　目　次

序
例言
凡例
目次
第１章　調査に至る経緯と調査の経過 …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査の経過 …… 1
第２章　遺跡の位置と環境 …… 5
　第１節　地理的環境 …… 5
　第２節　歴史的環境 …… 5
第３章　調査の方法と基本層序 …… 8
　第１節　調査の方法 …… 8
　第２節　試掘調査の成果 …… 8
　第３節　基本層序 …… 10
第４章　検出された遺構と遺物 …… 11
　第１節　概要 …… 11
　第２節　遺構外出土の縄文土器 …… 11
　第３節　竪穴住居跡 …… 11
　第４節　井戸跡 …… 37
　第５節　溝跡 …… 37
　第６節　土坑 …… 38
　第７節　遺構外出土の中・近世遺物 …… 52
第５章　まとめ …… 53

写真図版
抄録

挿図目次

第１図　グリット配置図 …… 2
第２図　遺跡周辺地形図（1：2,500） …… 4
第３図　遺跡の位置と周辺の遺跡（1：25,000） …… 6
第４図　試掘トレンチ出土遺物 …… 8
第５図　調査区および遺構配置図 …… 9
第６図　基本層序 …… 10
第７図　遺構外出土の縄文土器 …… 11
第８図　SI01実測図 …… 12
第９図　SI01カマド実測図 …… 12
第10図　SI01出土遺物 …… 13
第11図　SI02実測図 …… 14
第12図　SI02出土遺物 …… 14
第13図　SI03実測図 …… 15
第14図　SI03出土遺物 …… 15
第15図　SI04実測図 …… 16
第16図　SI04カマド実測図 …… 16
第17図　SI04出土遺物 …… 17
第18図　SI05実測図 …… 18
第19図　SI05カマド実測図 …… 18
第20図　SI05出土遺物 …… 18
第21図　SI06実測図 …… 19
第22図　SI06カマド実測図 …… 19
第23図　SI06出土遺物 …… 19
第24図　SI07実測図 …… 21
第25図　SI07出土遺物 …… 21
第26図　SI08実測図 …… 22
第27図　SI08掘形実測図 …… 22
第28図　SI08出土遺物 …… 22
第29図　SI09実測図 …… 23
第30図　SI09カマド実測図 …… 23
第31図　SI09出土遺物 …… 24
第32図　SI10実測図 …… 26
第33図　SI10出土遺物 …… 26
第34図　SI11実測図 …… 26
第35図　SI12実測図 …… 27
第36図　SI12カマド実測図 …… 27
第37図　SI12出土遺物 …… 27
第38図　SI13実測図 …… 28
第39図　SI13カマド実測図 …… 28
第40図　SI13出土遺物 …… 28
第41図　SI14実測図 …… 30
第42図　SI14カマド実測図 …… 30
第43図　SI14出土遺物 …… 31
第44図　SI15実測図 …… 32
第45図　SI15カマド実測図 …… 32
第46図　SI15出土遺物 …… 33
第47図　SI16実測図 …… 35
第48図　SI16出土遺物 …… 35
第49図　SI17実測図 …… 36

第50図　SI17出土遺物 …… 36
第51図　SI18実測図 …… 37
第52図　SI19実測図 …… 38
第53図　SI19出土遺物 …… 38
第54図　SI20実測図 …… 39
第55図　SI20出土遺物 …… 39
第56図　SE01実測図 …… 40
第57図　SD01実測図 …… 41
第58図　SK01～11実測図 …… 42
第59図　SK07・11・16～19出土遺物 …… 43
第60図　SK12～20実測図 …… 44
第61図　SK20出土遺物 …… 46
第62図　SK21～29実測図 …… 48
第63図　SK21～25出土遺物 …… 49
第64図　SK30～37実測図 …… 50
第65図　SK30・31・33・35～37出土遺物 …… 51
第66図　遺構外出土の中・近世遺物 …… 52

表　目　次

第１表　東成井東原遺跡と周辺遺跡一覧 …… 7
第２表　出土土器観察表 …… 56

写真図版目次

巻頭図版　１．航空写真(西から)　２．航空写真(北から)
PL．１　１．航空写真(西から)　２．航空写真(北東から)
PL．２　１．遺跡遠景(南から)　２．遺跡調査前近景（北東から）
PL．３　１．調査区全景(西から)　２．調査全景（東から）
PL．４　１．調査全景(真上から)　２．基本層序（南東から）
PL．５　１．SI01全景(南から)　２．SI01カマド(南から)　３．SI01貯蔵穴(南から)　４．SI01遺物出土状況
５．SI01遺物出土状況
PL．６　１．SI02(南西から)　２．SI03（北東から）
PL．７　１．SI04(南東から)　２．SI０４カマド（南東から）　3～5 SI01遺物出土状況
PL．８　１．SI05(南から)　２．SI05カマド（南から）　３．SI01遺物出土状況　４．SI04全景(南から)
PL．９　１．SI06カマド(南から)　２．SI06遺物出土状況　３．SI07・SK20・21全景(南から)
４．SI08全景（南から）
PL．10　１．SI08掘方(南から)　２．SI09遺物出土状況　３．SI09全景(南東から)　４．SI09カマド
５．SI09遺物出土状況(1)
PL．11　１～４．SI09遺物出土状況(2)　５．SI10全景(南から)
PL．12　１．SI11全景(南から)　２．SI12全景(南から)　３．SI12カマド(南から)　４．SI12遺物出土状況
PL．13　１．SI13全景(南から)　２．SI13カマド(南から)　３．SI14全景(南東から)
PL．14　１．SI14カマド(南から)　２・３．SI14遺物出土状況　４．SI15遺物出土状況(南から)
５．SI15全景(南から)
PL．15　１．SI15カマド(南から)　２～４．SI15遺物出土状況　５．SI16全景(南から)
PL．16　１．SI16遺物出土状況　２．SI16遺物出土状況　３．SI17全景(北から)　４・５．SI17遺物出土状
PL．17　１．SI18全景(西から)　２．SI19全景(南から)　３．SI20全景(北から)
PL．18　１．SE01(北から)　２．SD01(南から)　３．SK01・02(西から)　４．SK03(南から)
５．SK04(北から)　６．SK05(北から)　７．SK06～11(南から)　８．SK11(南から)
PL．19　１．SK12(南から)　２．SK13～15(北から)　３．SK15(南から)　４．SK16(南から)
５．SK17・18(南から)　６．SK19(南から)　７．SK20・21(南から)　８．SK22・23(南から)

PL．20　1．SK24(東から)　2．SK25(東から)　3．SK26(南から)　4．SK27(南から)
　　5．SK28・29(西から)　6．SK30(南から)　7．SK31(南から)　8．SK30・31・34(東から)
PL．21　1．SK32(北から)　2．SK32(北から)　3．SK33(南から)　4．SK35・36(北から)
　　5．SK35遺物出土状況　6．SK36遺物出土状況　7．SK37(南から)　8．遺構外遺物出土状況
PL．22　1．SI01出土遺物
PL．23　1．SI02出土遺物　2．SI03出土遺物　3．SI04出土遺物
PL．24　1．SI05出土遺物　2．SI06出土遺物　3．SI07出土遺物
PL．25　1．S08I出土遺物　2．SI09出土遺物(1)
PL．26　1．SI09出土遺物(2)　2．SI10出土遺物　3．SI12出土遺物　4．SI13出土遺物
PL．27　1．SI14出土遺物
PL．28　1．SI15出土遺物
PL．29　1．SI16出土遺物　2．SI17出土遺物　3．SI19出土遺物　4．SI20出土遺物
PL．30　1．1～3：SK07　4・5：SK11　6～9：SK15　10・11：SK16　12：SK17　13：SK18
　　14：SK219
　　2．1～13：SK20
PL．31　1．1：SK21　2：SK22　3・4：SK23　5・6：SK24　7：SK25
　　2．1～3：SK30　4：SK31　5～7：SK33　8：SK37　9：SK35　10：SK36
PL．32　1．試掘調査出土遺物　2．遺構外出土の縄文土器　3．遺構外出土の中・近世遺物

第１章　調査に至る経緯と調査の経過

第１節　調査に至る経緯

茨城県は、平成18年度に「畑地帯総合整備事業　東成井西部地区」の計画を立ち上げ、平成19年度には埋蔵文化財包蔵地の地図に記載がないことを確認し、計画書を作成した。平成20年12月に県営事業として計画が決定、平成21年１月に確定したことから事業に着手し、平成22年１月からは区画整理工事に着手していた。

一方、石岡市教育委員会は、平成21年６月に開発行為に伴う埋蔵文化財確認のための現地踏査によって東成井山ノ神遺跡を発見し、６月25日付で茨城県教育委員会に「遺跡発見の届出」を進達していた。

平成22年６月15日、茨城県文化財保護指導委員より東成井山ノ神遺跡の範囲内において掘削を伴う工事が実施されている旨、石岡市教育委員会へ連絡があった。市教育委員会が同日現地を確認したところ、工事範囲内において土器の散布を確認したことから、事業主体である茨城県南農林事務所に工事の中断を要請するとともに、埋蔵文化財に関する協議を申し入れた。

平成22年６月21日、県南農林事務所より「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」照会文書が市教育委員会に提出された。市教育委員会は、中断中の工事の未着手部分の試掘調査および事業地内の踏査を行い、事業地全域について試掘調査が必要な旨を平成22年７月22日付で回答した。試掘調査を平成22年９月～11月に断続的に実施したところ、当初の東成井山ノ神遺跡の範囲を超えて遺跡を確認するとともに、新たに東成井東原遺跡を確認した。

平成22年11月15日、県南農林事務所より、県教育委員会あて「埋蔵文化財発掘の通知について」が提出された。県教育委員会からは平成22年12月17日付で、東成井山ノ神遺跡および東成井東原遺跡の１．道路工事部分については工事着手前に発掘調査を実施するように、２．区画整理工事部分については市教育委員会が立会うように通知があった。

これらを受け、平成23年度は東成井山ノ神遺跡について株式会社ノガミに委託し発掘調査を実施した。平成26年度は東成井東原遺跡について有限会社日考研茨城及び株式会社地域文化財研究所に委託し発掘調査を実施することとなり、本報告は有限会社日考研茨城の調査担当分にあたる。

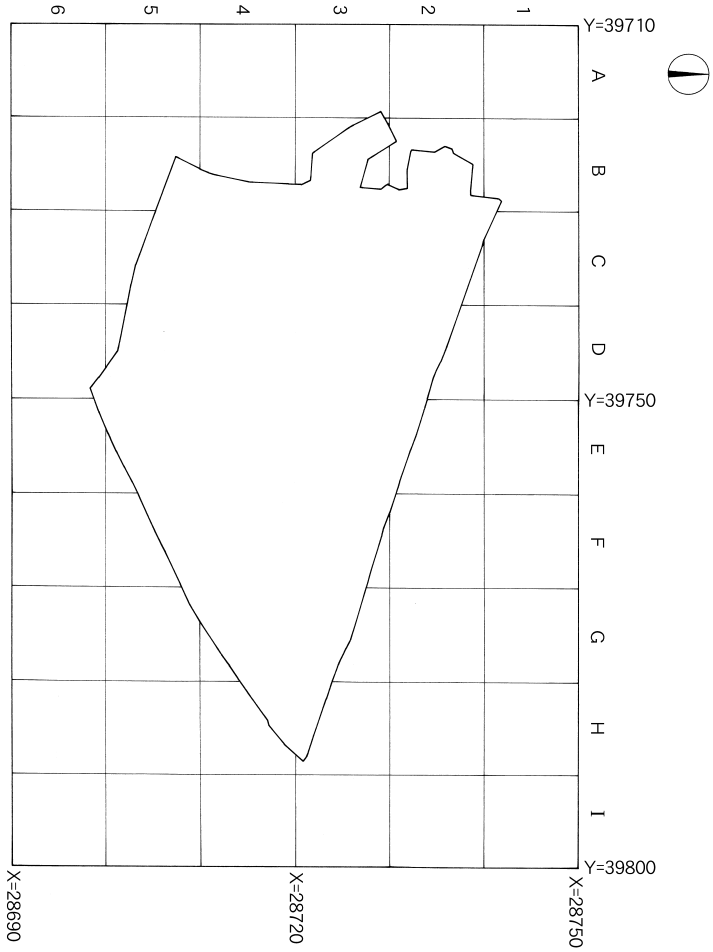
（谷仲俊雄）

第２節　調査経過

本遺跡の発掘調査は、平成26年７月10日より開始し、平成26年９月22日に現地調査を終了した。また整理作業は同年10月１日から翌年２月28日まで実施した。なお、現地調査については日報を記す。

１．現地調査日報

７・10　発掘作業を開始する。重機による表土層除去を行う。
７・11　重機による表土層除去を継続する。
７・14　重機による表土層除去を継続する。
７・15　重機による表土層除去を継続する。
７・16　重機による表土層除去を継続し、遺構検出のため精査を開始する。
７・17　遺構検出のための精査を継続する。
７・18　遺構検出のための精査を継続する。
７・22　遺構検出のための精査を継続する。
７・23　遺構検出のための精査を継続する。
７・24　遺構検出のための精査を継続する。竪穴住居跡SI01～20を検出する。
７・25　井戸跡SE01を検出する。
７・28　竪穴住居跡SI17、井戸跡SE01の調査を行う。溝跡SD01及び土坑SK01～04を検出する。
７・29　竪穴住居跡SI15～20、溝跡SD01、土坑01～03の調査を行う。土坑SK05～07を検出する。



第１図　グリッド配置図

７・30　竪穴住居跡SI15～20、溝跡SD01、井戸跡SE01、土坑04～07の調査を行う。土坑SK08を検出する。
７・31　竪穴住居跡SI16～20の調査を行う。土坑SK09～12を検出する。
８・１　竪穴住居跡SI01の調査を行う。土坑SK13を検出する。
８・４　竪穴住居跡SI01～04の調査を行う。土坑SK14～16を検出する。
８・５　竪穴住居跡SI16～20の調査を行う。
８・６　竪穴住居跡SI15、井戸跡SE01、溝跡SD01の調査を行う。
８・７　竪穴住居跡SI05と15、土坑SK13～16の調査を行う。土坑SK17～29を検出する。
８・８　竪穴住居跡SI06・09・15、土坑SK10・11・28・29の調査を行う。土坑SK30・31を検出する。
８・11　竪穴住居跡SI06・09・15、土坑SK24～31の調査を行う。
８・18　竪穴住居跡SI03～06、土坑SK25～31の調査を行う。
８・19　竪穴住居跡SI01～07、土坑SK25～27・30・32の調査を行う。
８・20　竪穴住居跡SI12・13の調査を行う。
８・21　竪穴住居跡SI01・07・09、土坑SK26～30の調査を行う。
８・22　竪穴住居跡SI01～14のカマド調査を行う。

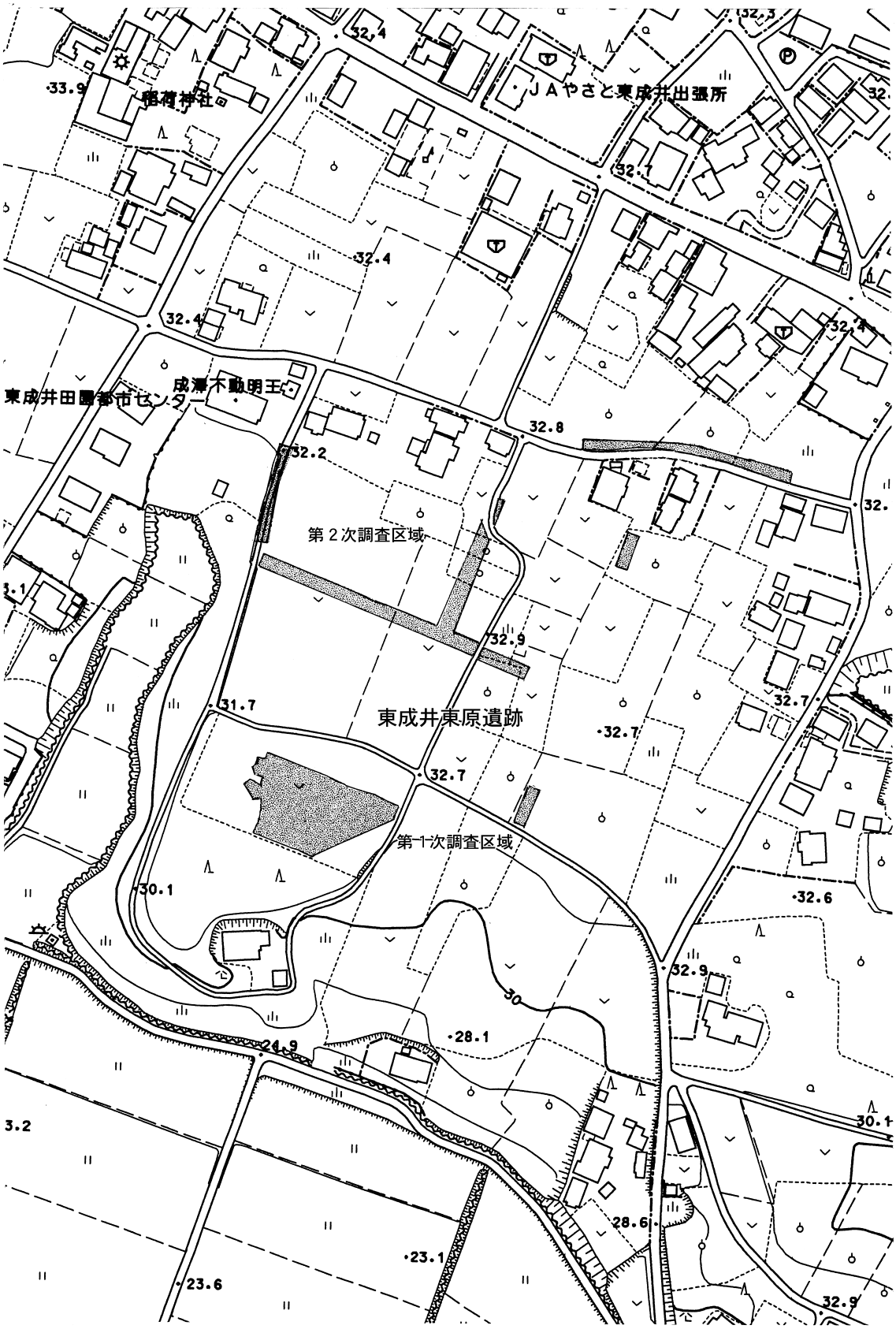
９・２　竪穴住居跡SI01～14の調査を行う。
９・３　竪穴住居跡SI14～18の調査を行う。
９・４　竪穴住居跡SI04～08・10・14の調査を行う。
９・５　竪穴住居跡SI04・07・09・12の調査を行う。
９・８　竪穴住居跡SI04～12の調査を行う。
９・９　竪穴住居跡SI12、旧石器文化層の調査をする。
９・10　全測図実測作業を行う。
９・16　調査区の清掃を実施する。
９・17　調査区の航空写真撮影を実施する。
９・18　調査区の終了確認を行う。
９・19　危険防止のため深掘区域を人力による埋戻し作業を実施した。本日にて現場作業を終了する。
９・22　調査器材の撤収作業を実施し、調査完了する。

（大渕淳志）

２．整理作業

整理作業および報告書作成は、平成26年10月から有限会社 日考研茨城で開始した。遺物収納整理箱で４箱分の出土遺物の洗浄から着手し、遺物乾燥後、遺構・調査区単位で注記を行い、出土遺物の接合を行った。これらの全資料のち報告書掲載遺物について検討し、詳細な選別については10月８日石岡市教育委員会において実施した。さらに土浦市上高津貝塚ふるさと歴史広場資料館およびひたちなか市埋蔵文化財センターにおいて古墳時代以降の出土遺物の実見をしていただき、遺物の年代や産地等の鑑定をお願いした。こうした一連の資料選別作業終了後、遺物の実測・拓本・トレースと写真撮影を行った。遺構図面については遺物整理と併行して確認・修正・トレースを行い、併せて遺構写真の選別を行った。１月31日までに遺構のトレース、遺構挿図のレイアウトを完了させ、その間、原稿執筆を行い、２月28日に全体割付、写真図版作成を終了し、確認・見直し作業の後に印刷を発注して３月20日に刊行した。

（大渕由紀子）



第２図　遺跡周辺地形図（1：2,500）　調査区域

第２章　遺構の位置と環境

第１節　地理的環境（第２図）

東成井東原遺跡は、旧八郷町にあたる石岡市東成井1407番ほかに所在する。石岡市は茨城県の中央部に位置し、霞ケ浦の北西部で、園部川と恋瀬川に挟まれた標高25～30mの平坦な洪積台地上に発達している。この両河川に挟まれた台地は石岡台地と呼ばれ、旧石器時代から現在に至るまで多くの人々の生活が営まれ絶好の場を提供している。当遺跡は市街地の北東部に位置し、北西部に流れをもつ園部川左岸に立地している。この園部川は小美玉市や行方市の市境に沿って南流しながら霞ケ浦の川中子に注ぐ。現在の霞ケ浦から北へ約11kmの地点である。付近は谷津や沖積地が樹枝状で複雑に開析されている。

当遺跡は、園部川と巴川に挟まれた台地上に立地しているが、占地は園部川側で、当河川に沿って南方向へ延びている台地平坦部に位置している。ここはまた園部川が上流からの流れを東方向から南方向へ大きく変える地点で、ここに古墳時代から奈良・平安時代の集落跡が形成された。遺跡は園部川に向かって南方向へ傾斜する舌状台地の先端付近にあたり、西側は比較的深い谷が入り込み、東側は緩傾斜面を呈し、北側後背地は平坦面が拡がっており遺跡が北へ延びていることが確認されている。遺跡は標高32mに立地し、台地と水田の比高差は約９mを測る。また周辺の現況は荒地と山林で、沖積地が水田となっている。

第２節　歴史的環境（第３図）

東成井東原遺跡の所在する東成井地区周辺は、合併前まで発掘事例が少なく歴史的環境について不明な点が多いため、かつての旧八郷町史編纂時においてはほとんど触れことがなかった地域である。しかし、ここ数年、開発に伴う事前調査が頻繁に実施され、平成23年には近接する東成井山ノ神遺跡の本調査によって、古墳時代から奈良・平安時代の集落跡のほか中・近世の遺構が多数確認され大規模な複合遺跡であることが明らかにされるなど、徐々にではあるが周辺の歴史環境が明らかにされつつある。また平成12年度刊の「石岡市遺跡分布調査報告」は当地域の歴史を明らかにする手掛かりとなっていることは確実であろう。また園部川対岸の小美玉市でも同様な状況であり、いずれも茨城県教育委員会の遺跡分布調査を中心に周辺の遺跡を概観したい。

旧石器時代では旧八郷町において11遺跡が知られて、石岡市全体で24遺跡となる。周辺では平成16年茨城県教育財団が発掘調査した猫松遺跡(６)でナイフ形石器を主体とする石器集中地点が４ヶ所検出されている。また南山崎遺跡でも表採資料でありながら尖頭器などまとまった資料が出土しており、今後園部川流域において新たな遺跡が確認されることは確実である。

縄文時代になると遺跡数が増加し、石岡市内だけではなく、周辺地域でもその数は増えることが知られている。いうまでもなく霞ヶ浦を中心にその自然環境が恵まれたことが大きな要因であろう。周辺ではまず猫松遺跡(６)で中期後葉の住居跡のほか陥し穴16基が検出され、隣接する長原遺跡(７)でも陥し穴２基が発掘調査されており、中期から後期にかけて広い狩猟場であることが確認されている。また発掘調査は実施されていないが、早期の遺跡として栄松遺跡(８)で中葉田戸下層式土器が、また方八丁遺跡(16)では後葉茅山式土器が出土している。なお、旧八郷町の半田原遺跡において三戸式や田戸下層式土器がまとまって出土している。前期では、栄松遺跡(８)、清水頭遺跡(９)、碁石沢原遺跡(10)、碁石沢遺跡(14)、根当遺跡(15)、方八丁遺跡(16)などで関山式から浮島式土器が出土している。中期では猫松遺跡(６)以外に清水頭遺跡(９)で阿玉台式土器が出土している。しかし、後・晩期の遺跡ではその数が少なくなり、とくに晩期は極端で、周辺で周知されていない。

弥生時代になると市内全体をみても、遺跡は少数で、周辺では東成井字園東の試掘調査で弥生土器が出土している。

古墳時代では集落遺跡および古墳が飛躍的に増加する。まず平成23年に発掘調査された近接の東成井山ノ神遺跡(５)では６世紀後半の集落跡が検出され、本遺跡との関連性が指摘されている。また猫松遺跡(６)では４・５・６世紀各時期の住居跡が３軒検出されており、巴川流域における拠点集落になるものか集落の広がりが注目されるところとなった。また周辺区域の古墳では美野里町の神明塚古墳群(18)や山神古墳(21)が周知されているが、市内

1東成井東原遺跡　2北田向遺跡　3西久保遺跡　4真家館址　5東成井山ノ神遺跡　6猫松遺跡　7長原遺跡　8栄松遺跡　9清水頭遺跡　10碁石沢原遺跡　11碁石沢土塁　12一ツ木遺跡　13村上遺跡　14碁石沢遺跡　15根当遺跡　16方八丁遺跡　17根当要害　18神明塚古墳群　19逆瀬遺跡　20向峯遺跡　21山神古墳　22羽鳥館跡　23五万堀遺跡　24西峯遺跡　25西平遺跡

第３図　遺跡の位置と周辺の遺跡（1：25,000）

では前方後円墳である佐自塚古墳や前方後方墳である丸山古墳など県内を代表する前期古墳が築造された地域でもあり、周辺は有力豪族の支配下にあったことを示唆する。

奈良・平安時代の遺跡では、やはり集落遺跡として確認された東成井山ノ神遺跡(５)が注目される。7世紀末葉から９世紀後半に営まれており、確実に古墳時代から連続して形成された拠点的集落跡である。本遺跡でもほぼ同時期の住居跡が検出されており、一体化された集落であることは確実である。そのほか発掘調査は実施されていないが、栄松遺跡(８)、清水頭遺跡(９)、碁石沢原遺跡(10)、一ツ木原遺跡(12)、村上遺跡(13)、碁石沢遺跡(14)、根当遺跡(15)、方八丁遺跡(16)などで土師器・須恵器が出土している。また東成井山ノ神遺跡(５)の南側沖積地には和同開珎の出土した西久保遺跡(３)がある。

中世では園部川流域に多く城館跡が知られているが、周辺遺跡では上流域に真家館跡(４)が所在する。また根当要害(17)は鶴町三河守により築造され、天正18(1590)年に佐竹氏の攻略で落城したものとされている。そのほか村上遺跡(13)では中世陶器が、方八丁遺跡(16)では中世火鉢片や擂鉢片、瓦片が採集されている。また羽鳥館跡(22)が周知されている。

近世では佐竹氏の転封により成井村は志筑本堂氏の所領となる。

（遠藤啓子）

第１表　東成井東原遺跡と周辺遺跡一覧

石岡市八郷地区

番号	遺跡名	種別	時代・時期
1	東成井東原遺跡	集落跡	縄文、古墳、奈良・平安、中・近世
2	北田向遺跡	包蔵地	縄文
3	西久保遺跡	包蔵地	奈良・平安
4	真家館址	城館跡	中世
5	東成井山ノ神	集落跡	古墳、奈良・平安、中・近世
6	猫松遺跡	集落跡・狩猟場	旧石器、縄文、古墳、平安
7	長原遺跡	狩猟場	縄文

石岡市石岡地区

番号	遺跡名	種別	時代・時期
8	栄松遺跡	包蔵地	縄文、奈良・平安
9	清水頭遺跡	包蔵地	縄文、奈良・平安、中・近世
10	碁石沢原遺跡	包蔵地	縄文、奈良・平安
11	碁石沢土墨	土墨	近世
12	一ツ木遺跡	包蔵地	縄文、奈良・平安
13	村上遺跡	包蔵地	奈良・平安、中・近世
14	碁石沢遺跡	包蔵地	縄文、奈良・平安
15	根当遺跡	包蔵地	縄文、奈良・平安、近世
16	方八丁遺跡	包蔵地	縄文、奈良・平安、中・近世
17	根当要害	城館跡	中世

旧美野里町

番号	遺跡名	種別	時代・時期
18	神明塚古墳群	古墳群	古墳
19	逆瀬遺跡	集落跡	縄文
20	向峯遺跡	集落跡	縄文
21	山神古墳	古墳	古墳
22	羽鳥館跡	城館跡	中世
23	五万堀遺跡	交通遺跡	奈良・平安
24	西峯遺跡	集落跡	縄文
25	西平遺跡	集落跡	縄文

参考文献

石岡市教育委員会1997「石岡市の遺跡」
石岡市教育委員会2001「石岡市遺跡分布調査報告」
茨城県教育庁文化課編2001『茨城県遺跡地図(地名編・地図編)茨城県教育委員会
喜多圭介1984a「筑波山東麓採集の旧石器(１)」旧石器考古学28所収旧石器文化談話会
喜多圭介1984b「筑波山東麓採集の旧石器(２)」旧石器考古学29所収旧石器文化談話会
西宮一夫1994「八郷町遺跡台帳№.１」八郷町教育委員会
西宮一夫1996「八郷町遺跡台帳№.２」八郷町教育委員会
西宮一夫1998「八郷町遺跡台帳№.３」八郷町教育委員会
海老澤稔他2005「八郷町史　第一編原始・古代」八郷町・八郷町史編さん委員会
日本旧石器学会2010「日本列島の旧石器時代遺跡」

第３章　調査の方法と基本層序

第１節　調査の方法

本遺跡の調査は県営畑地帯総合整備事業に伴い、石岡市教育委員会が事前に実施した試掘の結果に基づき開発区域全面が調査対象となった。まず表土除去は、遺構確認面となるローム層上面までバックホーを用いて除去した。その後、人力により遺構検出作業を行ったが、調査対象区域1,630㎡のうち約40％にあたる656.0㎡以上が後世の掘削を受けており、検出された遺構の半数以上に影響していた。しかし、遺構全面が削平されているわけではなく、全貌が明らかにできなかったものの、住居跡20軒、井戸跡１基、溝跡１条、土坑37基が確認された。これら撹乱を含めたすべての遺構確認図(1/200)を作図し、検出順に遺構番号を付した。なお、遺構番号については遺構の種類ごととし、表記方法は独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所の記号表記に準拠した。

また調査区には対象地全体に10mの方眼グリッドを設定し、調査および測量の基準とした。グリッドの設定は世界測地系Ⅸ系を用いて、基点を北西隅のX＝28750、Y＝39710に設定し、西から東にアルファベット(A～F)、北から南に算用数字(１～９)を付し、例えば北西隅グリッドを「１－A区」と呼称した。

検出された遺構のうち竪穴住居跡はほぼ中央を交点とする十字形畔の土層観察用ベルトを設定して掘り下げを行った。またカマドについては四分法を用い、竪穴住居跡の貯蔵穴や柱穴および土坑については半截して断面土層を記録した。また遺構平面図は遣り方実測にて作図し、遺物の出土状況もレベルを用いて３次元位置の記録をした後に取り上げを行った。竪穴住居跡、井戸跡、溝跡、土坑の平面図及び土層断面図・エレベーション図の縮尺は20分の1を基本とし、必要に応じて10分の１とし、さらにカマドの平面図・断面図は10分の１で作図した。

写真による記録として、遺構全景や断面すべて35mmの白黒フィルム及びカラースライドとデジタルカメラを用いて撮影した。

最後に出土遺物は、遺構別及び出土位置別に分類して遺物収納箱に収納し、番号を付して遺物一覧表・遺物収納箱一覧表を作成した。

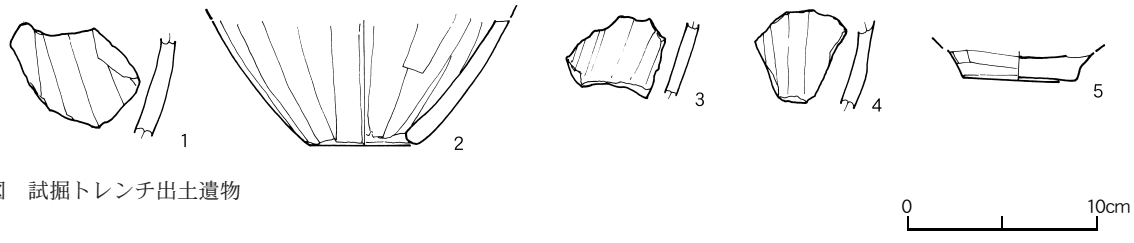
（大渕淳志）

第２節　試掘調査の成果（第４図）

石岡市教育委員会は、平成22年に県営畑地帯総合整備事業に伴いすでに周知されていた東成井山ノ神遺跡を含む周辺の開発区域内に229ケ所の試掘トレンチを設定し、古墳時代から奈良・平安時代の集落跡が検出された。しかし、当初の東成井山ノ神遺跡の範囲を超えて遺跡が拡がることが確認され、そのうち東側で確認された区域を新発見遺跡として県教育委員会へ「遺跡発見の通知」を提出し、「東成井東原遺跡」という新たな遺跡名が付けられた。

今回の発掘調査区域で検出された遺物はすべて土器の破片で45点を数える。時期は古墳時代～奈良・平安時代の土師器を主体に中・近世の土師質土器が出土した。本報告では実測可能な５点を抽出して掲載する。

１は土師器甕の脚部破片である。外面ヘラケズリ、内面はヘラナデである。２は土師器甑の底部破片である。底径は5.8cmを測る。外面ヘラケズリ、内面ヘラナデである。１・２は古墳時代後期の土器である。３は土師器甕の胴部破片である。外面はヘラナデ、内面ヘラナデである。４も土師器甕の胴部破片である。外面ヘラケズリ、内面ヘラナデである。５は土師器甕の底部破片である。底径は6.0cmを測る。外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ、底部へ



第４図　試掘トレンチ出土遺物

第５図　調査区および遺構配置図

ラケズリである。３～５は８～９世紀に比定される。

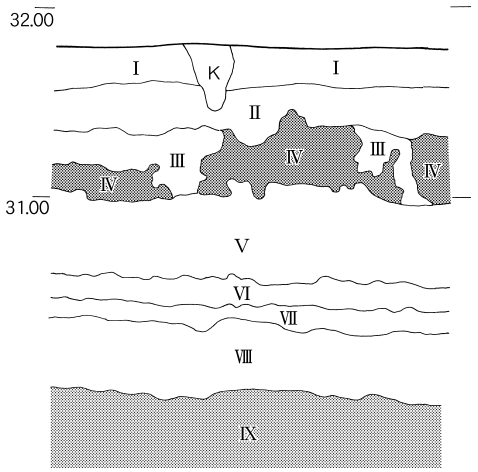
（大渕　由紀子）

第３節　基本層序（第６図）

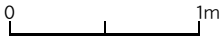
旧石器時代に係る文化層および基本土層を確認するために深掘調査区を設定した。設定地は、調査区東端にあたる４－Ｈ区の北西側壁面で観察を行った。表土はすでに削平され、検出上面であるⅠ層はにぶい黄褐色のハードローム層であった。しかも本層は第２黒色帯に相当するものと思われる。Ⅱ層はにぶい黄橙色ローム層で赤城‐鹿沼パミス粒をわずかに含んでいる。Ⅳ層が黄橙色パミス層で赤城－鹿沼パミス（Ag－Kp）堆積層である。Ⅴ層・Ⅵ層は締まりの強い堅緻なハードローム層。Ⅶ層・Ⅷ層も堅緻なハードローム層であるが褐鉄鉱粒を含み、Ⅸ層も褐鉄鉱粒を含む粘土層が堆積する

Ⅰ．にぶい黄褐色ローム層(10YR5/4)	ハードローム層。白色粒子を含み、堅緻である。層厚は20.0～24.0cmである。
Ⅱ．にぶい黄橙色ローム層(10YR7/4)	ハードローム層。黄橙色パミス粒をわずかに含む。層厚は14.0～26.0cmである。
Ⅲ．浅黄橙色ローミ層(7.5YR8/6)	黄橙色パミス粒を多く含む。締まりがある。Ⅳ層の漸移層に相当するものであろう。層厚は16.0～63.0cmである。
Ⅳ．黄橙色パミス層(10YR8/8)	赤城‐鹿沼パミス（Ａｇ‐Ｋｐ）堆積層である。締りがあるものの、粘性が弱い。層厚は15.0～40.0cmである。
Ⅴ．明黄褐色ローム層(10YR6/6)	ハードローム層。白色粒子を含み、堅緻である。層厚は40.0～48.0cmである。
Ⅵ．にぶい黄褐色ローム層(10YR5/4)	ハードローム層。堅緻で締まりがある。層厚は10.0～17.0cmである。
Ⅶ．黄褐色ローム層(10YR5/6)	褐鉄鉱粒をわずかに含む。堅緻である。層厚は5.0～14.0cmである。
Ⅷ．明褐色粘土層(7.5YR5/8)	褐鉄鉱粒を多量に含む。堅緻である。層厚は34.0～37.0cmである。
Ⅸ．にぶい橙色粘土層(7.5YR7/4)	茨城粘土層に相当する。灰白色粘土粒、褐鉄鉱粒を多量に含む。層厚は30.0cm以上を測る。

（小川和博）



第６図　基本層序



第４章　検出された遺構と遺物

第１節　概要

本遺跡は園部川左岸に立地し、西に谷津、東に緩傾斜面に挟まれた舌状台地の先端にあたる平坦面で、標高は32mを測る。調査面積は1,630㎡である。

調査の結果、竪穴住居跡20軒、井戸跡１基、溝跡１条、土坑37基を確認した。時期は古墳時代後期、奈良・平安時代と中・近世である。

遺物として、縄文土器、土師器、須恵器、土師質土器、陶器、鉄製品、石製品、銭貨等が出土している。

第２節　遺構外出土の縄文土器（第７図）

調査区内の遺構およびその周辺から縄文土器が出土した。１～５はいずれも縄文早期中葉の土器で、貝殻沈線文系土器群のうち、沈線文のみで文様を描出する一群である。すべて深鉢の胴部破片に相当する。１は細沈線文と太沈線文を組み合わせたもので、横位の多条細沈線文の下位に斜行する太沈線文が施文される。胎土に石英粒を多量に含有する。褐灰色を呈する。２は横位多条の太沈線文で、小破片のため継ぎ足し状施文はみられない。赤褐色を呈し、胎土に石英・長石粒を多量に含む。３は半截竹管状工具による平行沈線文でを施文する。胎土は微細な石英・長石粒を含み、浅黄橙色を呈する。４は縦位の細沈線文が施文されている。半截竹管状工具による平行沈線文であろう。胎土に石英粒を多く含み、にぶい褐色を呈する。５も縦位の細沈線文が施文されている。胎土に微細な石英粒を含み、浅黄橙色を呈する。これらは田戸下層式土器に比定される。

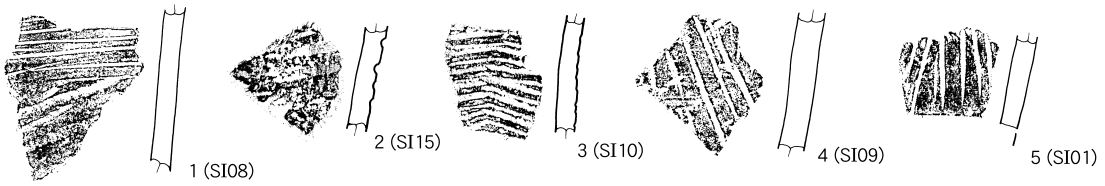
第３節　竪穴住居跡

SI01（第８～10図）

調査区北西隅、２－Ｂ区に位置する。西壁側が後世の攪乱により大きく掘削されている。平面形は方形を呈するものと推定され、検出された規模は北壁辺4.65m、東壁辺4.60mを測る。カマドは北壁中央に設置されており、主軸方向はN－20°－Wを指す。床面はほぼ平坦で、カマド前面から床中央に硬化面が認められる。壁面は外傾気味に立ち上がり、壁高は最大34.6cmである。壁溝は検出部で全周し、幅9.0～24.0cm、深さ1.9～4.0cmの断面Ｕ状を呈する。柱穴は３本検出され、いずれも主柱穴で、本来は４本主柱穴と推定される。北西部Ｐ１は南側が攪乱を受けており全貌は把握できない。現存径60.0×43.0cm、深さ66.8cmの楕円形を呈する。北東部Ｐ２は南側に大きく抜き取り痕がみられ、主径は41.0×40.0cm、深さ52.4cmの円形である。南東部Ｐ３も北西側に抜き取り痕があり、主径は35.0×24.0㎝、深さ52.1㎝の円形である。また北東隅に東西に長い長方形の貯蔵穴が設置しており、その規模は長軸61.0cm、短軸52.0cm、深さ30.5cmを測る。覆土は二層に分層でき、褐色土を主体とする自然堆積を示す。貯蔵穴の覆土は黒褐色土が堆積していた。３層は堀方で、埋土はほぼ全面貼床され踏み固めている。

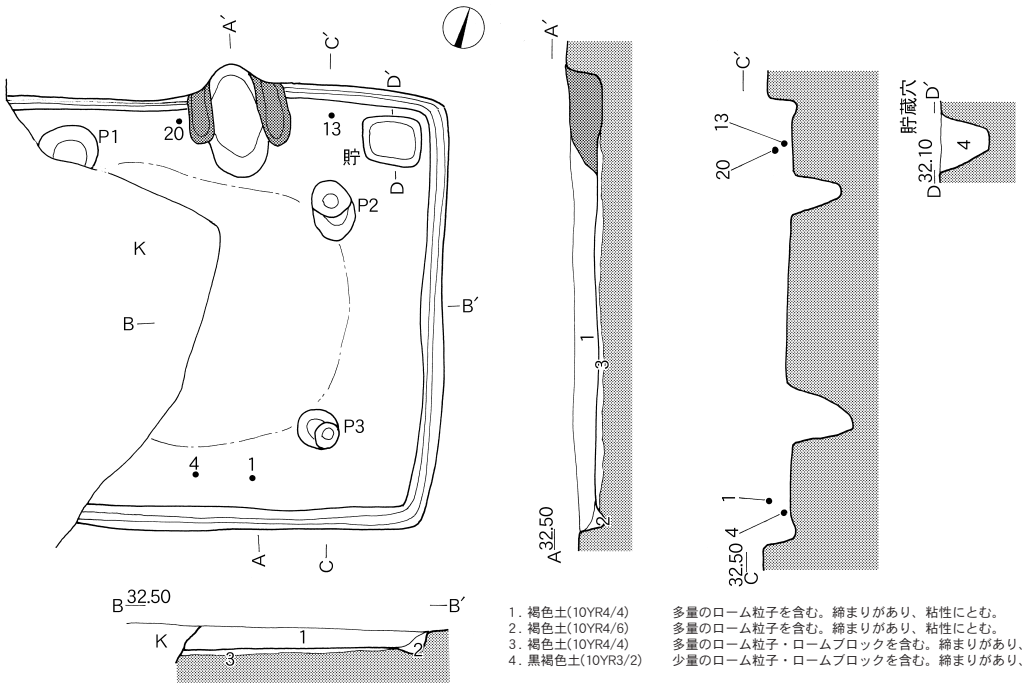
カマドは北壁中央に付設され、天井部は削平されているものの、遺存状態は比較的良好である。煙道部は壁を32.0cm程三角形状に掘り込んでいる。規模は焚口部から煙道部までの長さ106.0cm、検出された両袖部の最大幅106.0cm、高さ22.0cmを測る。袖部は褐灰色粘土と砂の混土で構築れている。火床部は長さ41.0cm、幅51.0cm、深さ14.0cmの楕円形を呈し、浅い擂鉢状に掘り込み、底面は被熱により赤変硬化している。

遺物はすべて土師器でカマド周辺および入り口部付近から出土している。

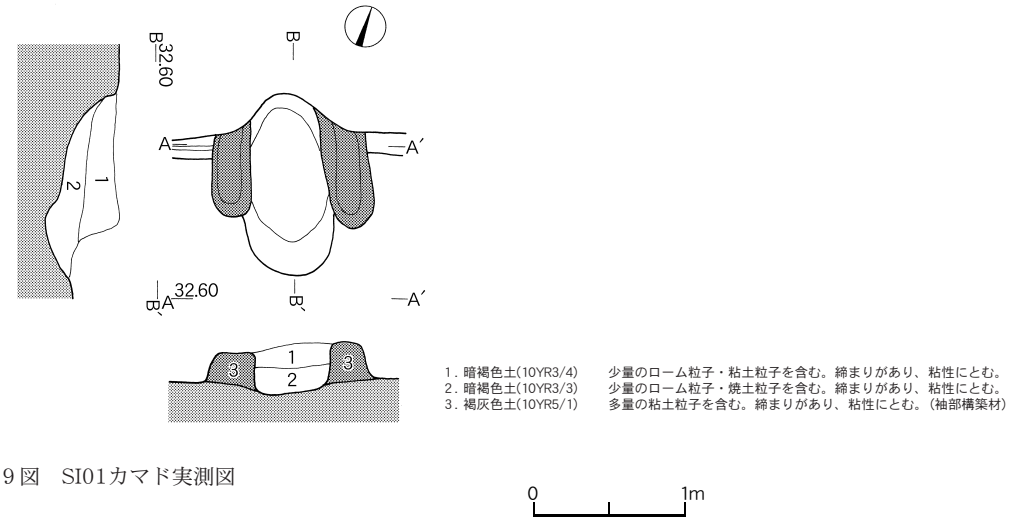


第７図　遺構外出土の縄文土器

0　10cm

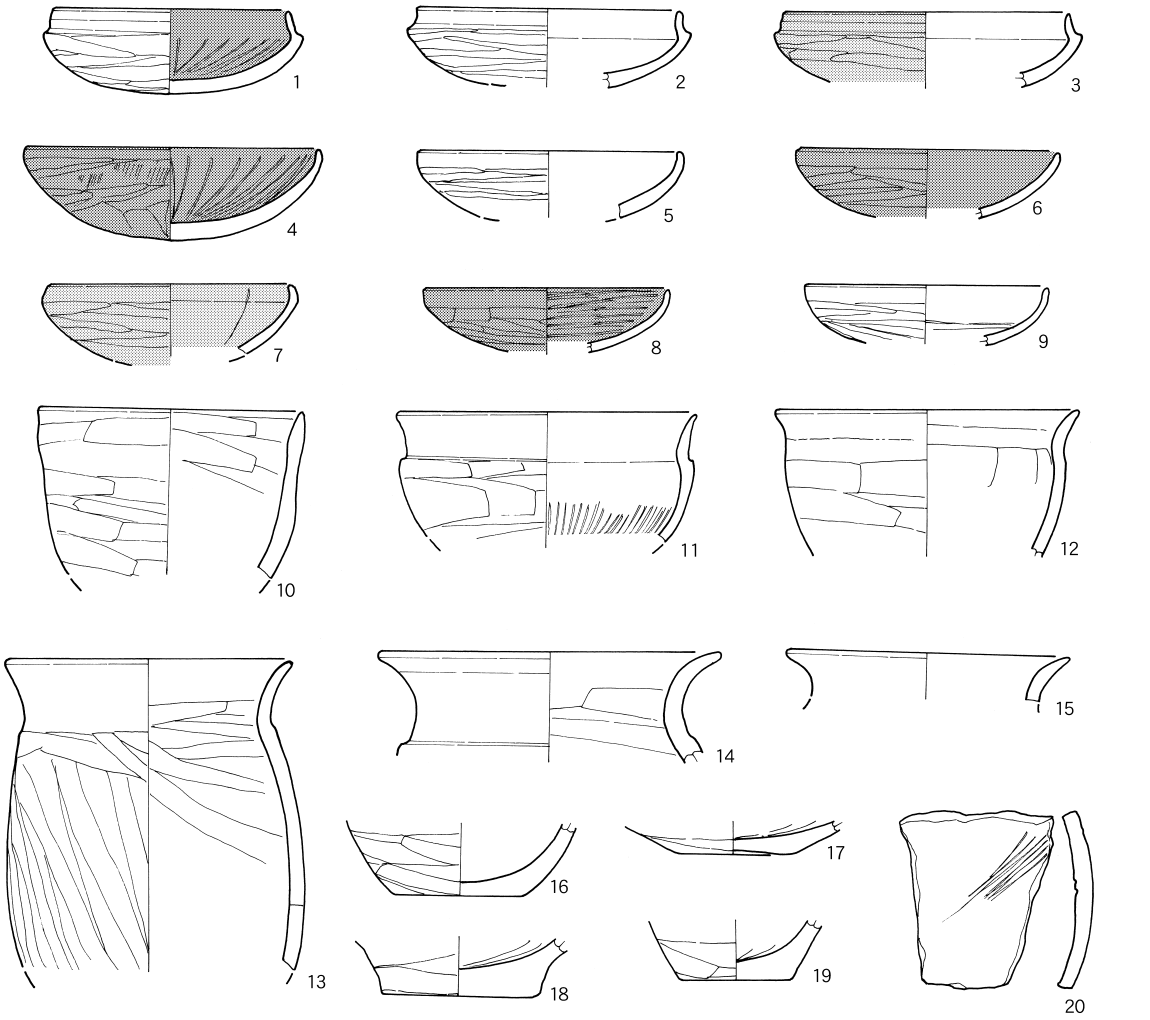


第８図　SI01実測図



第９図　SI01カマド実測図

１～９は坏である。１～３は坏身模倣坏で口縁部と体部の境に明瞭な稜をもち、丸底である。１は内面が線状ヘラミガキで、黒色処理が施されている。３は外面が赤彩されている。４～９は口縁部が短く直立し、底部は丸底である。なお、４は内面が線状ヘラミガキで、黒色処理が施されている。また７の口縁部は僅かに内傾し、赤彩されている。10～19は甕である。10は直口の甕で、深鉢形を呈する。11は口縁部と胴部の境に明瞭な稜をもち、胴部は内湾気味に立ち上がる。12は口縁部がわずかに外反し、胴部は内湾気味に立ち上がる。13は胴長で胴部との境に明瞭な稜をもち、口縁部は外反する。14は口縁部が大きく外反する。15は口縁部がわずかに外反する。16～19は底部破片である。20は甕の胴部破片で、内面に一方向で横断面V字状の擦痕がみられ、転用砥石として再利用されている。大きさは長さ9.1cm、幅7.5cm、厚さ0.8cm、重さ79.0gを測る。色調は外面がにぶい褐色、内面が浅



第10図　SI01出土遺物

黄橙色を呈し、胎土は石英・長石・黒色粒子を含有する。

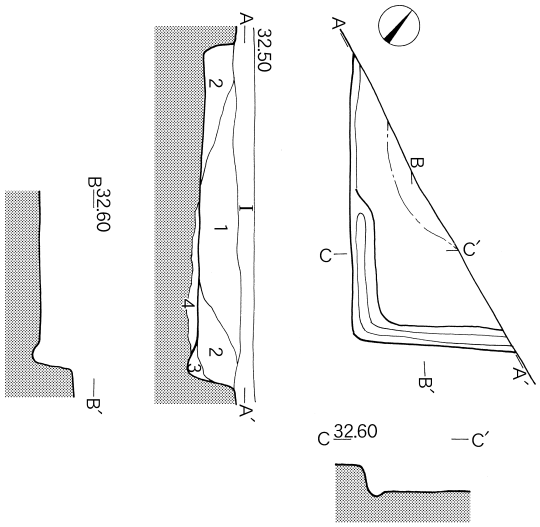
これら出土遺物から本跡の時期は６世紀後半と考えられる。

SI02（第11・12図）

調査区北西部、２－Ｃ区に位置する。北部大半が未調査区域に延びており、南西壁辺と南東壁辺の一部が確認できるのみであるが、平面形は方形を呈するものと推定される。検出された規模は南西壁辺3.0m、南東壁辺1.70mを測る。カマドは検出されていないが、北東壁辺に設置されているものとすると、主軸方向はN－44°－Wを指す。床面はほぼ平坦で、中央部と推定される箇所に硬化面が確認できる。壁面は外傾気味に立ち上がり、壁高は最大34.0cmであった。壁溝は南西壁辺南側と南東壁辺に認められ、その規模は幅23.0～26.0cm、深さ1.3～14.3cmの断面U状を呈する。柱穴およびカマドは確認できなかった。覆土は褐色土および黒褐色土の三層に分層でき、自然堆積を示す。４層は掘方で南側を中心に貼床され踏み固めている。

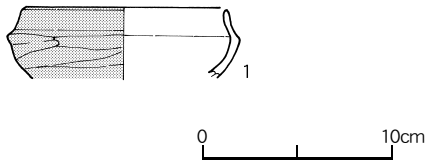
遺物は床面直上に少量散存する状況で出土している。いずれも土師器坏の破片で、坏身模倣坏で口縁部と体部の境に明瞭な稜をもち、丸底と推定され、赤彩が施されている。

この出土遺物から本跡の時期は６世紀後半と考えられる。



Ⅰ．褐灰色土(10YR4/1)　耕作土
1．褐色土(10YR4/4)　多量のローム粒子を含む。締まりがあり、粘性にとむ。
2．黒褐色土(10YR3/2)　少量のローム粒子、微量の焼土粒子を含む。締まりがあり、粘性にとむ。
3．褐色土(10YR4/6)　多量のローム粒子を含む。締まりがあり、粘性にとむ。
4．褐色土(10YR4/6)　多量のローム粒子・ロームブロックを含む。締まりがあり、粘性にとむ。（貼床構築土）

第11図　SI02実測図



第12図　SI02出土遺物

SI03（第13・14図）

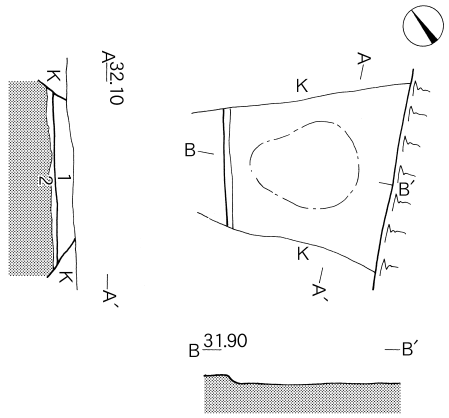
調査区南東部、５－Ｆ区に位置する。北東および南西部が後世の攪乱により大きく掘削され、南東部が未調査区域に延びているため、検出は北西壁辺の一部のみで、全体的に把握できない。遺存している平面形は台形状を呈し、確認された北西壁辺の規模は1.23m、床面の最大幅は南北軸で1.79mを測る。カマドは検出されていないが、北東壁辺に設置されているものとすると、主軸方向はN－42°－Wを指す。床面はほぼ平坦で、床中央に赤化した硬化面が認められる。壁面は外傾気味に立ち上がり、壁高は最大5.5.0cmである。壁溝および柱穴は検出されていない。覆土は暗褐色土の単層のみで自然堆積を示す。２層褐色土は掘方で、全面貼床され踏み固めている。

遺物は床面直上に少量散存する状況で出土している。いずれも土師器甕の破片である。１は口縁部がわずかに外傾し、胴部が内彎気味に立ち上がる。２は口縁部がくの字状に外反する。３は底部破片である。

これら出土遺物から本跡の時期は６世紀後半と考えられる。

SI04（第15 ～17図）

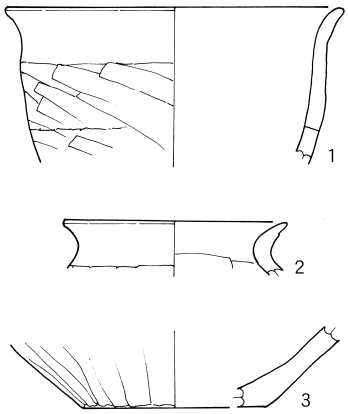
調査区北部、２－Ｄ区に位置する。北隅が未調査区域に延び、南半分が後世の攪乱により大きく掘削されている。平面形は方形を呈するものと推定され、検出された規模は東西軸2.82m、南北軸5.32mを測る。カマドは北西壁中央に設置されており、主軸方向はN－53°－Wを指す。床面はほぼ平坦で、硬化面は東側が顕著に認められる。壁面は外傾気味に立ち上がり、壁高は最大26.0cmである。壁溝は南東壁辺および北東壁辺の一部に構築され、その規模は幅13.0～21.0cm、深さ4.0～6.0cmで断面Ｕ字状を呈する。柱穴は2本検出され、いずれも主柱穴で、本来は４本主柱穴と推定される。北西部P1は径68.0×47.0cm、深さ64.3cmで南側に抜き取り跡がある。南東部P2は南西部に抜き取り跡があり、径83.0×64.0㎝、深さ54.8cmである。また貯蔵穴は北隅に設けられている。北部が未調査区域に延びているが、東西に長い楕円形を呈するものと推定できる。検出された規模は長軸64.5cm、短軸43.0cm、深さ44.5cmを測り、壁面は外傾して立ち上がり、底面は平坦であった。住居跡の覆土は三層に分層でき、褐色土を主体とする自然堆積を示す。貯蔵穴の覆土は黒褐色土が堆積していた。７層は掘方で、埋土はほぼ全面貼床され踏み固めている。



1．暗褐色土(10YR3/4)　少量のローム粒子、微量の焼土粒子を含む。締まりがあり、粘性にとむ。
2．褐色土(10YR4/6)　多量のローム粒子・ロームブロックを含む。締まりがあり、粘性にとむ。（貼床構築土）

第13図　SI03実測図

0　2m



第14図　SI03出土遺物

0　10cm

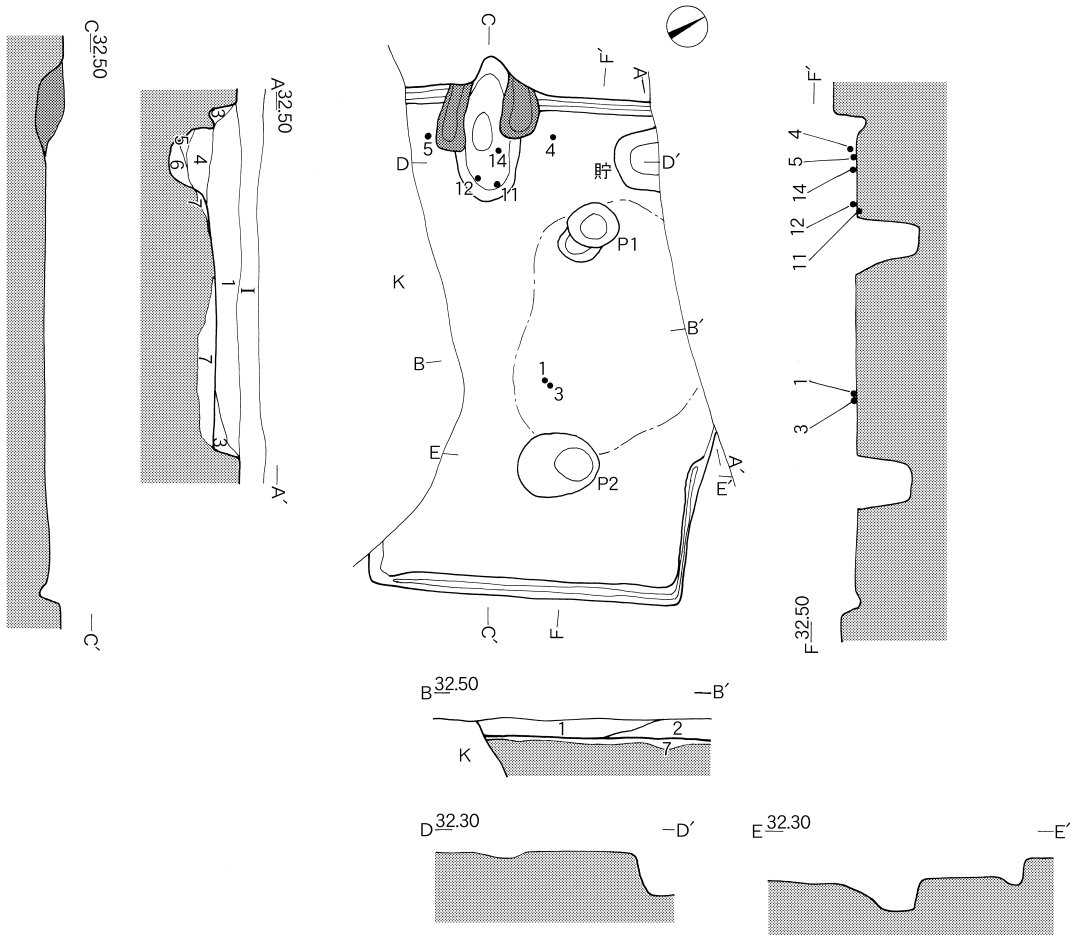
カマドは北西壁中央に付設されているものと推定される。天井部は削平されているものの、遺存状態は比較的良好である。煙道部は壁を41.0cm程三角形状に掘り込んでいる。規模は焚口部から煙道部までの長さ150.0cm、検出された両袖部の最大幅101.0cm、高さ19.0cmを測る。袖部はにぶい黄橙色粘土と砂の混土で構築れている。火床部は長さ65.0cm、幅55.0cm、深さ15.0cmの楕円形を呈し、浅い擂鉢状に掘り込み、底面は被熱により赤変硬化している。

遺物はカマド周辺でまとまって出土している。土師器と土製支脚が検出された。１～４は坏である。１～３は坏身模倣坏で口縁部と体部の境に明瞭な稜をもち、丸底と推定される。１・３は黒色処理、２は赤彩が施されている。４は口縁部がわずかに内傾し、黒色処理が施されている。５～10は甕である。５は胴部が球形を呈し、口縁部が外反する。７は最大径が口縁部にある。８・９は口縁部が僅かに外反し、胴部は直線的に外傾する。10は内湾気味の胴部下半部で、底部に木葉痕がみられる。11～13は甑である。11は底部が単孔式で胴部は直線的に外傾し口縁部は強く外反する。12も底部は単孔式で下端が内湾した後胴部は直線的に立ち上がり、口縁部は強く外反する。13は上半部の破片で、胴部は直線的に立ち上がり、口縁部は強く外反する。14は土製支脚である。上部を欠損するが、長方体を呈し、横断面は略方形で底部の横幅6.77cm、縦幅6.47cm、現存高13.45cmを測る。表面はユビナデによって整形されている。なお、底部は平坦ではなく、0.8cmほど球状に凹む。これは焼成後に削り加工したものである。胎土は石英・長石粒を含み、焼成は良好で堅緻である。色調はにぶい橙色を呈する。

これら出土遺物から本跡の時期は７世紀前半と考えられる。

SI05（第18～20図）

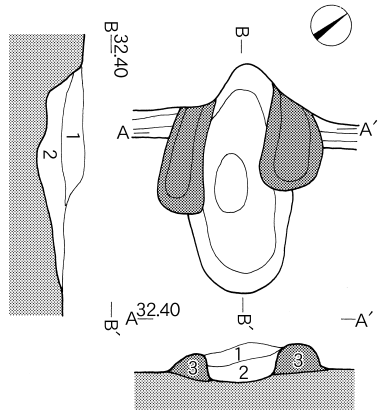
調査区中央部、３－Ｄ・Ｅ、４－Ｅ区に位置する。SI12を切り、南西部の大半が後世の攪乱により大きく掘削されている。平面形は方形を呈しているものと推定でき、検出された規模は北壁辺3.21m、東壁辺2.61mを測る。カマドは北壁中央に設置されており、主軸方向はN－11°－Wを指す。床面はほぼ平坦である。壁面は外傾気味に立ち上がり、壁高は最大28.0cmである。壁溝は東壁および北壁東寄りに認められ、その規模は幅18.0～30.0cm、深さ20.0cmで断面Ｕ字状を呈する。柱穴は１本検出され、主柱穴で円形を呈している。その規模はＰ１が径58.0×55.0cm、深さ55.3cmである。住居跡覆土は二層に分層でき、黒褐色土を主体とする自然堆積を示す。３層は柱穴の覆土である。４層は掘方で、埋土はほぼ全面貼床され踏み固めている。



Ⅰ. 褐灰色土(10YR4/1)　耕作土
1. 褐色土(10YR4/1)　少量のローム粒子を含む。締まりがあり、粘性にとむ。
2. 褐色土(10YR4/4)　多量のローム粒子を含む。締まりがあり、粘性にとむ。
3. 暗褐色土(10YR3/3)　多量のローム粒子・ロームブロックを含む。締まりがあり、粘性にとむ。
4. 褐色土(10YR4/4)　多量のローム粒子、少量のロームブロックを含む。締まりがあり、粘性にとむ。（貯蔵穴）
5. 褐色土(10YR4/6)　多量のローム粒子、少量のロームブロックを含む。締まりがあり、粘性にとむ。（貯蔵穴）
6. 褐色土(10YR4/6)　多量のローム粒子・ロームブロックを含む。締まりがあり、粘性にとむ。（貯蔵穴）
7. 褐色土(10YR4/6)　多量のローム粒子・ロームブロックを含む。締まりがあり、粘性にとむ。（貼床構築土）

0　2m

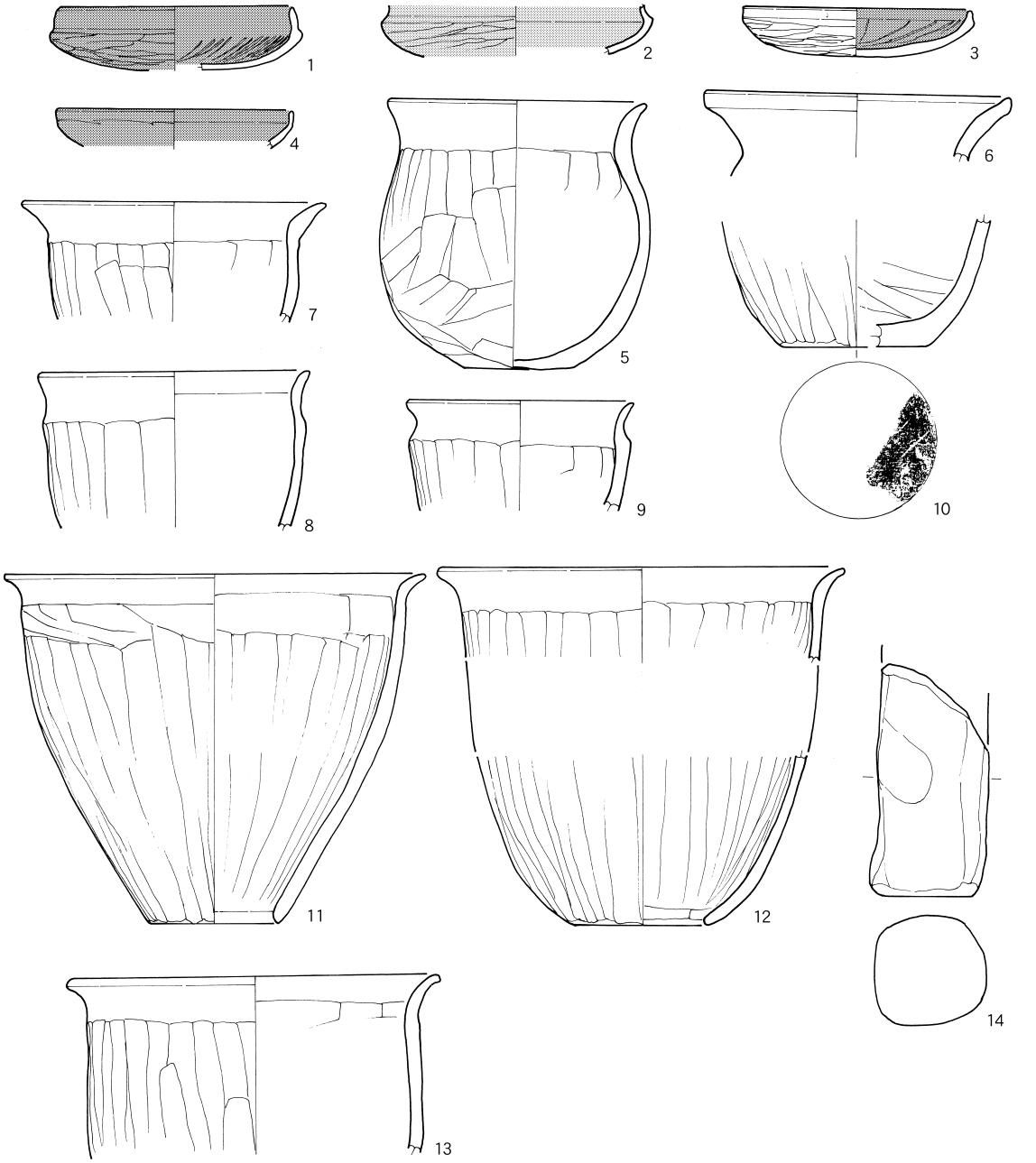
第15図　SI04実測図



1. にぶい黄褐色土(10YR5/3) 少量のローム粒子・焼土粒子・粘土粒子を含む。締まりがあり、粘性にとむ。
2. 灰黄褐色土(10YR4/2)　少量のローム粒子、多量の焼土粒子を含む。締まりがあり、粘性にとむ。
3. にぶい黄橙色土(10YR6/3) 多量の粘土粒子を含む。締まりがあり、粘性にとむ。（袖構築材）

第16図　SI04カマド実測図

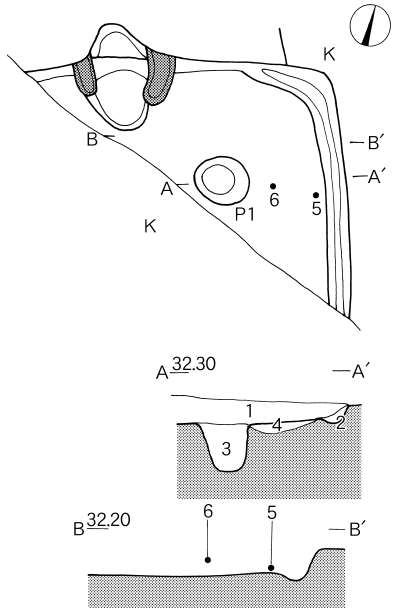
0　1m



第17図　SI04出土遺物

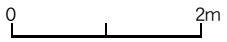
カマドは北壁中央に付設され、天井部は削平されているものの、遺存状態は比較的良好である。煙道部は壁を35.0cm程三角形状に掘り込んでいる。規模は焚口部から煙道部までの長さ122.0cm、検出された両袖部の最大幅105.0cm、高さ18.0cmを測る。袖部は灰黄褐色粘土と砂の混土で構築れている。火床部は長さ83.0cm、幅50.0cm、深さ12.0cmの楕円形を呈し、浅い擂鉢状に掘り込み、底面は被熱により赤変硬化している。

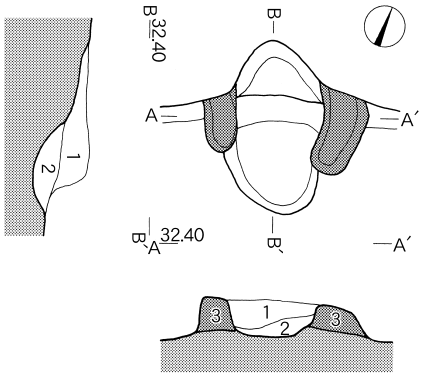
遺物は北西部で出土しており、土師器、須恵器が検出された。１・２は土師器甕である。口縁部破片で、体部は僅かに内彎して立ち上がり、口縁部は強く外反し、口唇部端は短く摘み上げられている。３～６は須恵器である。３・４は坏で、いずれもロクロ成形である。５・６は蓋である。５は擬宝珠状の紐部が付き、天井部は回転ヘラケ



1．黒褐色土(10YR2/3)　少量のローム粒子を含む。締まりがあり、粘性にとむ。
2．暗褐色土(10YR3/4)　多量のローム粒子を含む。締まりがあり、粘性にとむ。
3．暗褐色土(10YR3/4)　多量のローム粒子・ロームブロックを含む。締まりがあり、粘性にとむ。
4．褐色土(10YR4/6)　多量のローム粒子・ロームブロックを含む。締まりがあり、粘性にとむ。（貼床構築材）

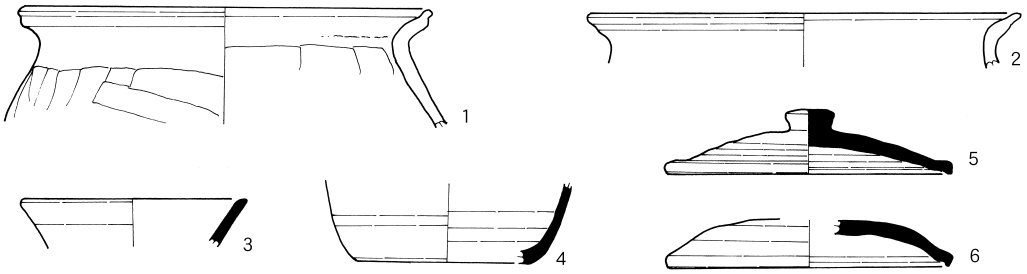
第18図　SI05実測図





1．暗褐色土(10YR3/3)　少量のローム粒子・焼土粒子を含む。締まりがあり、粘性にとむ。
2．暗褐色土(10YR3/3)　少量のローム粒子、多量の焼土粒子を含む。締まりがあり、粘性にとむ。
3．灰黄褐色土(10YR5/2)　多量の粘土粒子を含む。締まりがあり、粘性にとむ。（袖構築土）

第19図　SI05カマド実測図



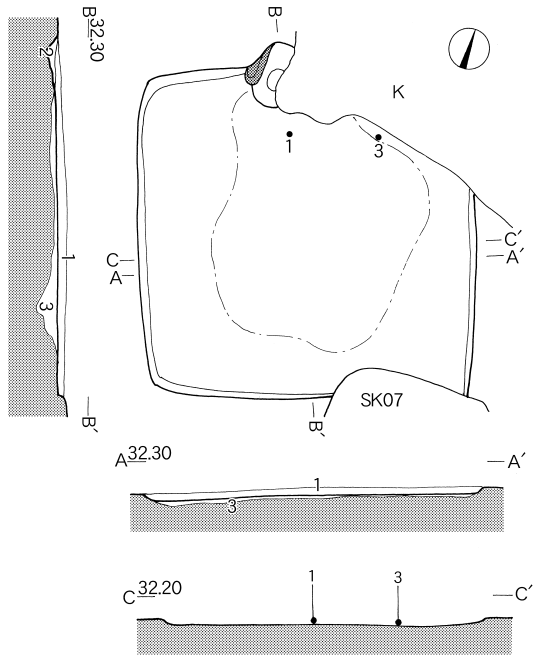
第20図　SI05出土遺物

ズリである。新治窯産と考えられる。６は紐分を欠損しているが、天井部は回転ヘラケズリである。岩間窯産と推定される。

これら出土遺物から本跡の時期は９世紀前半と考えられる。

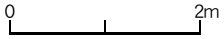
SI06（第21～23図）

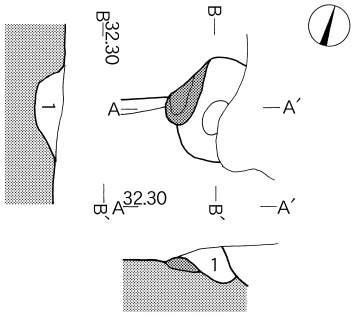
調査区中央部、４－Ｄ区に位置する。北東隅が後世の攪乱により大きく掘削され、南東隅は土坑SK07によって切られている。確認できる平面形は方形を呈し、その規模は東西軸4.48m、南北軸4.31mを測る。カマドは北壁やや西寄りに設置されており、主軸方向はN－13°－Wを指す。床面はほぼ平坦で、カマド前面から床中央に硬化面が認められる。壁面は外傾気味に立ち上がり、壁高は4.0cmである。柱穴および壁溝は検出されていない。覆土は褐色土の二層で自然堆積の状態を示していた。３層は掘方で、埋土はほぼ全面貼床され踏み固めている。カマドは



1．褐色土(10YR4/6)　多量のローム粒子を含む。締まりがあり、粘性にとむ。
2．暗褐色土(10YR3/3)　少量のローム粒子を含む。締まりがあり、粘性にとむ。
3．褐色土(10YR4/6)　多量のローム粒子・ロームブロックを含む。締まりがあり、粘性にとむ。（貼り床構築土）

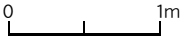
第21図　SI06実測図

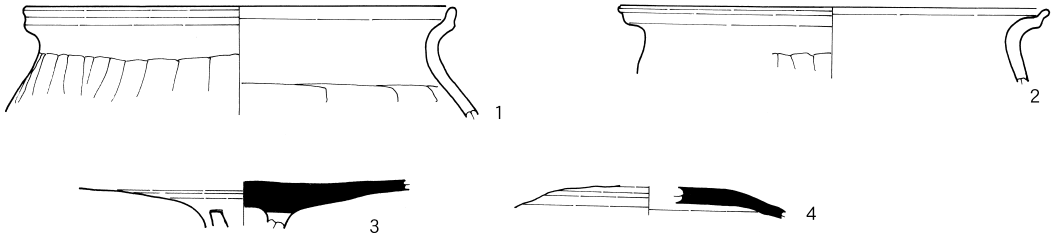




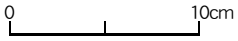
1．暗褐色土(10YR3/4)　少量のローム粒子・焼土粒子・粘土粒子を含む。締まりがあり、粘性にとむ。
2．褐色土(10YR4/4)　少量のローム粒子・焼土粒子を含む。締まりがあり、粘性にとむ。（袖構築材）

第22図　SI06カマド実測図





第23図　SI06出土遺物



北壁に設置されており、東側半分が大きく撹乱を受けている。したがって、右袖部および天井部は削平されており、遺存状態は不良である。煙道部は壁を30.0cm程半円形状に掘り込んでいる。規模は焚口部から煙道部までの長さ64.0cm、検出された両袖部の最大幅39.0cm、高さ15.0cmを測る。袖部は褐色粘土と砂の混土で構築れている。火床部は長さ55.0ｃcm、幅25.0cm、深さ16.0cmの楕円形を呈し、浅い擂鉢状に掘り込み、底面は被熱により赤変硬化している。

遺物は住居跡床面上から出土しており、土師器、須恵器が検出された。１・２は土師器甕の口縁部破片である。口縁部は強く外反し、口唇部端は短く摘み上げられている。３・４は須恵器である。３は高坏である。坏部下半と脚部の一部が残存している。脚部には透かし孔がみられる。新治窯産である。４は蓋である。紐部は欠損している。天井部は回転ヘラケズリである。新治窯産である。

これら出土遺物から本跡の時期は９世紀前葉と考えられる。

SI07（第24・25図）

調査区北部、２－Ｄ・Ｅ、３－Ｄ・Ｅ区に位置する。北部がSK20によって大きく破壊されている。平面形は方形を呈し、確認できる規模は東西軸4.32m、南北軸4.57mを測る。カマドが北壁辺に設置されているものとすると、主軸方向はN－15°－Eを指す。床面はほぼ平坦で、攪乱をうけていない部分には硬化面が認められる。壁面は外傾気味に立ち上がり、残存壁高は最大17.0cmである。壁溝は北壁東部に間欠部が認められるものの、ほぼ全周し、その規模は幅13.5～42.0cm、深さ0.2～7.0cmで断面Ｕ字状を呈する。柱穴および壁溝は確認できなかった。覆土は二層に分層でき、暗褐色土を主体とする自然堆積を示す。また３層は掘方で、埋土はほぼ全面貼床され踏み固めている。

遺物は住居跡床面上から出土しており、土師器、須恵器および土製支脚が検出された。１は土師器有台坏の底部破片である。内面に黒色処理が施されている。２・３は土師器甕である。２は口縁部破片で、口縁部は強く外反し、口唇部端は短く摘み上げられている。３は底部破片で、木葉痕をもつ。４～９は須恵器である。４・５・７は坏で、ロクロ成形である。７は体部下端が手持ちヘラケズリで、底部もヘラケズリである。新治窯産である。６は有台坏で、新治窯産である。８蓋である。紐部は欠損している。天井部は回転ヘラケズリである。新治窯産である。９は長頸瓶の肩部破片である。肩部に自然釉が掛かっている。10は土製支脚である。下部のみ残存するが、砲弾形を呈するものと推定される。横断面は円形で底部に向かって太くなっている。底部径は8.75cm、現存高8.70cmを測る。表面は手捏ね整形されている。胎土は石英・長石粒を含み、焼成は良好で堅緻である。色調はにぶい橙色を呈する。

これら出土遺物から本跡の時期は９世紀前葉と考えらる。

SI08（第26～28図）

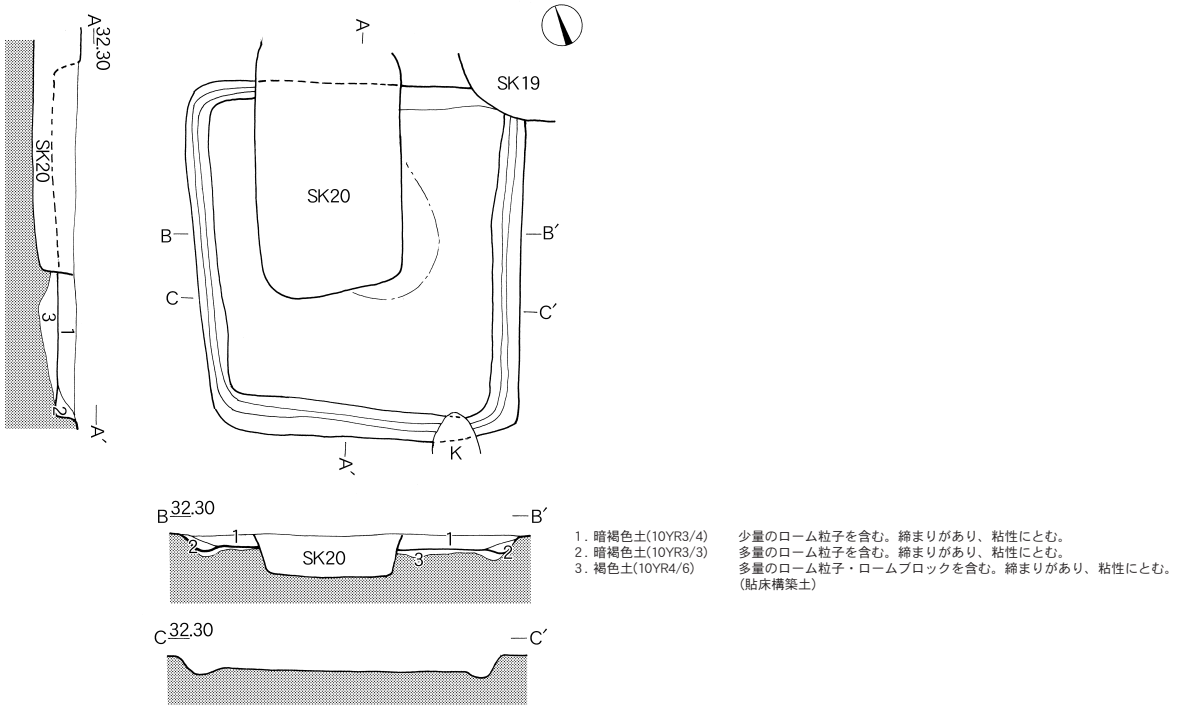
調査区西部、３－Ｂ・Ｃ、４－Ｂ・Ｃ区に位置する。南西部が後世の攪乱により掘削され、北東部がSK37、南東部がSK12によって切られている。しかも覆土上面も削平されて、遺構の確認で既に床面が露出し、もしくは削平されている状態であった。平面形は東西にやや長い方形を呈し、検出された規模は東西軸5.78m、南北軸4.71mを測る。カマドは北東壁に設置されているものとすると、主軸方向はN－29°－Eを指す。床面はほぼ平坦で、壁面は僅かに立ち上がり、壁高は最大4.0cmである。壁溝および柱穴は検出できなかった。覆土は暗褐色土の単層のみであるが、自然堆積の状態を示していた。２層は掘方で、埋土はほぼ全面貼床され踏み固めている。なお、掘方の状況は南西部と南部の一部を陸状に残し、18.0～24.0cmを掘削し、掘削部に多量のローム粒子を含む褐色土を貼床として堅く踏み固めていた。

遺物として土師器が覆土中から出土している。１は甕の胴部小破片である。外面はヘラケズリ、内面はヘラナデが施されている。古墳時代後期に比定される。

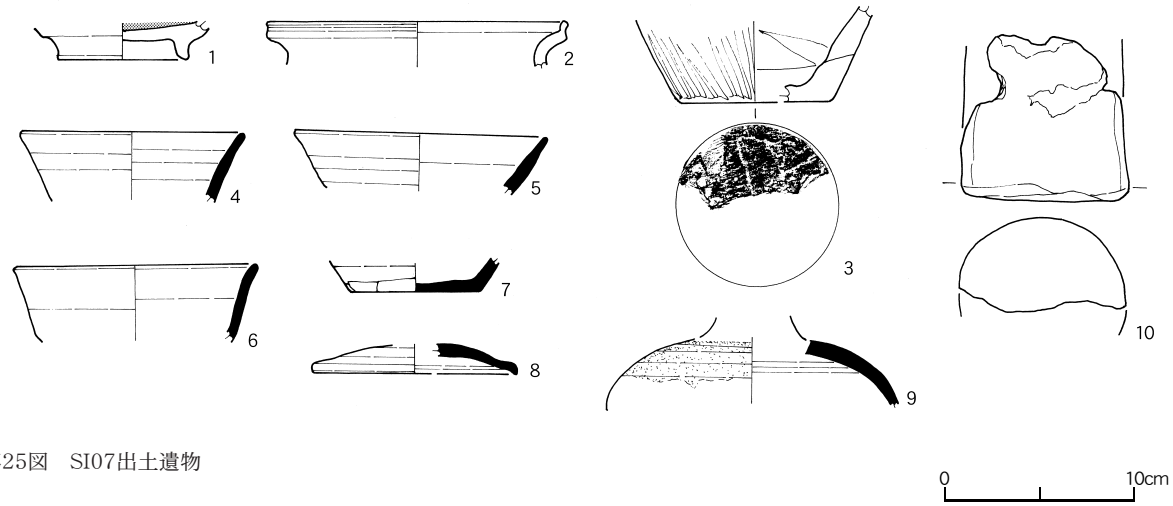
SI09（第29～31図）

調査区の北部、２－Ｅ、３－Ｅ区に位置する。北隅が未調査区域に延び、さらに土坑SK25に切られ、また南壁辺の一部が土坑SK24に切られている。平面形は方形を呈し、その規模は東西軸4.86m、南北軸4.93mを測る。カマドは北西壁中央に設置されており、主軸方向はN－37°－Wを指す。床面はほぼ平坦で、カマド前面から床中央に硬化面が認められる。壁面は外傾気味に立ち上がり、壁高は最大30.0cmである。壁溝は土坑重複部分を除き、ほぼ全周し、規模は幅16.0～27.0cm、深さ2.7～7.0cmで断面Ｕ字状を呈する。柱穴は4本検出され、いずれも主柱穴で円形を呈している。その規模はＰ１が径42.0×40.0cm、深さ46.0cm、Ｐ２が径41.0×37.0cm、深さ57.2cm、Ｐ３が径50.0×36.0cm、深さ71.7cm、Ｐ４が径45.0×42.0cm、深64.7cmである。覆土は暗褐色土を基調とした三層に分層され、自然堆積の状態を示していた。４層は堀方で、埋土はほぼ全面貼床され踏み固めている。

カマドは北西壁中央に付設され、天井部は削平されているものの、遺存状態は良好である。煙道部は壁を



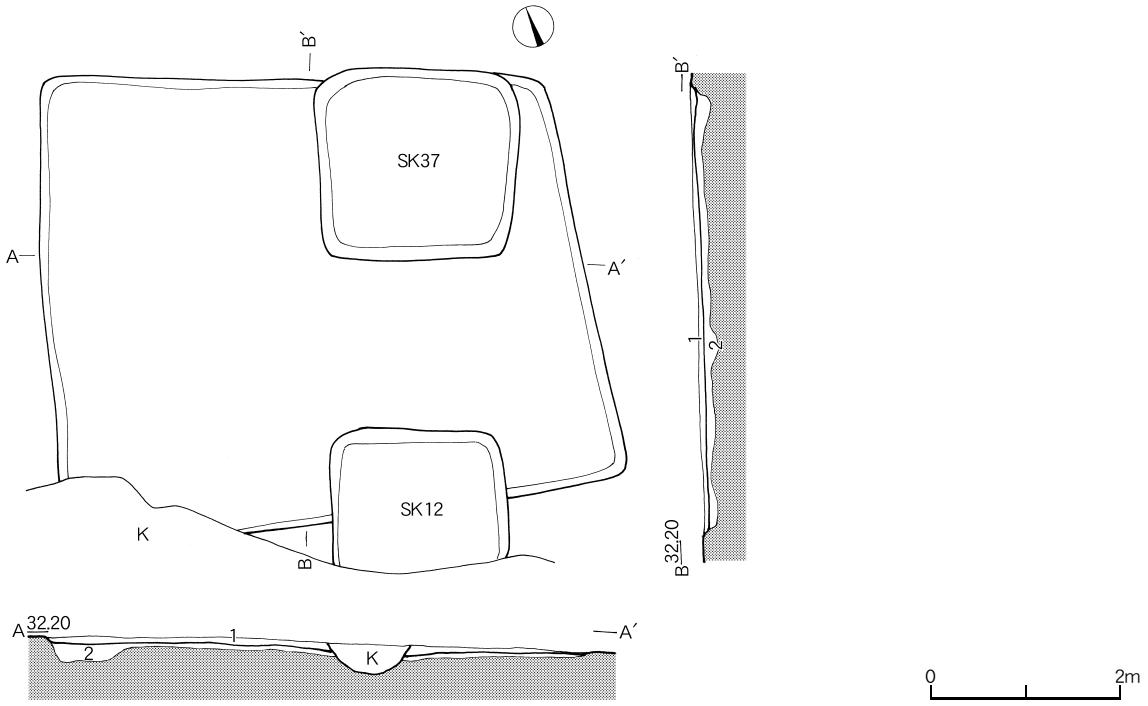
第24図　SI07実測図



第25図　SI07出土遺物

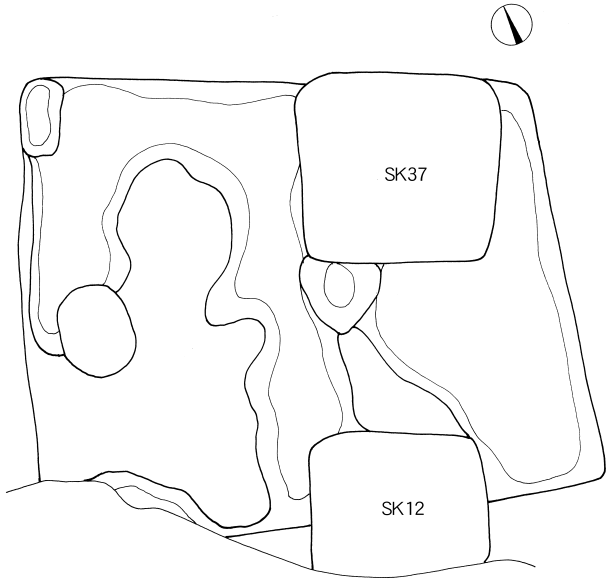
25.0cm程半円形状に掘り込んでいる。規模は焚口部から煙道部までの長さ110.0cm、検出された両袖部の最大幅89.0cm、高さ20.0cmを測る。袖部は灰黄褐色粘土と砂の混土で構築れている。火床部は長さ85.5cm、幅55.0cm、深さ20.0cmの楕円形を呈し、浅い擂鉢状に掘り込み、底面は被熱により赤変硬化している。

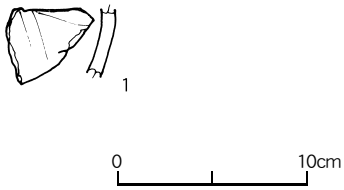
遺物は住居跡北部からカマド西側の床面直上から多くが出土している。出土遺物は土師器、石製品で土師器はいずれも破損品である。１～14は土師器である。１・２は坏で、１は丸底から体部は内灣気味に立ち上がり、口縁部は短く直立する。２は丸底の底部破片である。十字ヘラ記号が施されている。３は小形甕である。口縁部と胴部



1．暗褐色土(10YR3/4)　少量のローム粒子を含む。締まりがあり、粘性にとむ。
2．褐色土(10YR4/4)　多量のローム粒子を含む。締まりがあり、粘性にとむ。（貼床構築土）

第26図　SI08実測図

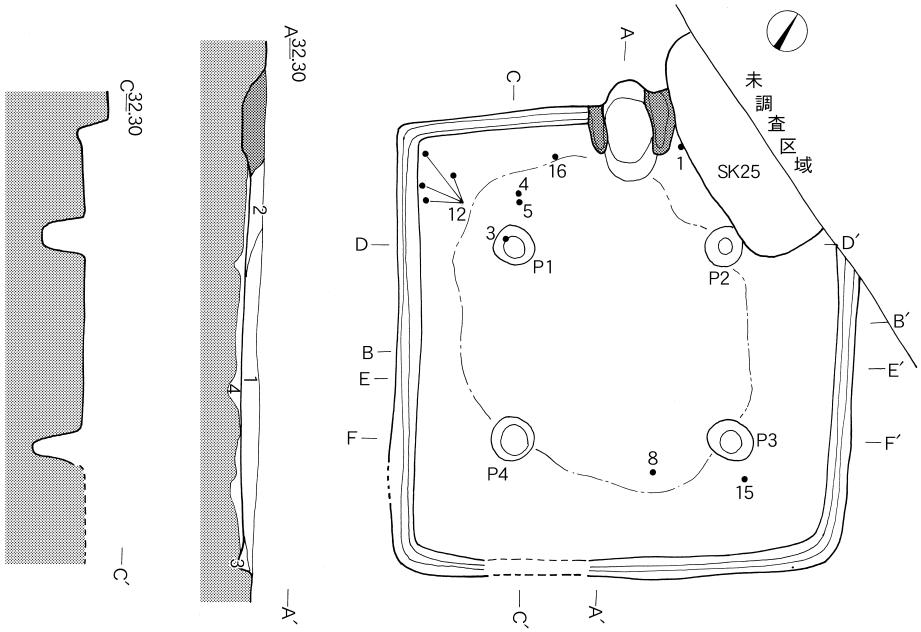


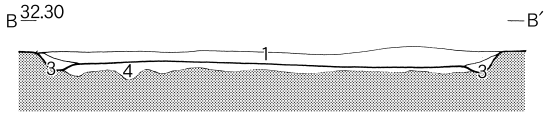


第28図　SI08出土遺物

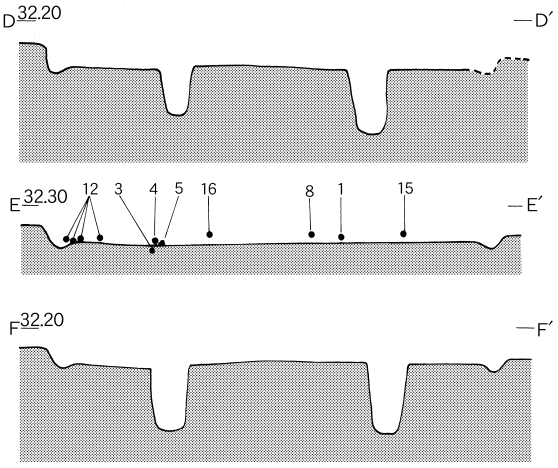
第27図　SI08掘形実測図

0　2m

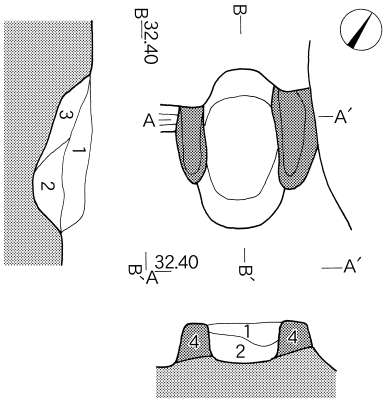




1．暗褐色土(10YR3/4)　少量のローム粒子・粘土粒子を含む。締まりがあり、粘性にとむ。
2．暗褐色土(10YR3/3)　少量のローム粒子・焼土粒子を含む。締まりがあり、粘性にとむ。
3．褐色土(10YR4/6)　多量のローム粒子を含む。締まりがあり、粘性にとむ。
4．褐色土(10YR4/6)　多量のローム粒子・ロームブロックを含む。締まりがあり、粘性にとむ。（貼床構築土）



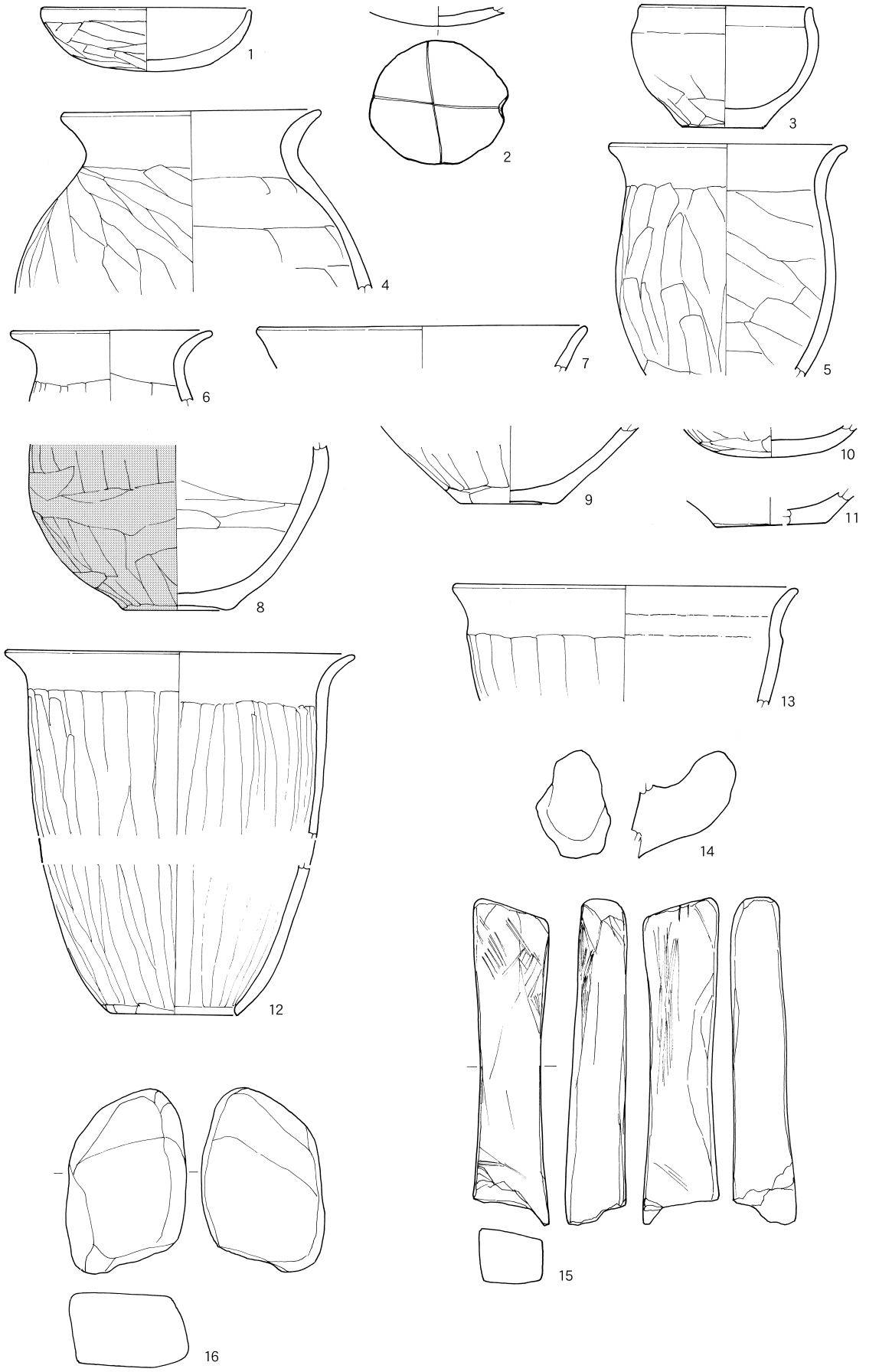
第29図　SI09実測図



1．にぶい黄橙褐色土(10YR6/3) 少量のローム粒子・焼土粒子、多量の粘土粒子を含む。締まりがあり、粘性にとむ。
2．暗褐色土(10YR3/4)　少量のローム粒子・焼土粒子を含む。締まりがあり、粘性にとむ。
3．にぶい黄褐色土(2.5YR4/4) 少量のローム粒子、多量の焼土粒子を含む。締まりがあり、粘性にとむ。
4．灰黄褐色土(10YR5/2)　多量の粘土粒子を含む。締まりがあり、粘性にとむ。（袖構築材）

0　1m

第30図　SI09カマド実測図



第31図　SI09出土遺物

の境に明瞭な稜をもつ。胴部は内彎して立ち上がり、口縁部は短く直立する。４～11は甕である。４は球形の胴部に口縁部がくの字状に外反する。５・６は胴長の胴部に口縁部が外反する。８はやや上げ底込の底部から球形の胴部へ移行する。外面に赤彩が施されている。９～11は底部破片である。12～14は甑である。12は単孔式の甕形で、胴部下端で内彎し、胴部は直線的に開き、口縁部は大きく外反する。13は口縁部と胴部の境に明瞭な稜をもつ。胴部は直線的に外傾し、口縁部が外反する。14は甑把手である。手捏ねによる成形である。15は凝灰岩製の砥石で、下端を欠損している。長さ22.75cm、最大幅5.18cm、最大高4.13cm、重さ769.0gを測る。上部小口に原面を残すほかは４面に研磨面をもつ。表裏面はほぼ平坦な研磨面、また両側面は研ぎ減りして緩いカーブを描く。尚、表裏面には刃研き擦痕がみられる。16角閃岩製の砥石である。円礫をそのまま利用している。長さ13.19cm、最大幅8.47cm、最大高5.0cm、重さ869.0gを測る。表面は研磨面で若干の凹面がみられ、両側面も研磨面が観察できる。

これら出土遺物は６世紀後半と考えられる。

SI10（第32・33図）

調査区西部、３－Ｂ・Ｃ区に位置する。東半分が後世の攪乱により大きく掘削されている。検出された平面形は方形を呈するものと推定され、その規模は西壁辺3.24m、南壁辺2.25mを測る。カマドは確認できないものの、北壁辺に設置されているものとすると、主軸方向はN－18°－Wを指す。床面はほぼ平坦で、検出された床中央に硬化面が認められる。壁面は外傾気味に立ち上がり、壁高は最大12.0cmである。壁溝は検出部で全周し、幅18.0～29.0cm、深さ4.0～5.1cmで、断面U字状を呈する。覆土は暗褐色土を基調とする二層に分層でき、自然堆積を示す。３層は掘方で、埋土はほぼ全面貼床され踏み固めている。

遺物は住居跡覆土中で散在して出土しており、土師器、須恵器が検出された。１は土師器坏である。底部破片で、ロクロ成形。体部下端は回転ヘラケズリである。内面は黒色処理され、ヘラミガキが施されている。また底部には「木上ヵ」が墨書されている。２・３は須恵器である。２は甕の底部破片である。外面はヘラケズリが施されている。３は甕の肩部付近の破片。自然釉が掛かっている。

これら出土遺物は９世紀前半と考えられる。

SI11（第34図）

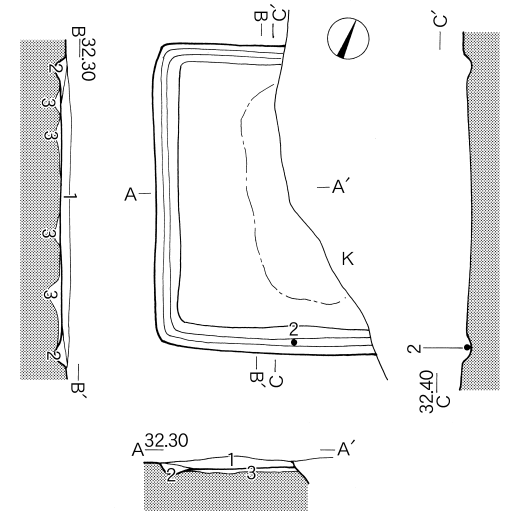
調査区北東部、４－Ｈ区に位置する。大半は未調査区域に延び、北西隅部のみ確認できた。平面形は方形を呈しているものと推定する。検出された規模は北壁辺0.90m、西壁辺0.68mを測る。カマドは確認できないものの、北壁辺に設置されているものとすると、主軸方向はN－５°－Wを指す。床面はほぼ平坦で、壁面は外傾気味に立ち上がり、壁高は最大7.0cmである。柱穴および壁溝は検出できていない。覆土は褐色土の単層で自然堆積の状態を示していた。２層は掘方で、埋土はほぼ全面貼床され踏み固めている。

本跡から遺物の出土はなく、時期は不明である。

SI12（第35～37図）

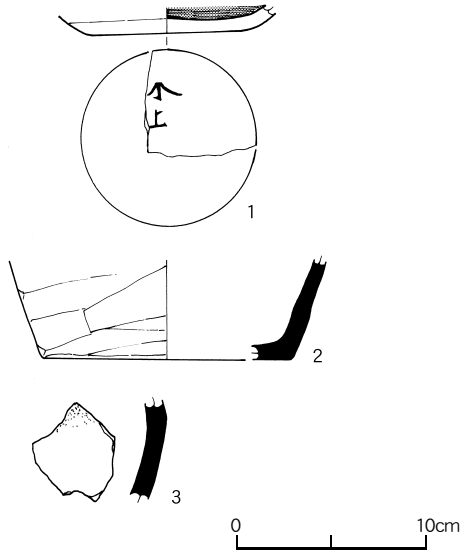
調査区中央部、３－Ｄ・Ｅ区に位置する。南東部が住居跡SI05に、東部が土坑SK32・35・36に切られ、北隅および南部が後世の攪乱により大きく掘削されている。平面形は方形を呈するものと推定される。検出された規模は東西軸3.55m、南北軸2.80mを測る。北西壁辺にカマドが設置しており、主軸方向はN－25°－Wを指す。床面はほぼ平坦で、カマド前面に硬化面が認められる。壁面は外傾気味に立ち上がり、残存壁高は最大12.0cmである。柱穴は2本検出され、いずれも主柱穴で円形を呈している。その規模は北西部Ｐ１が径38.0×38.0cm、深さ34.9cm、北東部Ｐ２が径34.0×28.0cm、深さ53.5cmである。壁溝は検出できなかった。覆土は褐褐色土の単層で自然堆積の状態を示していた。２層は掘方で、埋土はほぼ全面貼床され踏み固めている。

カマドは北壁中央に付設され、天井部は削平されているものの、遺存状態は比較的良好である。煙道部は壁を13.0cm程半円形状に掘り込んでいる。規模は焚口部から煙道部までの長さ95.0cm、検出された両袖部の最大幅94.0cm、高さ7.0cmを測る。袖部は灰黄褐色粘土と砂の混土で構築れている。火床部は長さ77.0cm、幅62.0cm、

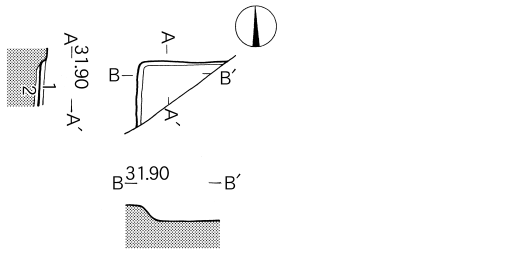


1．暗褐色土(10YR3/4)　少量のローム粒子を含む。締まりがあり、粘性にとむ。
2．褐色土(10YR4/6)　少量のローム粒子を含む。締まりがあり、粘性にとむ。
3．褐色土(10YR4/6)　多量のローム粒子・ロームブロックを含む。締まりがあり、粘性にとむ。（貼床構築土）

第32図　SI10実測図



第33図　SI10出土遺物



1．褐色土(10YR4/4)　少量のローム粒子を含む。締まりがあり、粘性にとむ。
2．褐色土(10YR4/6)　多量のローム粒子・ロームブロックを含む。締まりがあり、粘性にとむ。（貼床構築土）

第34図　SI11実測図

深さ5.0cmの楕円形を呈し、浅い擂鉢状に掘り込み、底面は被熱により赤変硬化している。

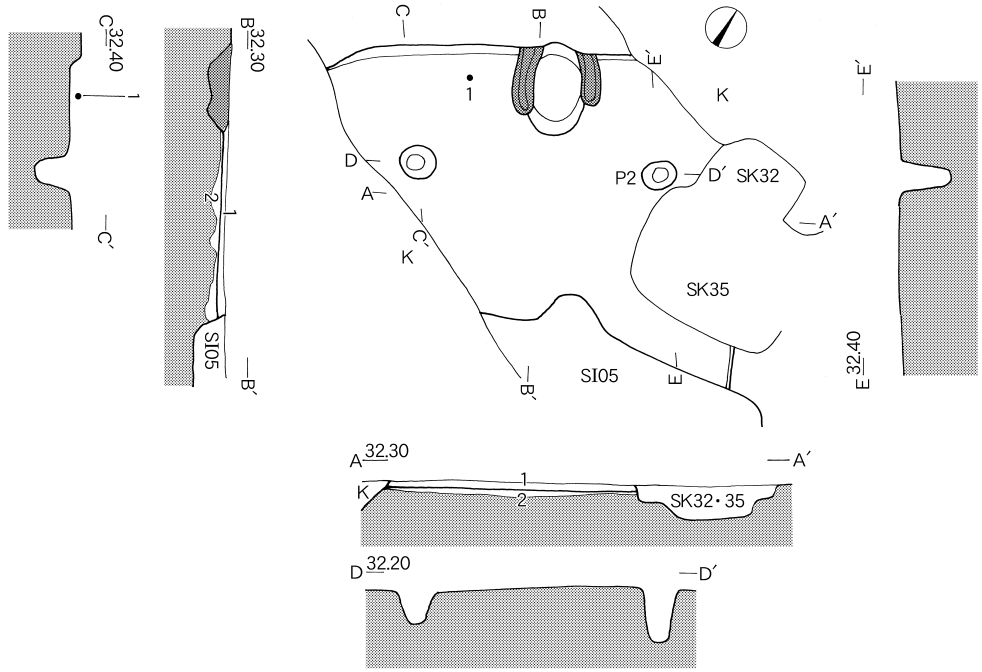
遺物は床面上に散存する状況で出土している。出土遺物は少なくすべて土師器で破損品である。１は須恵器坏身模倣坏である。口縁部と体部の境に明瞭な稜をもち、平底に近い底部から体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は内傾する。黒色処理が施されている。２は高坏の坏部破片である。坏部の体部と口縁部の境には明瞭な稜をもち、口縁部は大きく開く。３・４は甕である。3は口縁部破片で、外反する。４は底部破片である。

これら出土遺物は６世紀後半と考えられる。

SI13（第38～40図）

調査区中央南部、４－Ｄ・Ｅ、５－Ｄ・Ｅ区に位置する。南半分が後世の攪乱により大きく掘削され、北東部が中世の井戸跡SE01に、北西がSK04に切られており、全形を窺い知ることができないが、平面形は方形を呈するものと推定される。確認できる規模は東西軸4.63m、南北軸3.71mを測る。カマドは北壁辺に設置されており、主軸方向はN－０°を指す。床面はほぼ平坦であるが、明瞭な硬化面が確認できなかった。壁面は外傾気味に立ち上がり、壁高は最大11.4cmである。柱穴および壁溝は確認できなかった。覆土は暗褐色土の単層で、自然堆積を示す。２層は掘方で、埋土はほぼ全面貼床され踏み固めている。

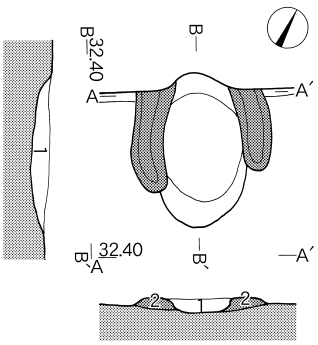
カマドは北壁やや西寄りに付設され、天井部は削平されているものの、遺存状態は比較的良好である。煙道部は壁を17.0cm程三角形状に掘り込んでいる。規模は焚口部から煙道部までの長さ75.0cm、検出された両袖部の最大幅75.0cm、高さ1.1cmを測る。袖部はにぶい黄橙色粘土と砂の混土で構築れている。火床部は長さ42.0cm、幅37.0cm、深さ5.0cmの楕円形を呈し、浅い擂鉢状に掘り込み、底面は被熱により赤変硬化している。



1．褐色土(10YR4/4)　少量のローム粒子を含む。締まりがあり、粘性にとむ。
2．褐色土(10YR4/6)　多量のローム粒子・ロームブロックを含む。締まりがあり、粘性にとむ。（貼床構築土）

第35図　SI12実測図

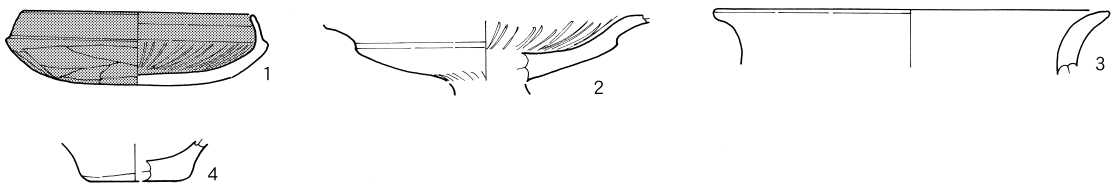
0　2m



1．暗褐色土(10YR3/4)　少量のローム粒子、多量の焼土粒子を含む。締まりがあり、粘性にとむ。
2．灰黄褐色土(10YR5/2)　多量の粘土粒子を含む。締まりがあり、粘性にとむ。（袖構築材）

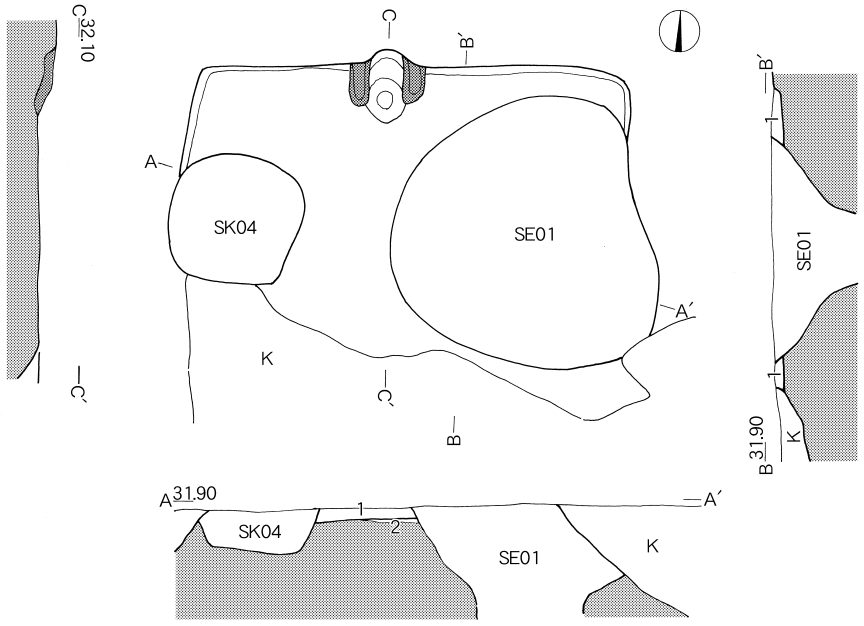
第36図　SI12カマド実測図

0　1m



第37図　SI12出土遺物

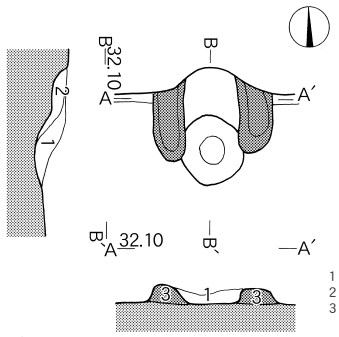
0　10cm



1．暗褐色土(10YR3/4)　少量のローム粒子を含む。締まりがあり、粘性にとむ。
2．褐色土(10YR4/6)　多量のローム粒子・ロームブロックを含む。締まりがあり、粘性にとむ。（貼床構築土）

第38図　SI13実測図

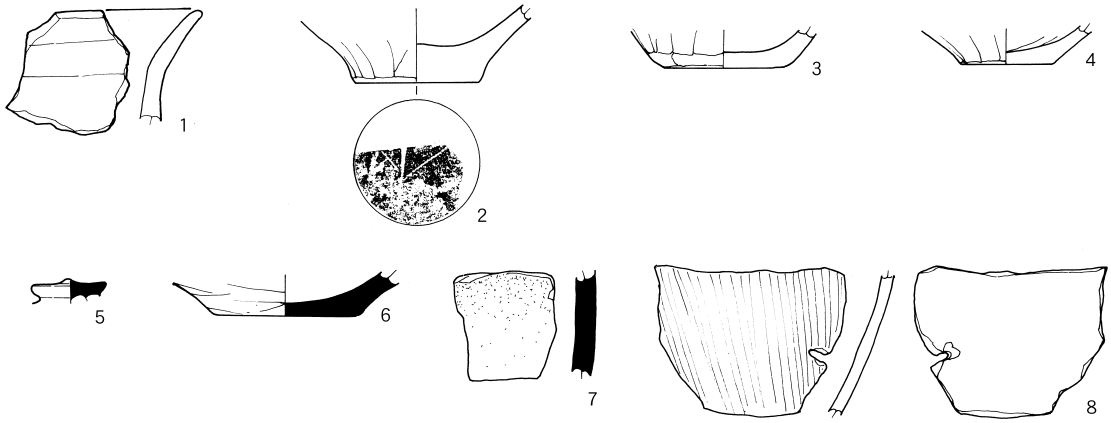
0　2m



1．暗褐色土(10YR3/4)　少量のローム粒子を含む。締まりがあり、粘性にとむ。
2．暗褐色土(10YR3/3)　少量のローム粒子・焼土粒子を含む。締まりがあり、粘性にとむ。
3．にぶい黄橙色土(10YR6/4)　少量のローム粒子・粘土粒子を含む。締まりがあり、粘性にとむ。（袖構築材）

第39図　SI13カマド実測図

0　1m



第40図　SI13出土遺物

0　10cm

遺物は床面直上に散存する状況で出土しており、すべて破損品で土師器、須恵器、土製品が検出された。１～４は土師器甕である。１は口縁部破片で、口縁部が外反している。２は底部破片で、底部に木葉痕が残っている。３・４も底部破片である。５～７は須恵器である。５は蓋で、擬宝珠状の紐部の破片である。６は甕底部破片。７は甕肩部破片で自然釉が掛かっている。８は土師器甕の胴部破片を再利用の不明土製品である。略台形を呈した甕胴部中位の破片で、大きさは縦7.97cm、横10.30cm、厚さ0.58cmを測る。図右端に径2.9mmの穿孔が施されている。胎土に石英・長石・黒色粒子を含み、色調は灰褐色を呈する。

これら出土遺物は、８世紀後半と考えられる。

SI14（第41～43図）

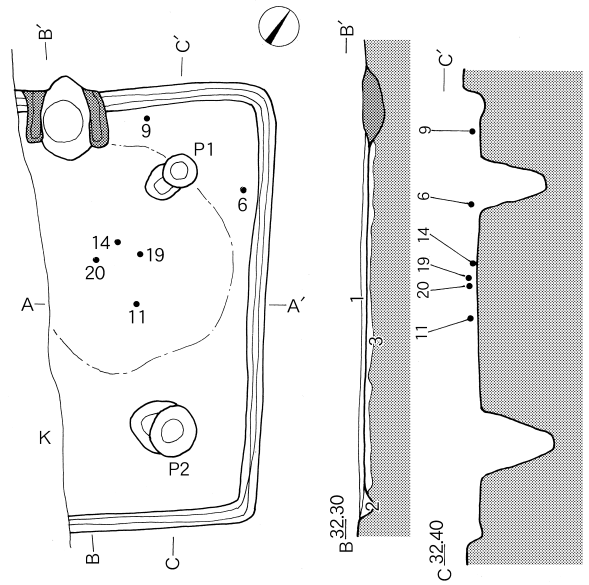
調査区西部、３－Ｂ区に位置する。南西部約半分が後世の攪乱により大きく掘削されいる。平面形は方形を呈するものと推定される。検出された規模は東西軸2.32m、南北軸4.64mを測る。カマドは北西壁辺に設置しており、主軸方向はN－43°－Wを指す。床面はほぼ平坦で、カマド前面から床中央に硬化面が認められる。壁面は外傾気味に立ち上がり、壁高は最大10.6cmである。壁溝は検出部で全周し、規模は幅16.0～21.0cm、深さ2.1～7.0cmで、断面U字状を呈する。柱穴は２本検出され、いずれも主柱穴である。本来は４本主柱穴と推定される。北部Ｐ１は南西側に大きく抜き取り痕がみられ、主径は59.0×35.0cm、深さ71.7cmの楕円形である。東部Ｐ２も北西側に抜き取り痕があり、主径は69.0×56.0cm、深さ76.7cmの楕円形である。なお、住居跡覆土は褐色土を基調とした二層に分層され、自然堆積の状態を示していた。３層は掘方で、埋土はほぼ全面貼床され踏み固めている。カマドは北西壁に付設され、天井部は削平され、遺存状態は不良好である。煙道部は壁を9.0cm程三角形状に掘り込んでいる。規模は焚口部から煙道部までの長さ85.0cm、検出された両袖部の最大幅80.0cm、高さ11.0cmを測る。袖部は灰黄褐色粘土と砂の混土で構築れている。火床部は長さ60.0cm、幅55.0cm、深さ11.0cmの楕円形を呈し、浅い擂鉢状に掘り込み、底面は被熱により赤変硬化している。

遺物は住居跡東部床面上で纏まって出土しており、土師器、土製品、石製品が検出された。１～18は土師器である。１～４は坏で、１は口縁部と体部の境に明瞭な稜をもち、口縁部が外反する。２・３は丸底から体部は内灣気味に立ち上がり、口縁部は短く直立する。４は体部破片で、口縁部と体部の境に稜をもつ。体部は内彎気味に立ち上がる。５は鉢である。口縁部と胴部の境に稜をもち、体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は僅かに内傾する。６～16は甕である。６～８はやや胴長の胴部をもつもので、口縁部と胴部の境に稜をもつ。10・11・12は口縁部がくの字状に外反する。13は大型の甕で、口縁部は僅かに外反する。14は頸部破片で、頸部は垂直気味に立ち上がり、口縁部は外反する。15・16は底部破片である。17は甑である。口縁部と胴部の境に明瞭な稜をもつ。胴部は直線的に外傾し、口縁部が外反する。18は甑把手である。手捏ねによる成形である。19は土製支脚で、上下端を欠損する。砲弾形を呈するものと推定され、横断面は略円形で底部に向かって太くなっている。現存最大径は5.95cm、現存高10.49cmを測る。表面は手捏ね整形されている。胎土は石英・長石粒を含み、焼成は良好で堅緻である。色調は橙色を呈する。20は安山岩製の磨石である。下部が礫器状の刃部をもつが加工痕であるか不明である。なお、左側面には擦痕が認められる。現長8.51cm、幅6.74cm、厚さ3.99cm、重さ 332.0gを測る。

これら出土遺物は６世紀後半と考えられる。

SI15（第44～46図）

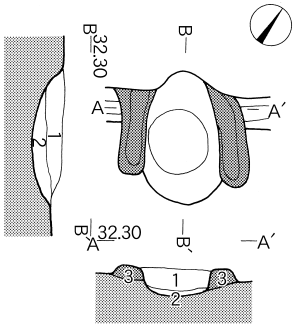
調査区北東部、３－Ｆ・Ｇ区に位置する。本調査区において唯一完掘された住居跡である。平面形は東西にやや長い方形を呈する。規模は東西軸4.72m、南北軸4.14mを測る。カマドは北壁中央に設置されており、主軸方向はN－０°を指す。床面はほぼ平坦で、カマド前面の住居跡中央に硬化面が認められる。壁面は外傾気味に立ち上がり、壁高は最大31.0cmである。壁溝は検出部で全周し、規模は幅20.0～27.0cm、深さ3.8～12.5cmで、断面U字状を呈する。柱穴は5本検出され、Ｐ１～Ｐ４の４本が主柱穴、Ｐ５は梯子穴でいずれも円形を呈している。その規模は北西部Ｐ１が径50.0 ×50.0cm、深さ48.0cm、北東部Ｐ２が径40 .0×40.0cm、深さ45.0 cm、南東部Ｐ３が径58.0×38.0cm、深さ40.0cmで、東側に抜き取り跡が認められるＰ４が径45.0×41.0cm、深58.0cmで東側に抜き取り跡が認められる。また梯子穴Ｐ５は南壁辺中央脇に設置されており、径35.0×33.0cm、深さ17.5 cmを



1．褐色土(10YR4/4)　少量のローム粒子を含む。締まりがあり、粘性にとむ。
2．褐色土(10YR4/6)　少量のローム粒子を含む。締まりがあり、粘性にとむ。
3．褐色土(10YR4/6)　多量のローム粒子・ロームブロックを含む。締まりがあり、粘性にとむ。（貼床構築土）

第41図　SI14実測図

0　2m



1．暗赤褐色土(5YR3/3)　少量のローム粒子・焼土粒子を含む。締まりがあり、粘性にとむ。
2．灰褐色土(5YR5/2)　少量のローム粒子・粘土粒子・焼土粒子を含む。締まりがあり、粘性にとむ。
3．灰黄褐色土(10YR5/2)　多量の粘土粒子を含む。締まりがあり、粘性にとむ。（袖構築材）

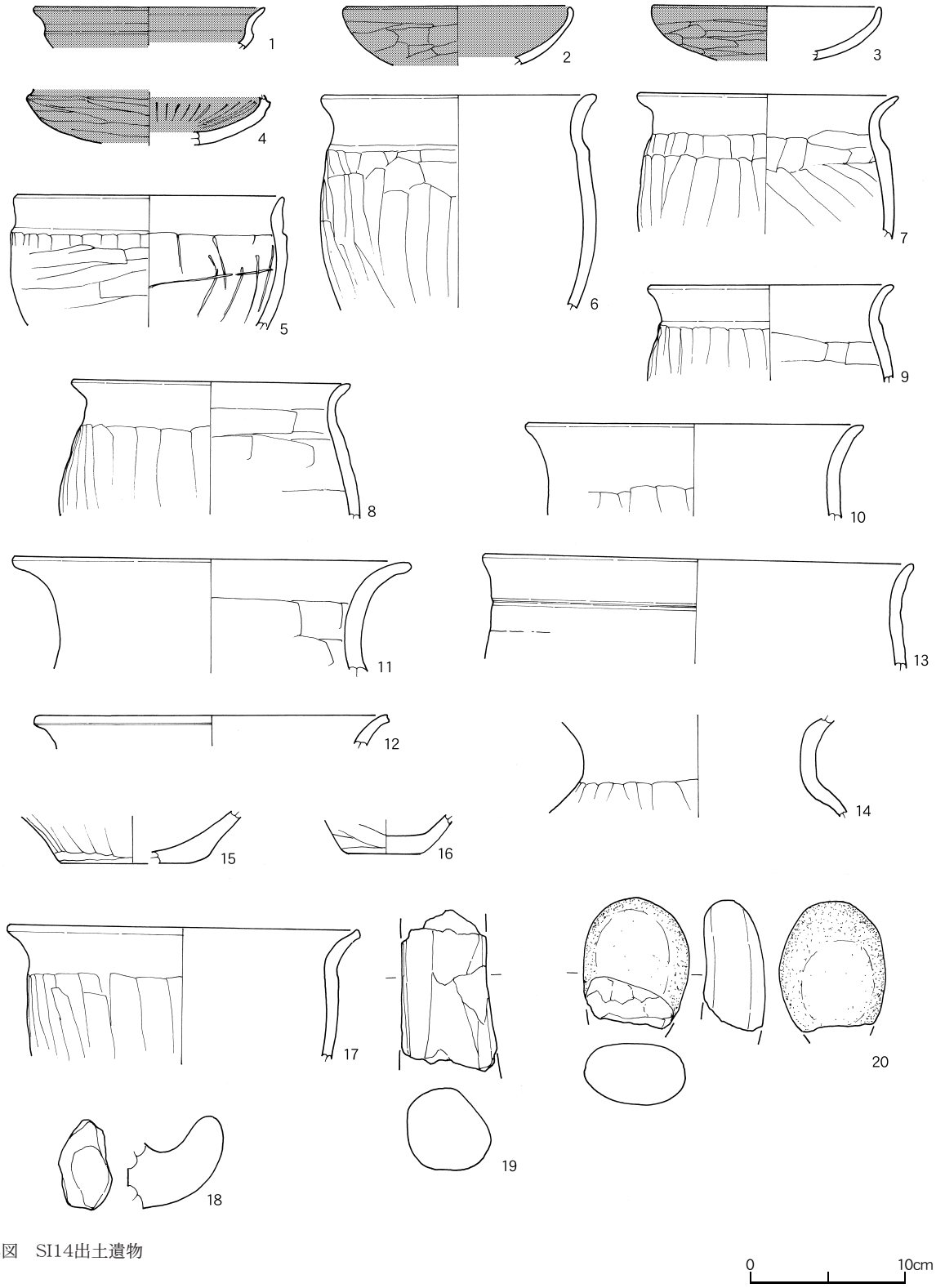
0　1m

第42図　SI14カマド実測図

測る。覆土は三層に分層でき、暗褐色土を主体とする自然堆積を示す。５層は掘方で、埋土は全面貼床され踏み固めている。

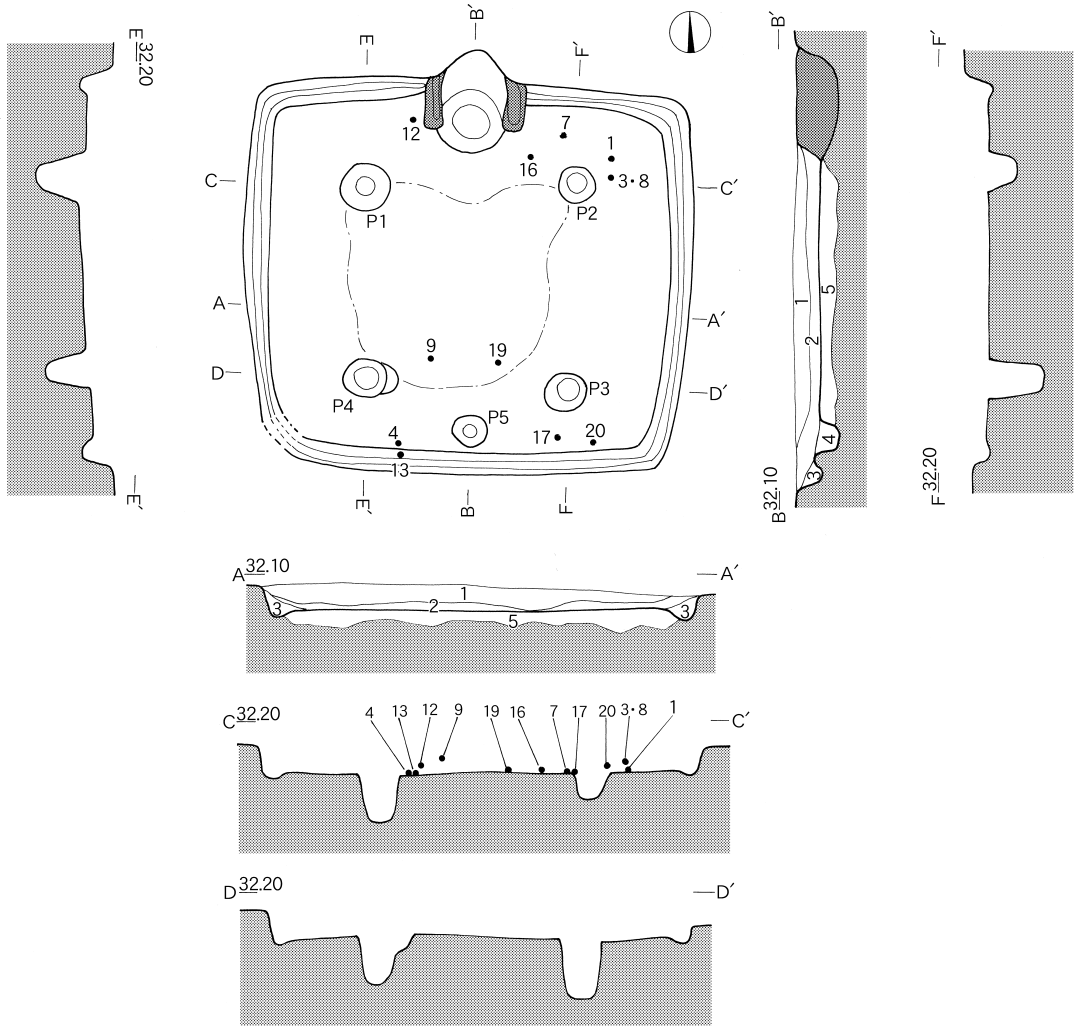
カマドは北壁中央に付設され、天井部は削平されているものの、遺存状態は良好である。煙道部は壁を40.0cm程半円形状に掘り込んでいる。規模は焚口部から煙道部までの長さ110.0cm、検出された両袖部の最大幅110.0cm、高さ20.0cmを測る。袖部はにぶい黄橙色粘土と砂の混土で構築れている。火床部は長さ60.0cm、幅.700cm、深さ10.0cmの楕円形を呈し、浅い擂鉢状に掘り込み、底面は被熱により赤変硬化している。

遺物は住居跡壁辺周縁に散在し、とくにカマド東脇、南壁際から纏まって出土している。土師器、須恵器、土製品、石製品、鉄製品が検出された。１・２は土師器である。１は甑で、単孔式である。体部が内彎気味に外傾し、口縁部は強く外反し、口唇端部が摘み上げられている。２は甕の口縁部破片で、くの字状に外反する。口唇端部が摘み上げられている。３～15は須恵器である。３～７は坏で、いずれもロクロ成形である。３はほぼ完存品で、体部は直線的に外傾し、底部は静止糸切りで、「十」字のヘラ記号を記す。木葉下もしくは大淵窯跡群産である。４は完存品で、体部下端は二次底部面状を呈し、体部は直線的に外傾する。底部は回転ヘラ切りで、木葉下もしくは大淵窯跡群産である。５・６は体部破片である。7は底部破片である。体部下端は二次底部面状を呈し、底部は回転ヘラ切りで、木葉下もしくは大淵窯跡群産である。８は有台盤である。小破片である。高台はハの字状に開き、体部は外傾して立ち上がる。９は有台坏である。高台はハの字状に開き、体部は直線的に外傾して立ち上がる。体部外面に横書きによる「才ヵ」とヘラ書きされている。木葉下もしくは大淵窯跡群産である。10・11は蓋の小破片である。12は瓶類である。高台は貼り付けで、胴部は内彎気味に立ち上がる。木葉下もしくは大淵窯跡群産である。13～15は甕である。13は胴部下半部の破片。14・15は甕の胴部破片で、いずれも外面は平行タタキである。16は土製支脚で、上端と下端の一部を僅かに欠損する。砲弾形を呈し、横断面は円形で底部に向かって太く



第43図　SI14出土遺物

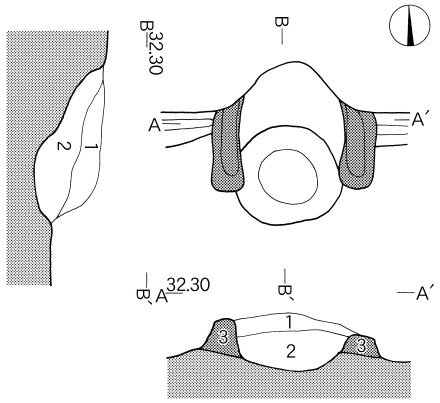
なっている。最大径は底部にあり9.56cm、現存高18.25cmを測る。表面は手捏ね整形され、底面は平坦である。胎土は石英・長石粒を含み、焼成は良好で堅緻である。色調は褐灰色を呈する。17は凝灰岩製の砥石で、下半部を欠損している。方柱状形を呈し、表面が大きく湾曲している。横断面形は長方形である。現存長7.86cm、最大



1．暗褐色土(10YR3/4)　多量のローム粒子・ロームブロックを斑状に含み、少量の炭化粒子を含む。締まりがあり、粘性にとむ。
2．暗褐色土(10YR3/3)　多量のローム粒子・ロームブロックを斑状に含み、少量の炭化粒子を含む。締まりがあり、粘性にとむ。
3．褐色土(10YR4/4)　多量のローム粒子を含む。締まりがあり、粘性にとむ。
4．暗褐色土(10YR3/4)　少量のローム粒子・ロームブロックを含む。締まりがあり、粘性にとむ。
5．褐色土(10YR4/6)　多量のローム粒子・ロームブロックを含む。締まりがあり、粘性にとむ。（貼床構築土）

第44図　SI15実測図

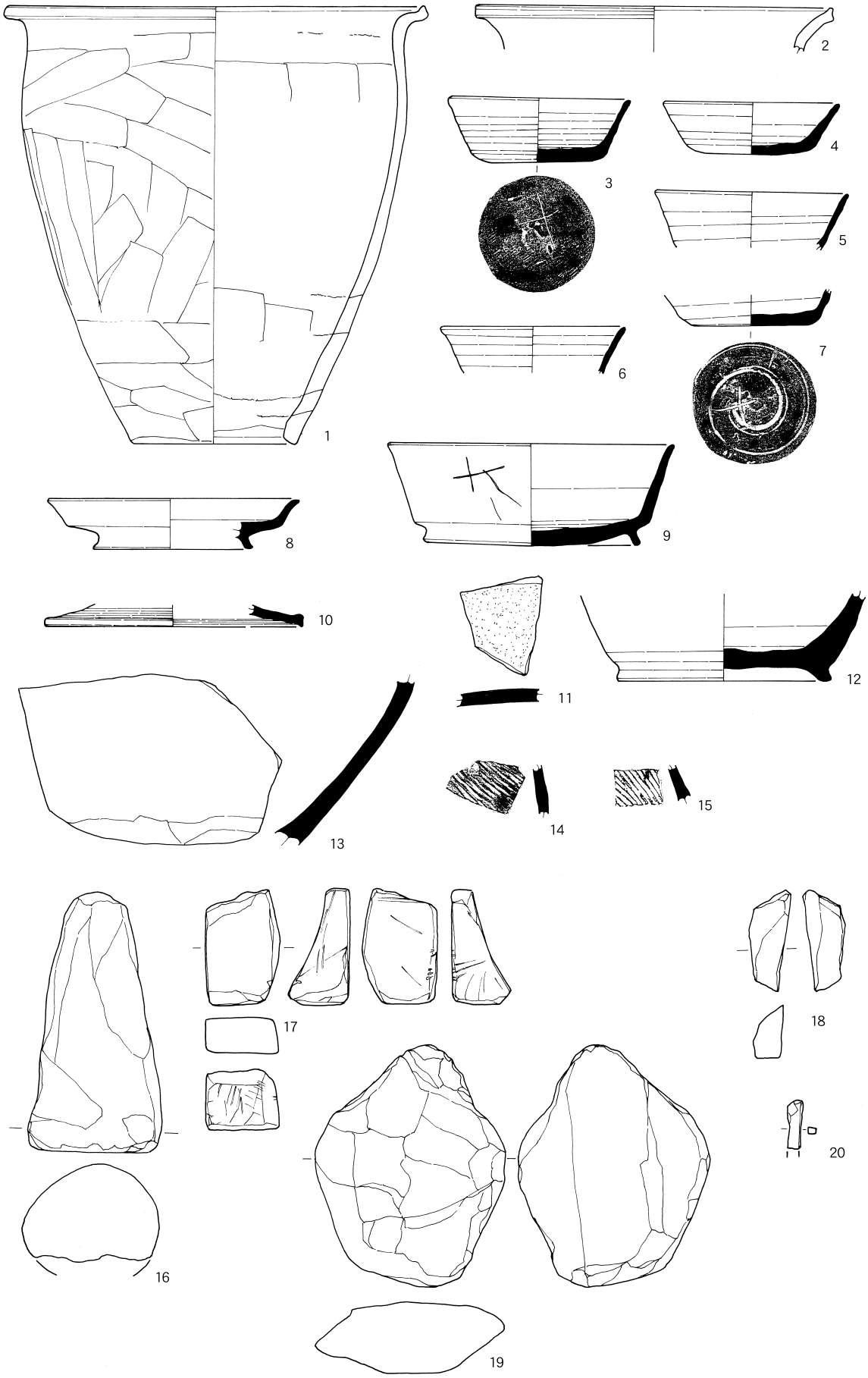
0　2m



1．にぶい黄橙色土(10YR6/4)　少量のローム粒子・焼土粒子、多量の粘土粒子を含む。締まりがあり、粘性にとむ。
2．赤褐色土(5YR4/6)　少量のローム粒子、多量の焼土粒子を含む。締まりがあり、粘性にとむ。
3．にぶい黄橙色土(10YR6/4)　多量の粘土粒子を含む。締まりがあり、粘性にとむ。（袖構築材）

第45図　SI15カマド実測図

0　1m



第46図　SI15出土遺物

幅4.83cm、最大高4.23cm、最少高1.55cm、重さ194.0gを測る。18は砂岩製砥石の破片である。自然礫を使用し、加工痕は確認できないが、表裏両面に研磨面が認められる。現存長7.95cm、最大幅5.21cm、最大高2.07cm、重さ81.0gを測る。19は片岩製の砥石である。自然礫を利用しており、明瞭な加工痕は認められない。表裏両面に研磨面が確認できる。長さ幅厚さ重さ1,372g。20は鉄製の釘の破片である。下半部を欠損し、頭部は錆のため形状が把握できない。横断面は長方形を呈する。現存長3.33cm、断面0.68×0.44cm、重さ3.46gを測る。

これら出土遺物は８世紀第３四半期と考えられる。

SI16（第47・48図）

調査区北東部、３－Ｇ区に位置し、北側半分が未調査区域に延びている。平面形は、方形を呈するものと推定でき、検出した規模は西壁辺2.64m、南北軸3.02mを測る。カマドは北壁に設置されているものとすると、主軸方向はN－12°－Wを指す。床面はほぼ平坦で、中央部は硬化面が認められる。壁面は外傾気味に立ち上がり、壁高は最大16.0cmである。壁溝は西壁北側以外で検出された部分は構築されており、その規模は幅12.0～24.0cm、深さ2.5～4.0cmで、断面U字状を呈する。柱穴、カマドは検出できなかった。覆土は六層に分層でき、暗褐色土を主体とする自然堆積を示す。７層は掘方で、埋土はほぼ全面貼床され踏み固めている。またカマドも検出できなかった。

遺物は住居跡床面直上で散存して出土し、土師器、須恵器が検出された。１は土師器甕である。底部に木葉痕が残っている。２～４は須恵器である。２・３は坏で、２はロクロ成形で底部は回転ヘラケズリである。新治窯産である。３もロクロ成形で、新治窯産である。４は甕の口縁部破片である。口縁端部は折り返しで、内外面に自然釉が掛かっている。

これら出土遺物は８世紀前半と考えられる。

SI17（第49,50図）

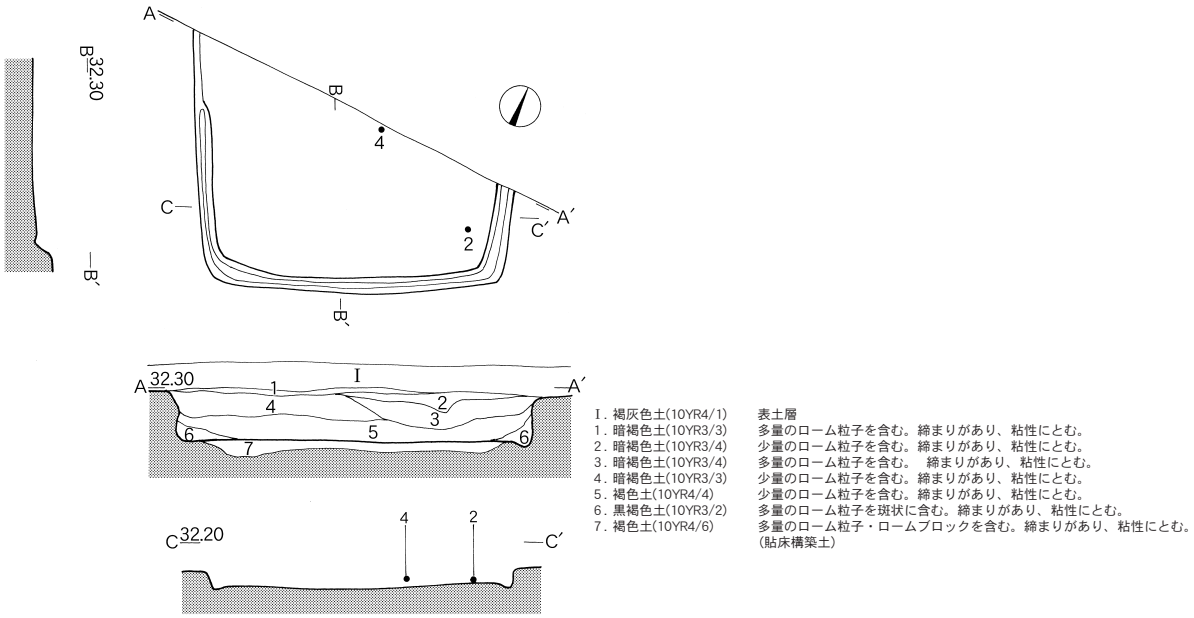
調査区北東端３－Ｈ区に位置する。北側の大半が未調査区域に延びている。平面形は方形を呈するものと推定でき、検出された規模は西壁辺3.31m、南壁辺5.56mを測る。カマドが北壁に設置されているものとすると、主軸方向はN－08°－Wを指す。床面の残存部はほぼ平坦で、中央南側に硬化面が認められる。壁面は外傾気味に立ち上がり、壁高は最大65.0cmである。柱穴は２本検出され、主柱穴と梯子穴である。南西部主柱穴Ｐ１は径61.0×59.0cm、深さ72.0cmを測る。梯子穴Ｐ２は南壁辺中央に位置し、規模は径64.0×55.0cm、深さ43.0cmである。覆土は六層に分層でき、黒褐色土と褐色土を主体とする自然堆積を示す。７層は掘方で、埋土はほぼ全面貼床され踏み固めている。

遺物は梯子穴Ｐ２周辺で出土しており、すべて土師器である。１～６は土師器坏である。１は須恵器坏身模倣坏で口径に対し器高が深い。口縁部と体部の境に明瞭な稜をもつ。丸底から体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は内傾する。赤彩が施されている。２は口縁部と体部の境に稜をもち、丸底から体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は短く直立する。赤彩が施されている。３・４は口径に対し器高が浅い坏で、内彎する体部から口縁部は短く直立する。４は黒色処理されている。５は丸底で、口縁部が僅かに垂直に立ち上がる。黒色処理を施している。６は丸底の坏である。７は鉢の口縁部破片で、口縁部が直線的に外傾する。

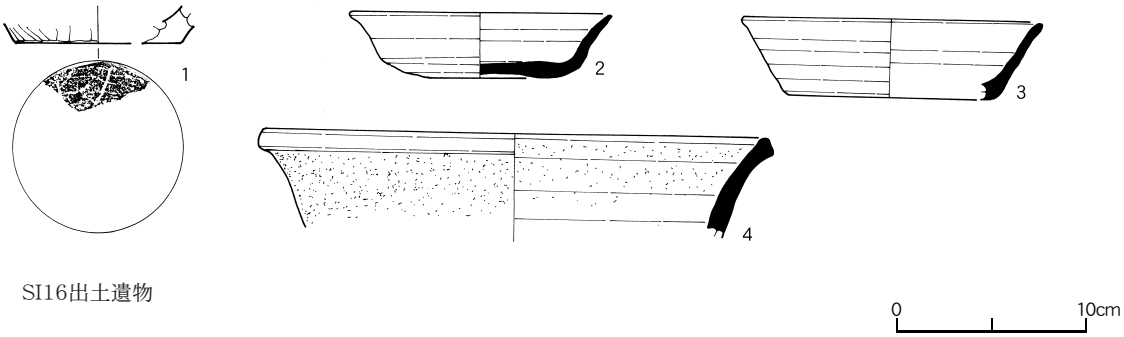
これら出土遺物は６世紀後半と考えられる。

SI18（第51図）

調査区東部、４－Ｈ区に位置する。南東部の約半分が未調査区域に延び、北隅部が攪乱を受けており、しかも覆土上面も削平されて、遺構の確認で既に一部床面が露出し、もしくは削平されている状態であった。平面形は方形を呈するものと推定でき、検出された規模は北東壁辺1.90m、北西壁辺2.78mを測る。カマドは検出されていないが、北東壁辺に設置されているものとすると、主軸方向はN－30°－Wを指す。床面はほぼ平坦で、硬化面は確認できなかった。壁面は外傾気味に立ち上がり、壁高は最大1.0cmである。柱穴および壁溝は検出できなかった。残存していた覆土および掘方は薄層のため図示することはできなかった。



第47図　SI16実測図



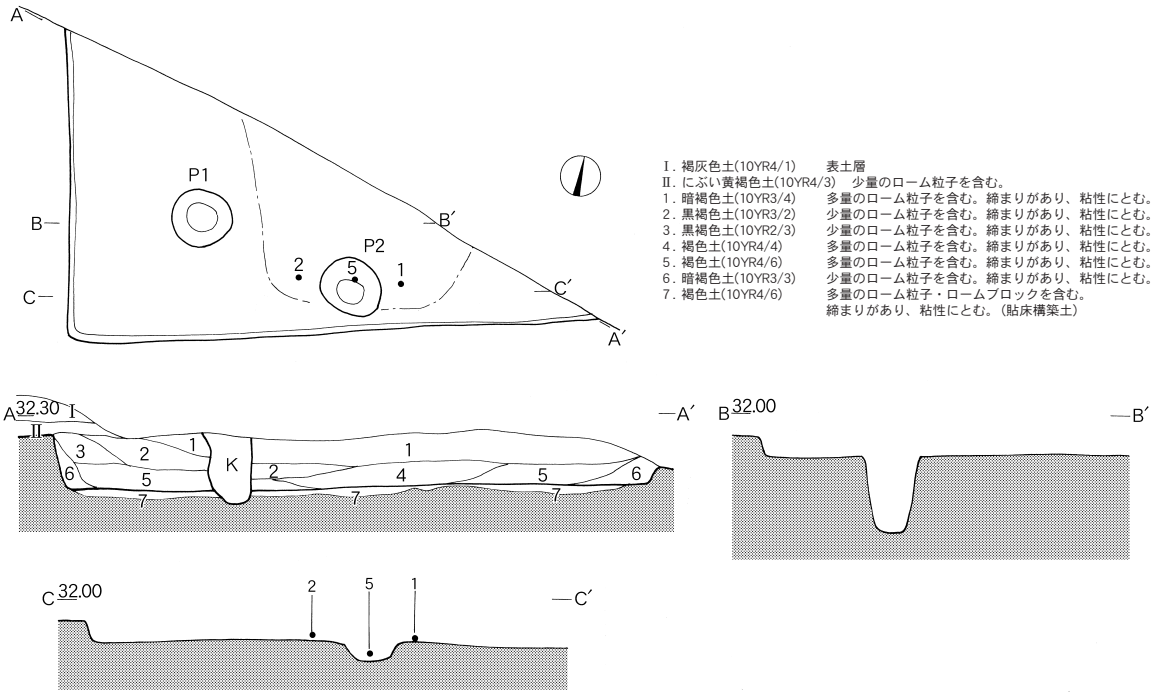
第48図　SI16出土遺物

本跡から遺物の出土はなく、時期は不明である。

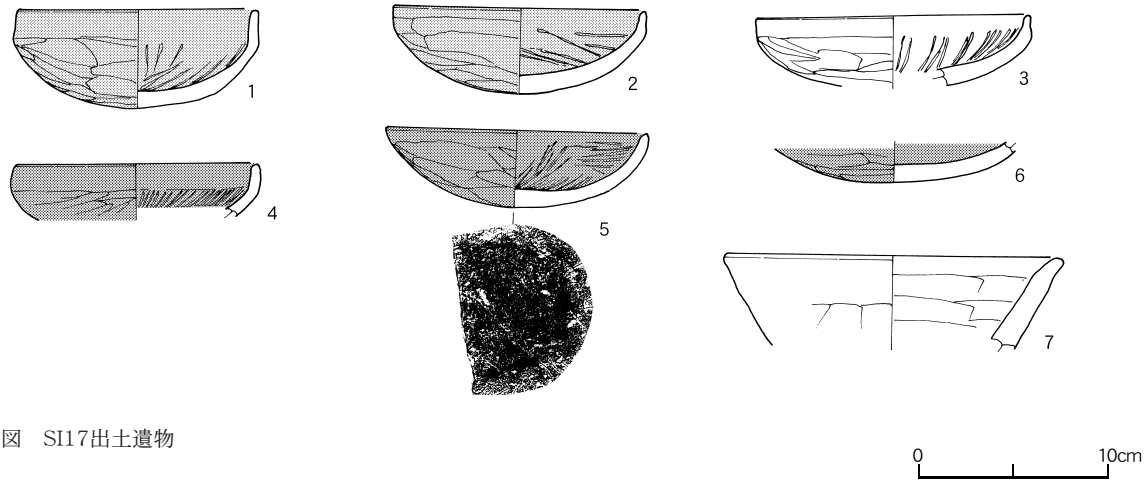
SI19（第52・53図）

調査区東部、４－Ｆ区に位置する。南東部大半が後世の攪乱により大きく掘削さ、東壁と北壁の一部検出されただけである。平面形は、残存部から判断して方形を呈するものと推定でき、検出された規模は東壁辺1.22m、北壁辺1.10mを測る。カマドが北壁に設置されているものとすると、主軸方向はN－16°－Wを指す。床面はほぼ平坦であるが、硬化面は確認できなかった。壁面は外傾気味に立ち上がり、壁高は最大16.0cmである。柱穴は確認できず、壁溝は構築されていない。覆土は暗褐色土の二層に分層でき、自然堆積を示す。３層は掘方で、埋土はほぼ全面貼床され踏み固めている。柱穴は確認できなかった。

遺物は覆土中に散存して出土しており、土師器と土製支脚が検出された。１・２は土師器甕である。１は口縁部と胴部の境に明瞭な境をもち、胴部が内彎して立ち上がり、口縁部は短く外反する。２は底部破片である。上げ底気味である。３は土製支脚で、下半部を欠損する。截頭円錐形を呈し、横断面は円形で底部に向かって太くなって



第49図　SI17実測図



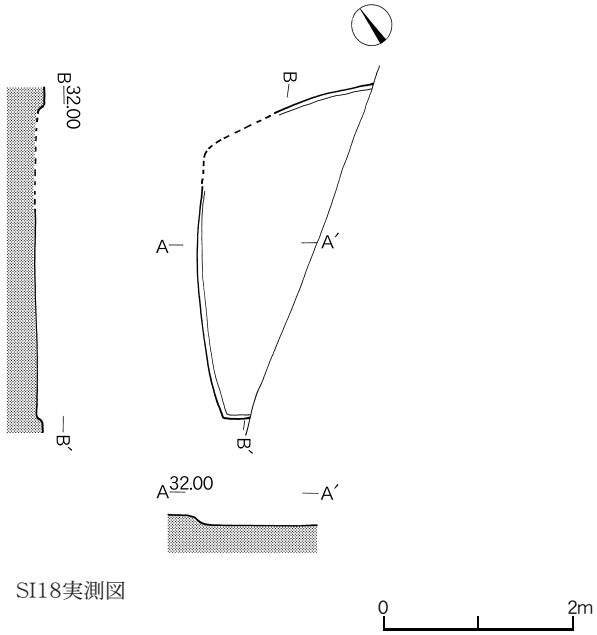
第50図　SI17出土遺物

いる。頂部径4.95cm、現最大径は7.6cm、現存高12.69cmを測る。表面は手捏ね整形され、胎土は石英・長石粒を含み、焼成は良好で堅緻である。色調は浅黄橙色を呈する。

これら出土遺物は古墳時代後期に比定される。

SI20（第54・55図）

調査区東部、４－Ｆ区に位置する。北側大半と南西隅が後世の攪乱により大きく掘削されている。平面形は、方形を呈するものと推定でき、検出された規模は西壁辺の残存部１.25m、南壁辺2.73mを測る。検出されていない



第51図　SI18実測図

が、カマドが北壁辺に設置しているものとすると、主軸方向はN－９°－Wを指す。床面は検出面ではほぼ平坦であるが、明瞭な硬化面は確認できなかった。壁面は外傾気味に立ち上がり、壁高は最大9.0cmである。壁溝は検出面では構築されておらず、柱穴は１本検出され、南西部の主柱穴であろう。円形を呈し、規模はが径33.0×25.0cm、深さ90.0cmを測る。覆土は二層に分層でき、暗褐色土を主体とする自然堆積を示す。３層は掘方で、埋土はほぼ全面貼床され踏み固めている。

遺物は覆土中に出土しており、土師器が検出された。１は坏である。１は体部が内彎気味に立ち上がり、口縁部が内傾する。

これら出土遺物は６世紀後半と考えられる。

第４節　井戸跡

SE01（第56図）

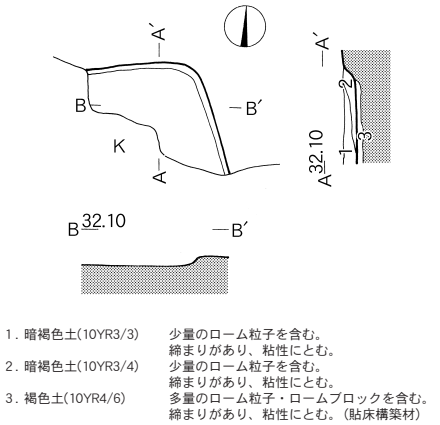
調査区南部、４－E、５－E区に位置する。住居跡SI13内の北東部にあたり、SI13を切って構築している。素掘り井戸の平面形は東西にやや長い楕円形を呈し、東西軸2.86m、南北軸2.68mを測る。掘方断面形をみると検出面から20～40cmの深さから上の壁は外側に大きく開きながら、内彎して立ち上がっている。この最上部より以下は、直径131.0cmのほぼ真っ直ぐな円筒状に掘り込まれている。またこの円筒北壁の上端に幅40～60cm、長さ25cm、深さ16cmの台形状の掘り込みが検出された。足場施設と推定される。確認面から深さ230.0cmまで調査を実施したが、井戸底までは達することはできず、しかも水溜の施設は確認できなかった。

井戸内の覆土は五層に分層したが、１～３層の上層は、井戸堀方上端の大きく外側に開いた部分に堆積する。暗褐色土、褐色土で多量のロームブロックを含むことから埋め戻し土層と考えられる。４層褐色土以下は自然堆積層であろう。遺物の出土はわずかに土師器小破片のみで、住居跡SI13からの流れ込みと推定される。したがって、時期を決定する遺物はないものの、周囲の状況から判断して中世と考えられる。

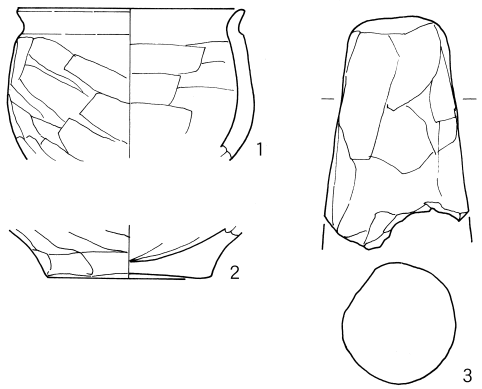
第５節　溝跡

SD01（第57図）

調査区南部、５－D区に位置する。東西方向(N－77°－W)へ直線的に走行する溝で、西端は後世の攪乱により掘削されて形状は不明である。東の低位面から西の高位面へ流走すると推定され、東端が幅42.0cm、深さ15.0cm



第52図　SI19実測図



第53図　SI19出土遺物

を測る。ここから西方向に向かって徐々に広がり最大幅は西端確認部で176.0cm、深さ19.5cmである。断面形は浅い箱形状を呈する。検出長は7.03mを測る。覆土は二層に分層でき、褐色土を主体とする自然堆積を示す。

遺物の出土はわずかに土師器小破片のみで、流れ込みと推定される。したがって、時期を決定する遺物はないものの、周囲の状況から判断して中・近世と考えられる。

第６節　土坑

SK01（第58図）

調査区北東部、４－Ｇ区に位置し、南部大半が未調査区域に延びている。平面形は南北に長い長方形を呈するものと推定される。確認できる規模は南北軸0.32m、東西軸1.13m、深さ23.0cmである。長軸方向はＮ－30°－Ｗを示す。底面は平坦であるが、硬化面や踏み固めた痕跡は認められない。壁面は緩い外傾状に立ち上がる。覆土は褐色土の二層で、埋め戻し土層である。

出土遺物がなく、時期は明瞭ではないが、覆土の状況から中世の土坑と考えられる。

SK02（第58図）

調査区北東部、４－Ｇ区に位置し、平面形は円形を呈する。規模は径0.87×0.85m、深さ15.0cmである。底面は平坦であるが、硬化面や踏み固めた痕跡は認められない。壁面は外傾して立ち上がる。覆土は褐色土の単層で、埋め戻し土層である。

出土遺物がなく、時期は明瞭ではないが、覆土の状況から中世の土坑と考えられる。

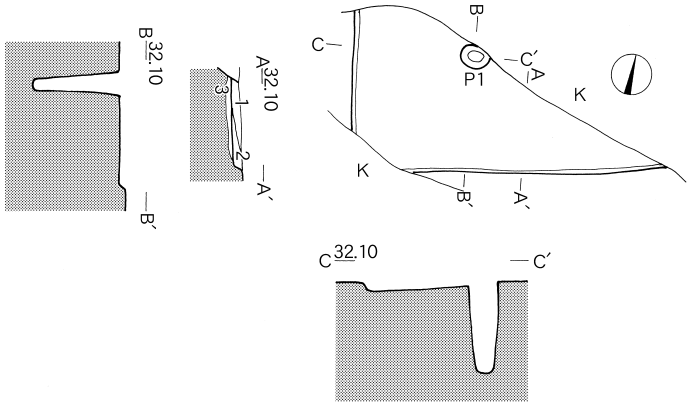
SK03（第58図）

調査区北東部、３－Ｇ・Ｈ区に位置し、平面形は円形を呈し、規模は径1.02×1.00m、深さ29.0cmである。底面は平坦であるが、硬化面や踏み固めた痕跡は認められない。壁面は外傾して立ち上がる。覆土は褐色土の単層で、埋め戻し土層である。

出土遺物がなく、時期は明瞭ではないが、覆土の状況から中世の土坑と考えられる。

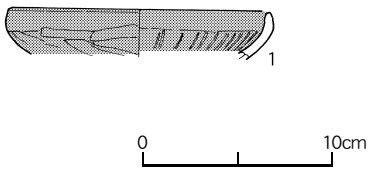
SK04（第58図）

調査区中央南部、５－Ｄ区に位置し、SI13を切っている。平面形は隅丸方形を呈する。規模は東西軸1.35m、



1．暗褐色土(10YR3/4)　少量のローム粒子を含む。締まりがあり、粘性にとむ。
2．褐色土(10YR4/4)　少量のローム粒子を含む。締まりがあり、粘性にとむ。
3．褐色土(10YR4/6)　多量のローム粒子・ロームブロックを含む。締まりがあり、粘性にとむ。（貼床構築材）

第54図　SI20実測図



第55図　SI20出土遺物

南北軸1.35m、深さ45.0cmである。底面は平坦であるが、硬化面や踏み固めた痕跡は認められない。壁面は外傾して立ち上がる。覆土は黒褐色土の二層で、埋め戻し土層である。

出土遺物がなく、時期は明瞭ではないが、覆土の状況から中世の土坑と考えられる。

SK05（第58図）

調査区中央南部、４－Ｄ、５－Ｄ区に位置し、平面形は東西に長い隅丸長方形を呈する。規模は東西軸1.36m、南北軸1.03m、深さ34.0cmである。長軸方向はＮ－64°－Ｗを示す。底面は平坦であるが、硬化面や踏み固めた痕跡は認められない。壁面は外傾して立ち上がる。覆土は黒褐色土の単層で、埋め戻し土層である。

出土遺物がなく、時期は明瞭ではないが、覆土の状況から中世の土坑と考えられる。

SK06（第58図）

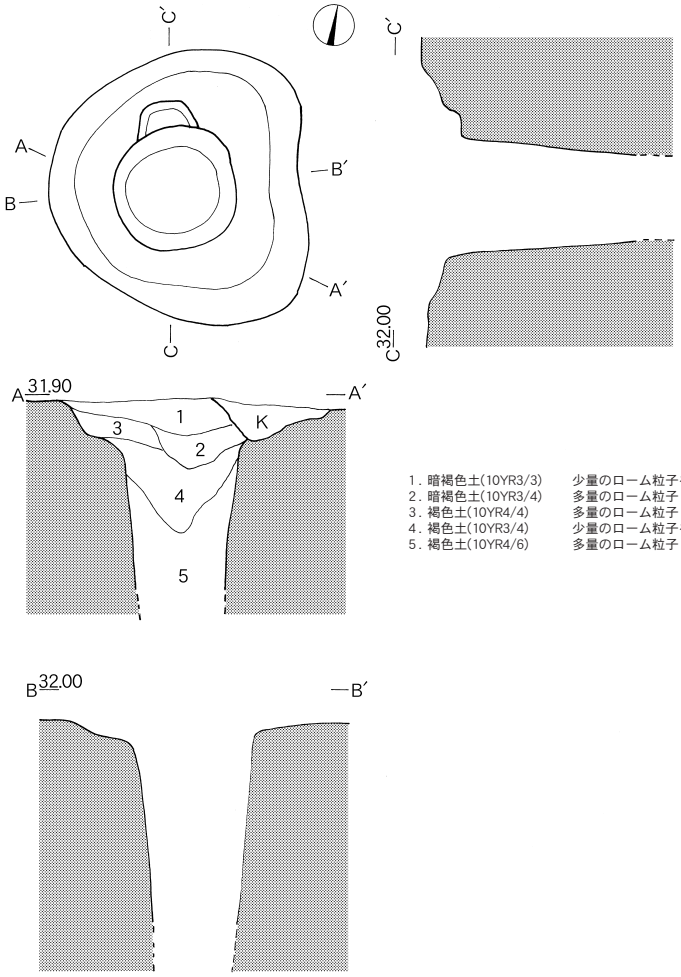
調査区中央南部、４－Ｄ区に位置し、SK07に切られている。平面形は東西に長い隅丸長方形を呈する。規模は東西軸1.43m、南北軸1.02m、深さ15.3cmである。長軸方向はＮ－90°を示す。底面は平坦であるが、硬化面や踏み固めた痕跡は認められない。壁面は外傾して立ち上がる。覆土は暗褐色土の単層で、埋め戻し土層である。

出土遺物がなく、時期は明瞭ではないが、覆土の状況から中世の土坑と考えられる。

SK07（第58・59図）

調査区中央南部、４－Ｄ区に位置し、SI06・SK06・08・10・11を切っている。平面形は南北に長い長方形を呈する。規模は東西軸1.93m、南北軸2.58m、深さ41.7cmである。長軸方向はＮ－04°－Ｅを示す。底面は平坦であるが、硬化面や踏み固めた痕跡は認められない。壁面は外傾して立ち上がる。覆土は暗褐色土の二層で、自然堆積層である。

出土遺物は、土師器が覆土中で検出された。第59図１・２は坏である。１は平底の底部から体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は僅かに内傾する。黒色処理が施されている。２は内彎する体部に口縁部は短く直立する。３は甕の底部破片である。底部に木葉痕が残されている。また外面に赤彩が認められる。時期は６世紀末葉から７世紀初頭と考えられる。



1．暗褐色土(10YR3/3)　少量のローム粒子を含む。締まりがあり、粘性にとむ。
2．暗褐色土(10YR3/4)　多量のローム粒子・ロームブロックを含む。締まりがあり、粘性にとむ。
3．褐色土(10YR4/4)　多量のローム粒子・ロームブロックを含む。締まりがあり、粘性にとむ。
4．褐色土(10YR3/4)　少量のローム粒子を含む。締まりがあり、粘性にとむ。
5．褐色土(10YR4/6)　多量のローム粒子・ロームブロック・KP(鹿沼)を含む。締まりがあり、粘性にとむ。

第56図　SE01実測図

0　2m

SK08（第58図）

調査区中央南部、４－Ｄ区に位置し、SK07に切られている。平面形は東西に長い不正長方形を呈する。規模は東西軸2.62m、南北軸0.97m、深さ13.8cmである。長軸方向はＮ－77°－Ｗを示す。底面は平坦であるが、硬化面や踏み固めた痕跡は認められない。壁面は外傾して立ち上がる。覆土は褐色土の単層で、埋め戻し土層である。

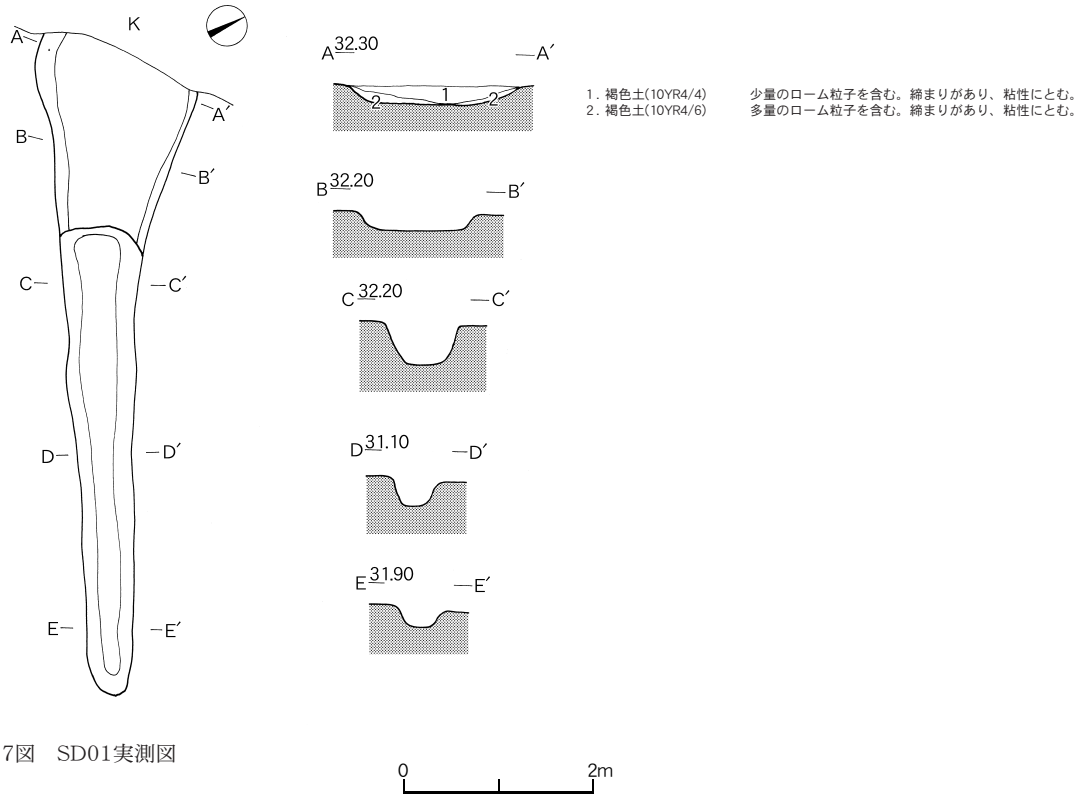
出土遺物がなく、時期は明瞭ではないが、覆土の状況から中世の土坑と考えられる。

SK09（第58図）

調査区中央南部、４－Ｄ区に位置し、北半分が後世の攪乱により大きく掘削されている。平面形は南北に長い長方形を呈するものと推定する。検出された規模は東西軸0.88m、南北軸0.95m、深さ16.4cmである。長軸方向はＮ－20°－Ｅを示す。底面は平坦であるが、硬化面や踏み固めた痕跡は認められない。壁面は外傾して立ち上がる。覆土は褐色土の二層で自然堆積である。

出土遺物がなく、時期は明瞭ではないが、覆土の状況から中世の土坑と考えられる。

SK10（第58図）



第57図　SD01実測図

調査区中央南部、４－Ｄ区に位置する。SK07に切られ、SK11を切っている。平面形は隅丸方形を呈する。規模は東西軸0.81m、南北軸0.79m、深さ40.0cmである。長軸方向は方形を示す。底面は平坦であるが、硬化面や踏み固めた痕跡は認められない。壁面は外傾して立ち上が。覆土は暗褐色土の単層で、埋め戻し土層である。

出土遺物がなく、時期は明瞭ではないが、覆土の状況から中世の土坑と考えられる。

SK11（第58・59図）

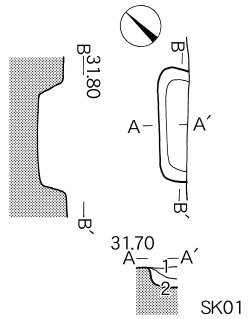
調査区中央南部、４－Ｄ区に位置し、SK07・10に切られている。平面形は方形を呈するものと推定される。規模は東西軸0.70m、南北軸0.72m、深さ28.0cmである。底面は平坦であるが、硬化面や踏み固めた痕跡は認められない。壁面は外傾して立ち上がる。覆土は褐色土の単層で、埋め戻し土層である。

出土遺物は、土師器が覆土中で検出された。第59図４・５は坏である。４は須恵器坏身模倣坏である。口縁部と体部の境に明瞭な稜をもち、丸底の底部から体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は内傾する。黒色処理が施されている。５も須恵器坏身模倣坏である。口径に対し器高が深い。口縁部と体部の境に明瞭な稜をもち、丸底の底部から体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は内傾する。赤彩が施されている。時期は６世紀後半と考えられる。

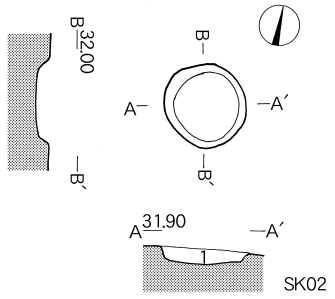
SK12（第60図）

調査区西部、４－Ｃ区に位置する。SI08を切り、南側の一部が後世の攪乱により掘削されている。平面形は南北に長い長方形を呈するものと推定される。確認される規模は東西軸1.48m、南北軸1.86m、深さ27.5cmである。長軸方向はＮ－63°－Ｗを示す。底面は平坦であるが、硬化面や踏み固めた痕跡は認められない。壁面は外傾して立ち上がる。覆土は褐色土の単層で、埋め戻し土層である。

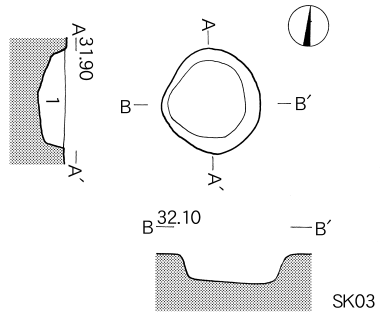
出土遺物がなく、時期は明瞭ではないが、覆土の状況から中世の土坑と考えられる。



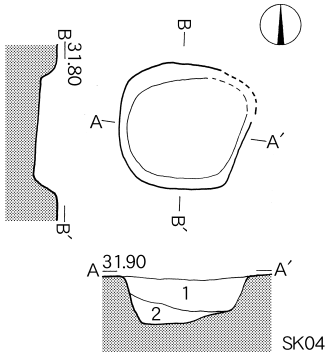
SK01
1．褐色土(10YR4/4)
　多量のローム粒子・ロームブロックを斑状に含む。
　締まりがあり、粘性にとむ。
2．褐色土(10YR4/6)
　多量のローム粒子・ロームブロックを含む。
　締まりがあり、粘性にとむ。



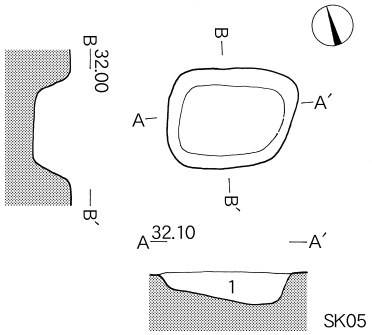
SK02
1．褐色土(10YR4/4)
　多量のローム粒子・ロームブロックを斑状に含む。
　締まりがあり、粘性にとむ。



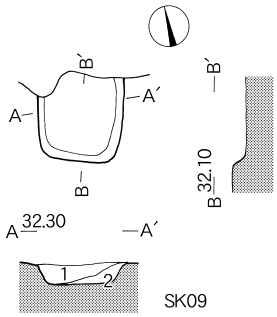
SK03
1．褐色土(10YR4/4)
　多量のローム粒子・ロームブロックを斑状に含む。
　締まりがあり、粘性にとむ。



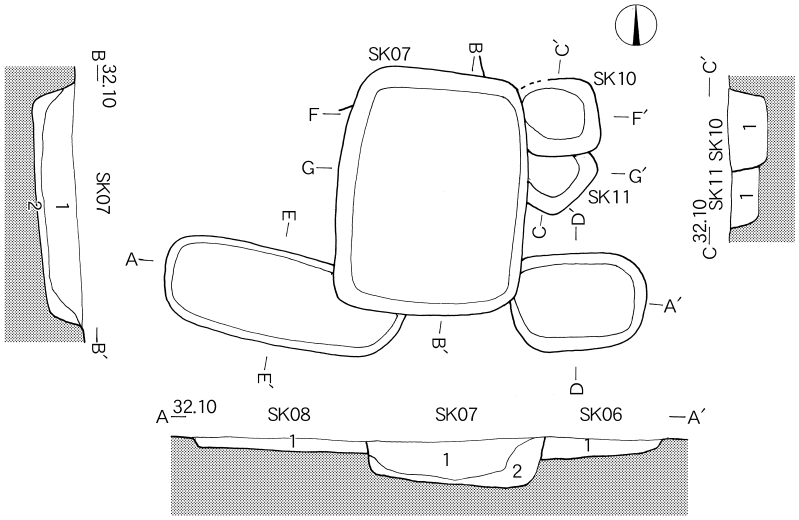
SK04
1．黒褐色土(10YR3/2)
　多量のローム粒子・ロームブロックを含む。
　締まりがあり、粘性にとむ。
2．黒褐色土(10YR2/3)
　多量のローム粒子・ロームブロックを含む。
　締まりがあり、粘性にとむ。



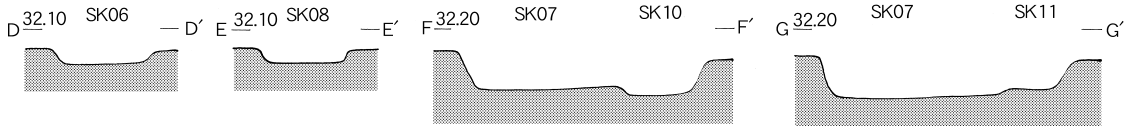
SK05
1．黒褐色土(10YR2/3)
　多量のローム粒子・ロームブロックを斑状に含む。
　締まりがあり、粘性にとむ。



SK09
1．褐色土(10YR4/4)　　多量のローム粒子を含む。
　　締まりがあり、粘性にとむ。
2．褐色土(10YR4/4)　　多量のローム粒子を含む。
　　締まりがあり、粘性にとむ。

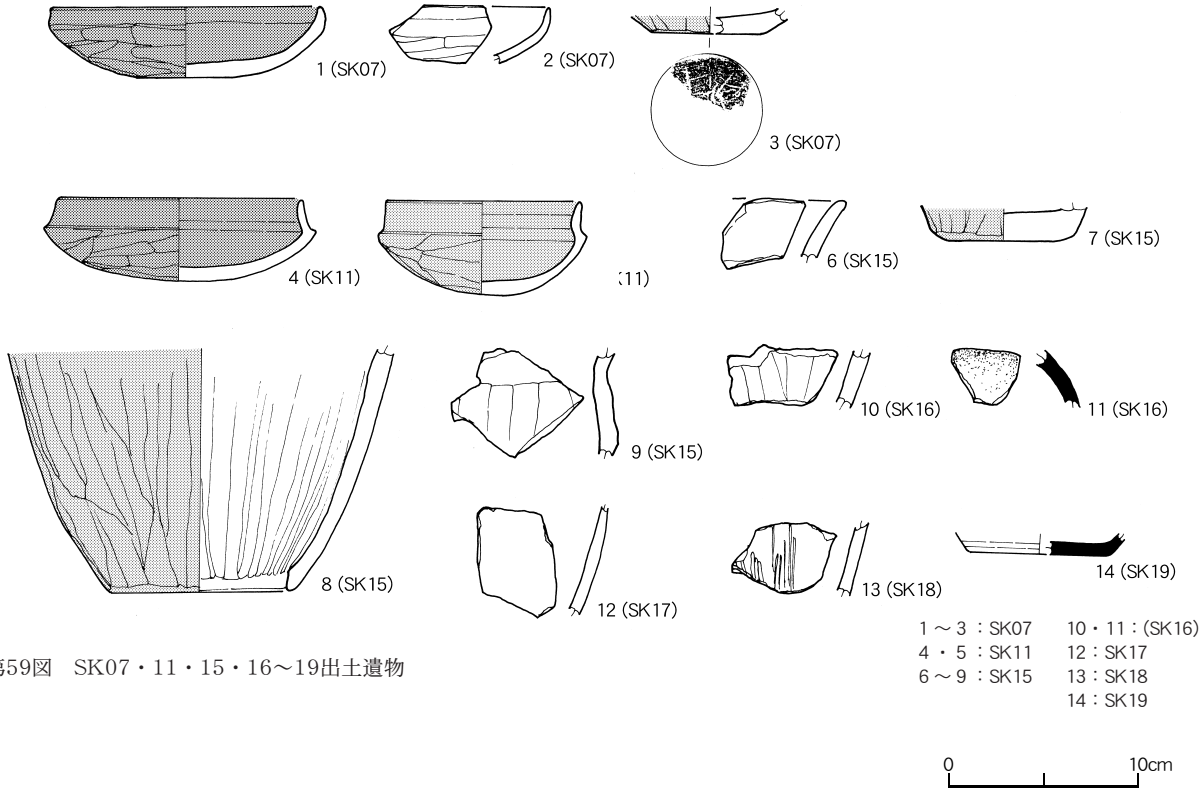


SK06
1．暗褐色土(10YR3/4)　　多量のローム粒子を含む。締まりがあり、粘性にとむ。
SK07
1．暗褐色土(10YR3/3)　　多量のローム粒子・KP(鹿沼)を含む。締まりがあり、粘性にとむ。
2．黒褐色土(10YR3/2)　　多量のローム粒子・KP(鹿沼)を含む。締まりがあり、粘性にとむ。
SK08
1．褐色土(10YR4/4)　　多量のローム粒子を含む。締まりがあり、粘性にとむ。
SK10
1．暗褐色土(10YR3/4)　　多量のローム粒子を含む。締まりがあり、粘性にとむ。
SK11
1．褐色土(10YR4/4)　　多量のローム粒子を含む。締まりがあり、粘性にとむ。



第58図　SK01～11実測図

0　2m



第59図　SK07・11・15・16～19出土遺物

SK13（第60図）

調査区西部、３－Ｂ区に位置する。SK15に切られ、南西壁辺が後世の攪乱により掘削されている。平面形は東西に長い長方形を呈するものと推定される。確認される規模は東西軸1.37m、南北軸0.86m、深さ76.0cmである。長軸方向はＮ－65°－Ｗを示す。底面は平坦であるが、硬化面や踏み固めた痕跡は認められない。壁面は外傾して立ち上がる。覆土は褐色土の三層に分層でき、埋め戻し土層である。

出土遺物がなく、時期は明瞭ではないが、覆土の状況から中世の土坑と考える。

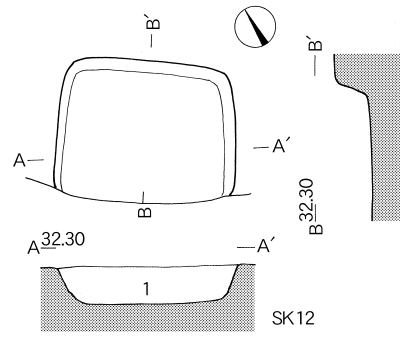
SK14（第60図）

調査区西部、３－Ｂ区に位置し、SK15に切られている。平面形は南北に長い長方形を呈するものと推定される。確認される規模は東西軸0.57m、南北軸0.86m、深さ62.5cmである。長軸方向はＮ－14°－Ｗを示す。底面は平坦であるが、硬化面や踏み固めた痕跡は認められない。壁面は外傾して立ち上がる。覆土は明瞭ではなかった。出土遺物がなく、時期は明瞭ではないが、覆土の状況から中世の土坑と考える。

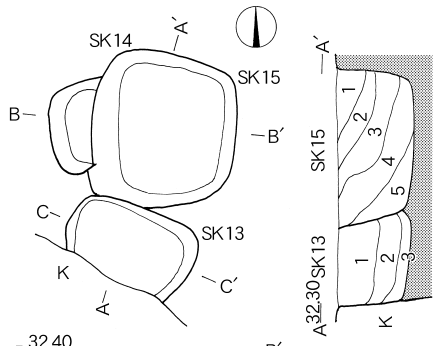
SK15（第59・60図）

調査区西部、３－Ｂ区に位置し、SK13・14を切っている。平面形は隅丸正方形を呈する。規模は東西軸1.52m、南北軸1.62m、深さ77.0cmである。長軸方向はＮ－４°－Ｅを示す。底面は平坦であるが、硬化面や踏み固めた痕跡は認められない。壁面は外傾して立ち上がる。覆土は五層に分層でき、埋め戻し土層である。

出土遺物は、土師器が覆土中で検出された。第59図６は甕の口縁部小破片である。口縁部が外反する。７は甕の底部破片である。外面に赤彩が施されている。８・９は甑である。８は単孔式の胴部下半部の破片である。胴部下端で内彎し、胴部は直線的に外傾する。赤彩が認められる。９は頸部付近の破片で、口縁部と胴部の境に稜をもつ。時期は６世紀後半と考えられる。

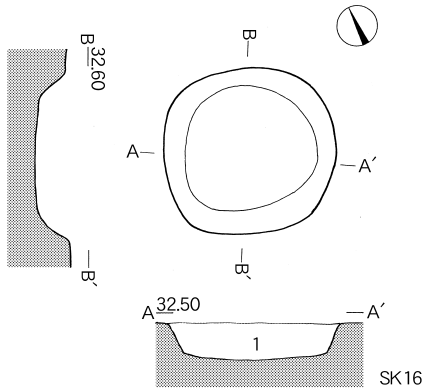


SK12
1．褐色土(10YR4/4)　多量のローム粒子・ロームブロックを斑状に含む。締まりがあり、粘性にとむ。

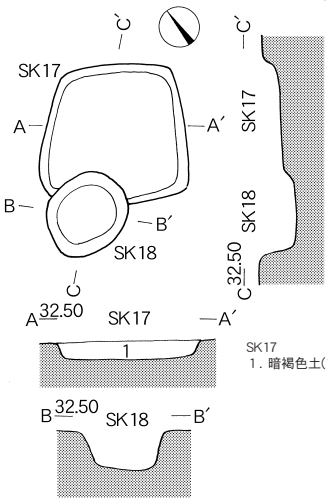


SK13
1．褐色土(10YR4/4)　多量のKP(鹿沼)を含む。締まりがあり、粘性にとむ。
2．褐色土(10YR4/6)　多量のローム粒子・KP(鹿沼)を含む。締まりがあり、粘性にとむ。
3．褐色土(10YR4/6)　多量のKP(鹿沼)を含む。締まりがあり、粘性にとむ。

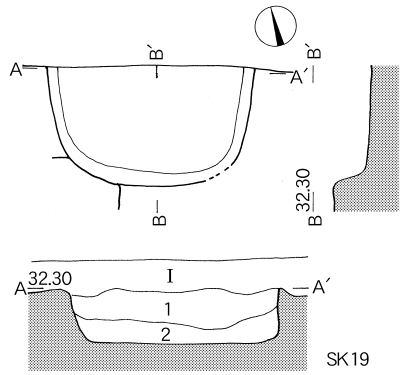
SK15
1．褐色土(10YR4/4)　多量のローム粒子を含む。締まりがあり、粘性にとむ。
2．暗褐色土(10YR3/4)　少量のローム粒子を含む。締まりがあり、粘性にとむ。
3．褐色土(10YR4/6)　多量のローム粒子・ロームブロックを含む。締まりがあり、粘性にとむ。
4．黒褐色土(10YR3/2)　少量のローム粒子を含む。締まりがあり、粘性にとむ。
5．暗褐色土(10YR3/4)　多量のローム粒子を含む。締まりがあり、粘性にとむ。



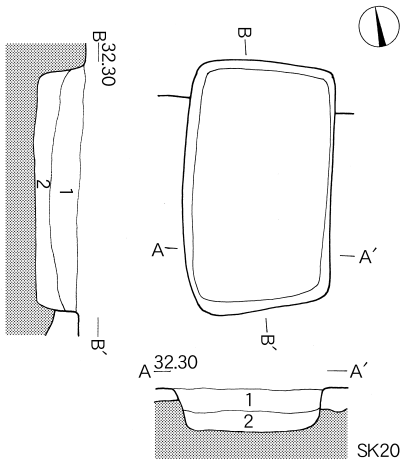
SK16
1．黒褐色土(10YR2/3)　少量のローム粒子を含む。締まりがあり、粘性にとむ。



SK17
1．暗褐色土(10YR3/3)　多量のローム粒子を含む。締まりがあり、粘性にとむ。



SK19
Ⅰ．褐灰色土(10YR4/1)　表土層
1．暗褐色土(10YR3/4)　多量のローム粒子を含む。締まりがあり、粘性にとむ。
2．暗褐色土(10YR3/4)　多量のローム粒子・ロームブロックを斑状に含む。締まりがあり、粘性にとむ。



SK20
1．暗褐色土(10YR3/3)　多量のローム粒子・ロームブロックを斑状に含む。締まりがあり、粘性にとむ。
2．暗褐色土(10YR3/4)　多量のローム粒子を含む。締まりがあり、粘性にとむ。

第60図　SK12～20実測図

0　2m

SK16（第59・60図）

調査区北西部、２－Ｃ区に位置する。平面形は略円形で、規模は東西軸1.76m、南北軸1.83m、深さ35.2cmである。底面は平坦であるが、硬化面や踏み固めた痕跡は認められない。壁面は外傾して立ち上がる。覆土は黒褐色土の単層で、ローム粒子を含む埋め戻し土層である。

出土遺物は、土師器・須恵器が覆土中で検出された。第59図10は土師器甕の胴部破片である。外傾して立ち上がる。11は須恵器瓶の肩部破片であろう。自然釉が掛かっている。時期は９世紀と考えられる。

SK17（第59・60図）

調査区中央北西部、３－Ｄ区に位置し、SK18を切っている。平面形は北壁辺が短く、南壁辺が長い台形を呈する。規模は東西軸1.51m、南北軸1.58m、深さ19.0cmである。底面は平坦であるが、硬化面や踏み固めた痕跡は認められない。壁面は外傾して立ち上がる。覆土は暗褐色土の単層で、多量のローム粒を含有する埋め戻し土層である。

出土遺物は、土師器が覆土中で検出された。第59図12は土師器甕の胴部破片である。下半部付近で内彎気味に立ち上がる。時期は９世紀と推定する。

SK18（第59・60図）

調査区中央北西部、３－Ｄ区に位置し、SK17に切られている。平面形は楕円形を呈し、規模は東西軸0.76m、南北軸0.88m、深さ35.0cmである。長軸方向はＮ－76°－Ｅを示す。底面は平坦であるが、硬化面や踏み固めた痕跡は認められない。壁面は外傾して立ち上がる。覆土は明瞭ではなかった。

出土遺物は、土師器が覆土中で検出された。第59図13は土師器甕の胴部破片である。下半部付近で直線的に立ち上がる。時期は９世紀と推定する。

SK19（第59・60図）

調査区北部、２－Ｅ区に位置する。SI07を切り、北部は未調査区域に延びている。平面形は南北に長い長方形を呈するものと推定される。確認できた規模は東西軸2.16m、南北軸1.29m、深さ36.4cmである。長軸方向はＮ－73°－Ｗを示す。底面は平坦であるが、硬化面や踏み固めた痕跡は認められない。壁面は外傾して立ち上がる。覆土は暗褐色土の二層で、埋め戻し土層である。

出土遺物は、須恵器小破片が覆土中で検出された。第59図14は須恵器坏で、底部破片である。ロクロ成形で、底部はヘラ切りである。時期は９世紀前半と推定する。

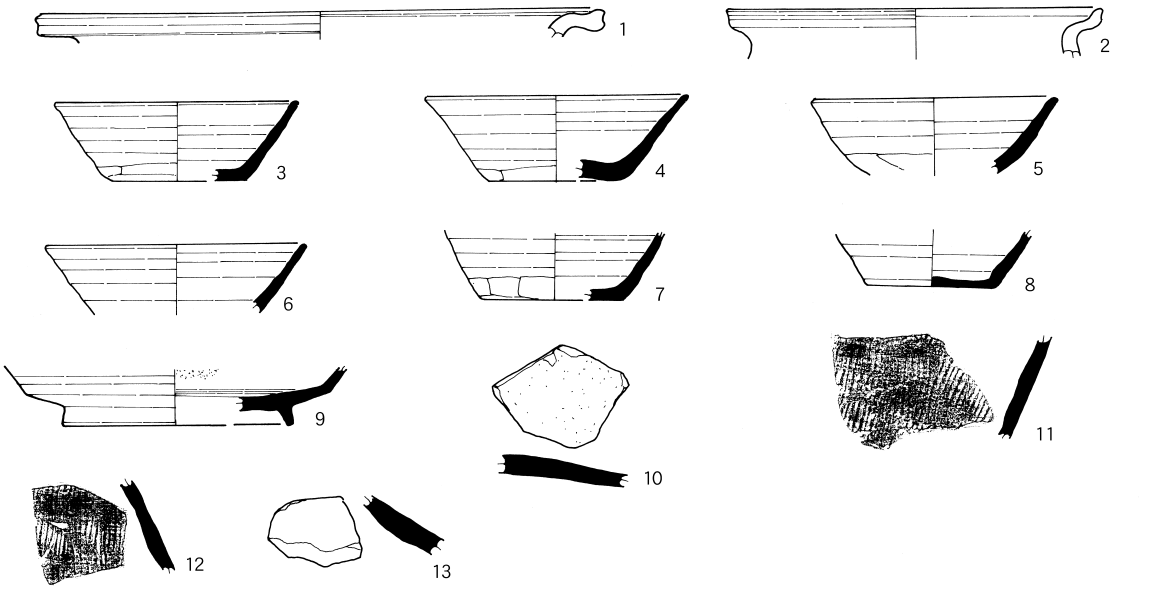
SK20（第60・61図）

調査区北部、２－Ｄ・Ｅ区に位置し、SI07を切っている。平面形は南北に長い長方形し、規模は東西軸1.55m、南北軸2.66m、深さ52.0cmである。長軸方向はＮ－６°－Ｅを示す。底面は平坦であるが、硬化面や踏み固めた痕跡は認められない。壁面は外傾して立ち上がる。覆土は暗褐色土の二層で、埋め戻し土層である。

出土遺物は、土師器・須恵器が覆土中で検出された。第61図１・２は土師器甕である。口縁部は強く外反し、口唇部端は短く摘み上げられている。３～13は須恵器である。３～８は坏で、ロクロ成形である。３～５・７は二次底部面が手持ちヘラケズリで、新治窯産である。８の底部は回転ヘラ切りで岩間窯産であろうか。９は有台盤で、高台はハの字状に開き、体部は外傾して立ち上がる。自然釉が掛かり、新治窯産である。10は蓋である。自然釉が掛かっている。木葉下窯産である。11・12は甕の胴部破片である。外面に平行タタキが施されている。新治窯産である。13は長頸瓶の肩部破片である。新治窯産である。時期は９世紀前半と推定する

SK21（第62・63図）

調査区北部、３－Ｄ・Ｅ区に位置し、南側大半が後世の攪乱により掘削されている。平面形は南北に長い長方形を呈するものと推定され、確認される規模は東西軸2.13m、南北軸0.91m、深さ31.3cmである。長軸方向はＮ－



第61図　SK20出土遺物

71°－Wを示す。底面は平坦であるが、硬化面や踏み固めた痕跡は認められない。壁面は外傾して立ち上がる。覆土は暗褐色土の単層で、多量のローム粒子やロームブロックを含有する埋め戻し土層である。

出土遺物は、須恵器が覆土中で検出された。第63図１は甕の胴部破片である。外面に平行タタキが施されている。時期は９世紀前半と推定する。

SK22（第62・63図）

調査区北部、３－Ｅ区に位置する。SK23に切られている。平面形は南北に長い隅丸長方形を呈し、規模は東西軸1.45m、南北軸1.77m、深さ21.0cmである。長軸方向はＮ－12°－Ｅを示す。底面は平坦であるが、硬化面や踏み固めた痕跡は認められない。壁面は外傾して立ち上がる。覆土は褐色土の単層で、多量ローム粒子を含有する埋め戻し土層である。

出土遺物は、土師器が覆土中で検出された。第63図２は甕の頸部破片である。口縁部がくの字状に外反する。時期は古墳時代後期と推定する。

SK23（第62・63図）

調査区北部、３－Ｅ区に位置し、SK22を切っている。平面形は東西に長い隅丸長方形を呈する。規模は東西軸1.66m、南北軸1.46m、深さ49.0cmである。長軸方向はＮ－87°－Ｗを示す。底面は平坦であるが、硬化面や踏み固めた痕跡は認められない。北西隅に径89.0×75.0cm、深さ32.3cmのピットを伴う。壁面は外傾して立ち上がる。覆土は暗褐色土の二層で、いずれも多量のローム粒子を含有する埋め戻し土層である。

出土遺物は、土師器が覆土中で検出された。第63図３・４は甕の胴部破片である。いずれも外傾して立ち上がる。時期は９世紀と推定する。

SK24（第62・63図）

調査区北部、３－Ｅ区に位置し、SI09を切っている。平面形は東西に長い長方形を呈する。規模は東西軸2.26m、南北軸1.92m、深さ18.0cmである。長軸方向はＮ－79°－Ｗを示す。底面は平坦であるが、硬化面や踏み固

めた痕跡は認められない。壁面は外傾して立ち上がる。覆土は暗褐色土の単層で、埋め戻し土層である。

出土遺物は、土師器が覆土中で検出された。第63図５は須恵器坏身模倣坏で、口縁部と体部の境に明瞭な稜をもつ。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。外面に赤彩が施されている。６は甕の胴部破片である。外傾して立ち上がる。時期は６世紀後半と推定する。

SK25（第62・63図）

調査区北部、２－Ｅ区に位置する。SI09を切り、北側は未調査区域に延びている。平面形は東西に長い長方形を呈するものと推定される。確認された規模は東西軸2.48m、南北軸0.71m、深さ52.0cmである。長軸方向はＮ－67°－Ｗを示す。底面は平坦であるが、硬化面や踏み固めた痕跡は認められない。壁面は外傾して立ち上がる。覆土は暗褐色土の三層で、自然堆積である。

出土遺物は、土師器が覆土中で検出された。第63図７は甕の胴部破片である。胴部は内彎気味に外傾する。時期は９世紀と推定する。

SK26（第62図）

調査区北部、２－Ｆ、３－Ｆ区に位置し、北東側の約半分は未調査区域に延びている。平面形は東西に長い長方形で、確認される規模は東西軸2.60m、南北軸0.56m、深さ53.0cmである。長軸方向はＮ－68°－Ｗを示す。底面は起伏があり、硬化面や踏み固めた痕跡は認められない。壁面は外傾して立ち上がる。覆土は暗褐色土の二層で、自然堆積である。

出土遺物がなく、時期は明瞭ではないが、覆土の状況から中世の土坑の可能性が高い。

SK27（第62図）

調査区北部、３－Ｆ区に位置し、SK33を切っている。粘土貼り土坑である。平面形は南北に長い隅丸長方形を呈する。規模は東西軸1.12m、南北軸1.68m、深さ10.0cmである。長軸方向はＮ－６°－Ｅを示す。底面は厚さ10cmの白色粘土を床面に敷き詰めている。壁面は外傾して立ち上がる。覆土は粘土貼りのみ確認された。

出土遺物がなく、時期は明瞭ではないが、覆土や形状の状況から判断して近世の土坑である。

SK28（第62図）

調査区北部、３－Ｆ区に位置し、SK29を切っている。平面形は南北に長い長方形を呈する。規模は東西軸1.30m、南北軸1.64m、深さ12.0cmである。長軸方向はＮ－７°－Ｅを示す。底面は平坦であるが、硬化面や踏み固めた痕跡は認められない。壁面は外傾して立ち上がる。覆土は暗褐色土の単層で、埋め戻し土層である。

出土遺物がなく、時期は明瞭ではないが、覆土の状況から中世の土坑の可能性が高い。

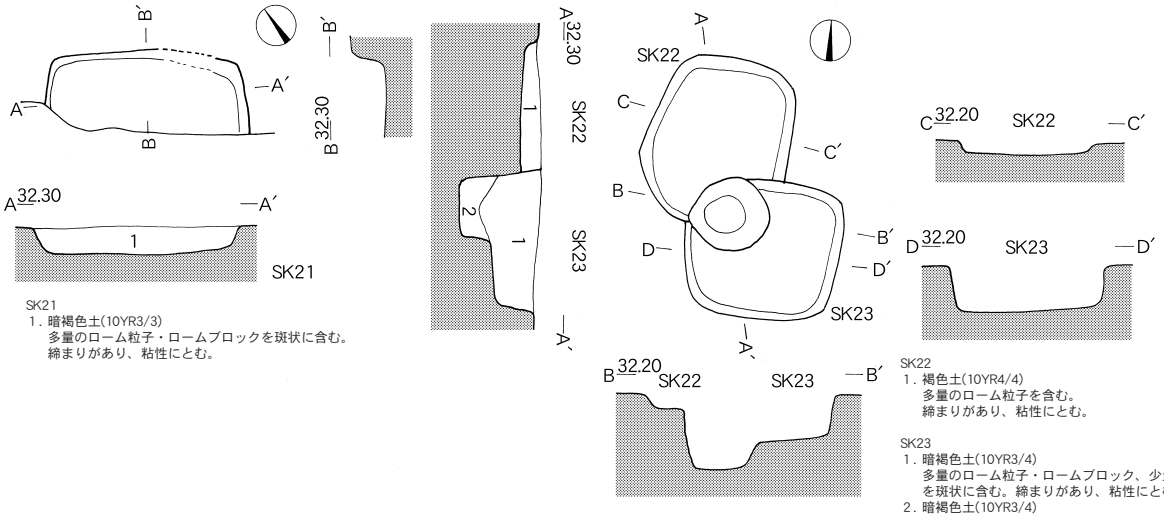
SK29（第62図）

調査区北部、３－Ｆ区に位置する。SK28に切られ、西側が攪乱を受けている。平面形は南北に長い長方形を呈する。確認される規模は東西軸0.93m、南北軸1.57m、深さ14.0cmである。長軸方向はＮ－13°－Ｅを示す。底面は平坦であるが、硬化面や踏み固めた痕跡は認められない。壁面は外傾して立ち上がる。覆土は暗褐色土の単層で、埋め戻し土層である。

出土遺物がなく、時期は明瞭ではないが、覆土の状況から中世の土坑の可能性が高い。

SK30（第64・65図）

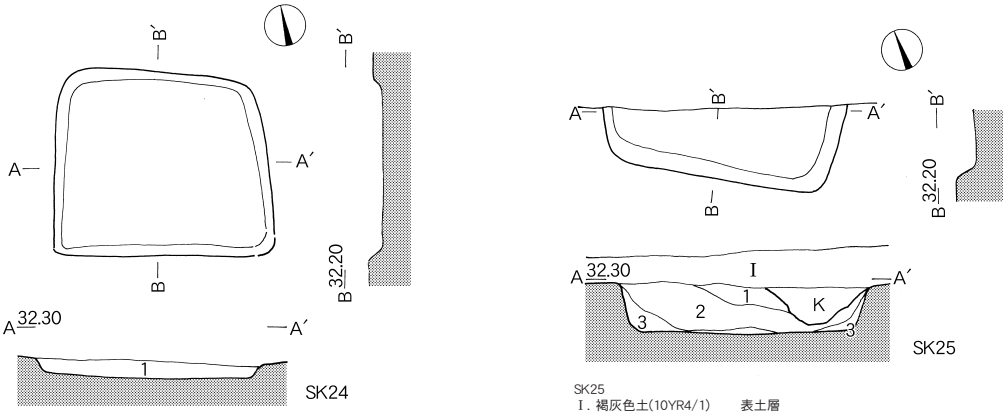
調査区中央北部、３－Ｅ区に位置し、SK34を切っている。粘土貼り土坑である。平面形は東西に長い隅丸長方形を呈する。規模は東西軸1.79m、南北軸1.20m、深さ32.0cmである。長軸方向はＮ－85°－Ｗを示す。壁面から底面にかけて厚さ5.0cmの灰白色土粘土を貼りつけている。底面はほぼ平坦で、堅緻である。壁面は外傾して立ち上がる。覆土は褐色、暗褐色土の二層で、埋め戻し土層である。



SK21
1．暗褐色土(10YR3/3)
多量のローム粒子・ロームブロックを斑状に含む。
締まりがあり、粘性にとむ。

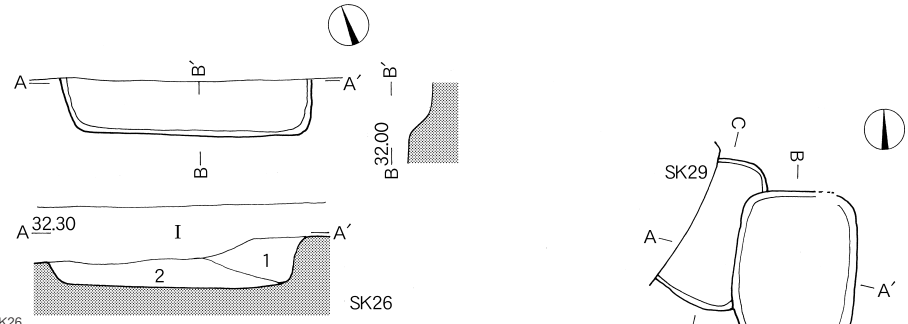
SK22
1．褐色土(10YR4/4)
多量のローム粒子を含む。
締まりがあり、粘性にとむ。

SK23
1．暗褐色土(10YR3/4)
多量のローム粒子・ロームブロック、少量のKP(鹿沼)を斑状に含む。締まりがあり、粘性にとむ。
2．暗褐色土(10YR3/4)
多量のローム粒子を含む。
締まりがあり、粘性にとむ。



SK24
1．暗褐色土(10YR3/3)
多量のローム粒子を含む。締まりがあり、粘性にとむ。

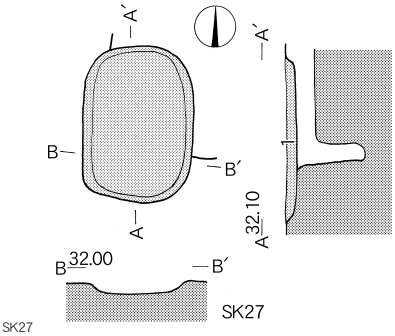
SK25
Ⅰ．褐灰色土(10YR4/1)　表土層
1．暗褐色土(10YR3/4)　多量のローム粒子を含む。締まりがあり、粘性にとむ。
2．暗褐色土(10YR3/4)　多量のローム粒子・ロームブロックを斑状に含む。締まりがあり、粘性にとむ。
3．暗褐色土(10YR3/3)　多量のローム粒子を含む。締まりがあり、粘性にとむ。



SK26
Ⅰ．褐灰色土(10YR4/1)　表土層
1．暗褐色土(10YR3/4)　多量のローム粒子を含む。締まりがあり、粘性にとむ。
2．褐色土(10YR4/4)　多量のローム粒子・ロームブロックを含む。締まりがあり、粘性にとむ。

SK28
1．暗褐色土(10YR3/4)
多量のローム粒子・ロームブロックを含む。
締まりがあり、粘性にとむ。

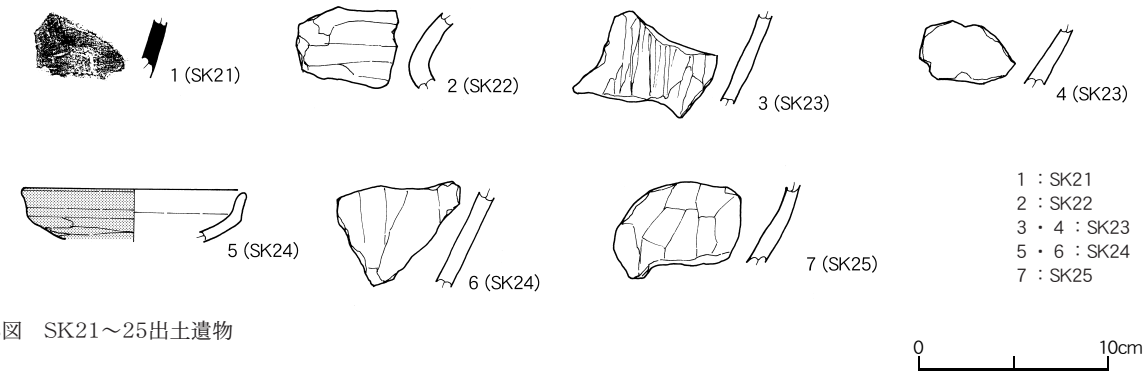
SK29
1．暗褐色土(10YR4/4)
多量のローム粒子を含む。
締まりがあり、粘性にとむ。



SK27
1．褐色土(10YR4/4)　多量のローム粒子・焼土粒子を含む。締まりがあり、粘性にとむ。

第62図　SK21～29実測図

0　2m



第63図　SK21～25出土遺物

出土遺物は、土師質土器と転用砥石が覆土中で検出された。第65図１・２は内耳鍋の破片である。１は口縁部で内耳が付けられている。2は体部破片である。３は瓦破片を再利用した砥石と推定される。長さ8.75cm、幅6.73cm、厚さ2.11cm、重さ119.0gを測る。表裏両面と側面の1面に研磨面が確認できる。

時期は中世後期15世紀後半から16世紀前半と考えられる。

SK31（第64・65図）

調査区中央北部、３－Ｅ区に位置する。粘土貼り土坑である。平面形は東西に長い長方形を呈する。規模は東西軸1.40m、南北軸1.02m、深さ31.2cmである。長軸方向はＮ－88°－Ｗを示す。壁面から底面にかけて厚さ5.0cmの灰白色土粘土を貼りつけている。底面は鍋底状で、堅緻である。壁面は外傾して立ち上がる。覆土は褐色の単層で、埋め戻し土層である。

出土遺物は、土師質土器が覆土中で検出された。第65図４は内耳鍋の体部破片である。外傾して立ち上がる。時期は中世後期から近世前半と推定する。

SK32（第64図）

調査区中央北部、３－Ｅ区に位置する。SI12・SK35・36を切り、北壁辺は攪乱を受けている。粘土貼り土坑である。平面形は南北に長い隅丸長方形を呈する。規模は東西軸0.99m、南北軸1.18m、深さ22.6cmである。長軸方向はＮ－８°－Ｅを示す。壁面から底面にかけて厚さ7.0～12.0cmの灰白色土粘土を貼りつけている。底面は平坦で、堅緻である。壁面は外傾して立ち上がる。覆土は褐色土、暗褐色土の二層で、埋め戻し土層である。

出土遺物の出土はないが、隣接するSK31と同時期の中世後期から近世前半と推定する。

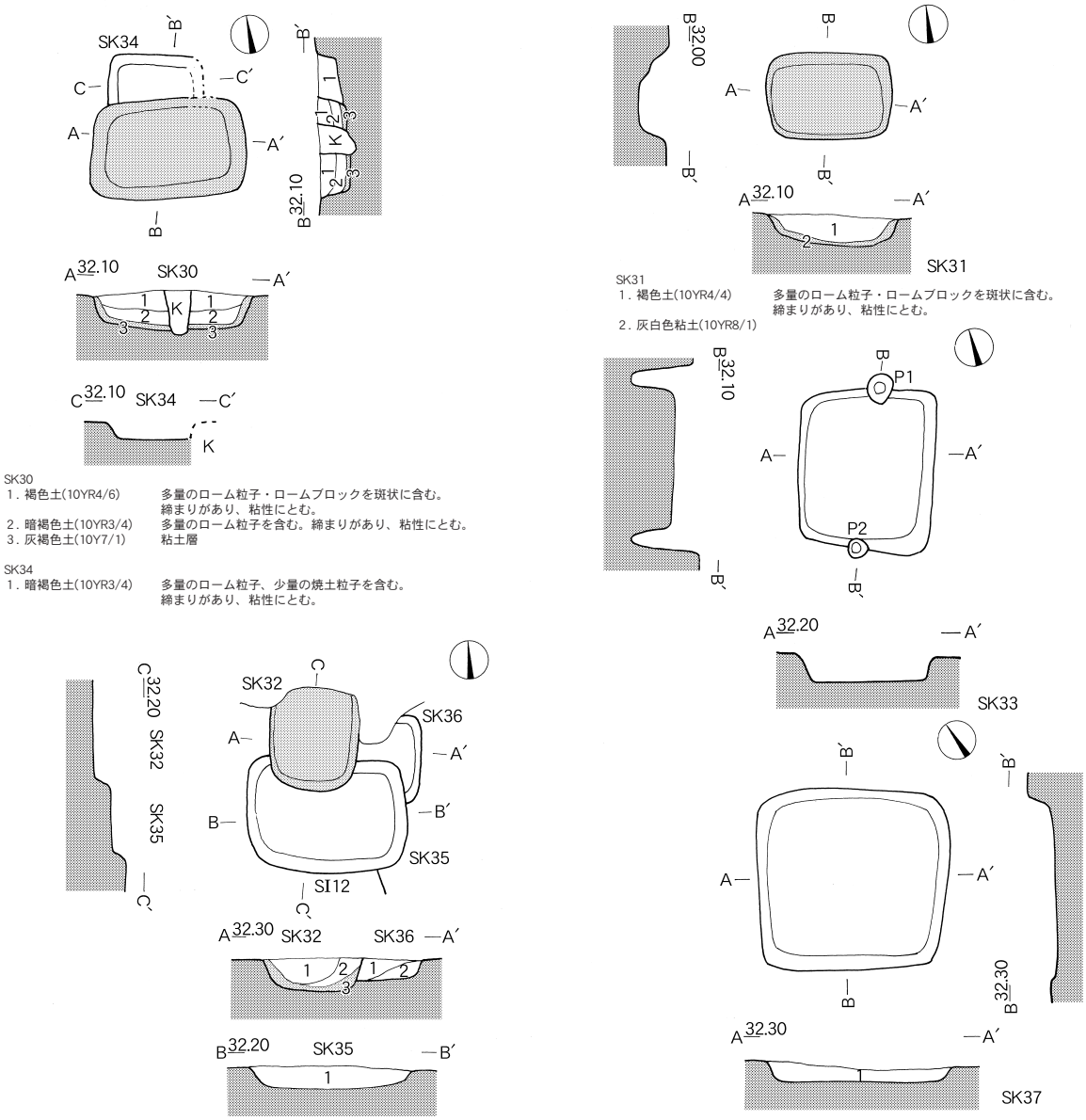
SK33（第64・65図）

調査区北部、３－Ｆ区に位置し、SK27に切られている。平面形は南北に長い長方形を呈し、規模は東西軸1.52m、南北軸1.90m、深さ31.5cmである。長軸方向はＮ－12°－Ｅを示す。底面は平坦で、硬化面や踏み固めた痕跡が僅かには認めらる。壁面は外傾して立ち上がる。北壁辺および南壁辺に柱穴を伴う、北Ｐ１は径33.0×30.0cm、深さ50.0cm、南Ｐ２は径21.0×21.0cm、深さ49.5cmを測る。

出土遺物は、土師器が覆土中で検出された。第65図５は坏である。丸底の底部から体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は僅かに外傾する。口縁部と体部に境をもつ。６・７は甕である。２は底部破片である。３は胴部破片である。これらは６世紀後半の時期であるが、土坑の形態は中世であり、流れ込み遺物と判断される。

SK34（第64図）

調査区中央北部、３－Ｅ区に位置し、SK30に切られている。平面形は方形を呈し、確認される規模は東西軸



SK30
1．褐色土(10YR4/6)　多量のローム粒子・ロームブロックを斑状に含む。締まりがあり、粘性にとむ。
2．暗褐色土(10YR3/4)　多量のローム粒子を含む。締まりがあり、粘性にとむ。
3．灰褐色土(10Y7/1)　粘土層

SK34
1．暗褐色土(10YR3/4)　多量のローム粒子、少量の焼土粒子を含む。締まりがあり、粘性にとむ。

SK31
1．褐色土(10YR4/4)　多量のローム粒子・ロームブロックを斑状に含む。締まりがあり、粘性にとむ。
2．灰白色粘土(10YR8/1)

SK32
1．暗褐色土(10YR3/3)　多量のローム粒子・ロームブロックを含む。締まりがあり、粘性にとむ。
2．暗褐色土(10YR3/4)　多量のローム粒子を含む。締まりがあり、粘性にとむ。
3．灰白色粘土(10YR8/1)

SK35
1．暗褐色土(10YR3/4)　多量のローム粒子・ロームブロックを含む。締まりがあり、粘性にとむ。

SK36
1．暗褐色土(10YR3/4)　多量のローム粒子を含む。締まりがあり、粘性にとむ。
2．暗褐色土(10YR3/3)　少量のローム粒子を含む。締まりがあり、粘性にとむ。

SK37
1．暗褐色土(10YR3/4)　多量のローム粒子・ロームブロックを斑状に含む。締まりがあり、粘性にとむ。

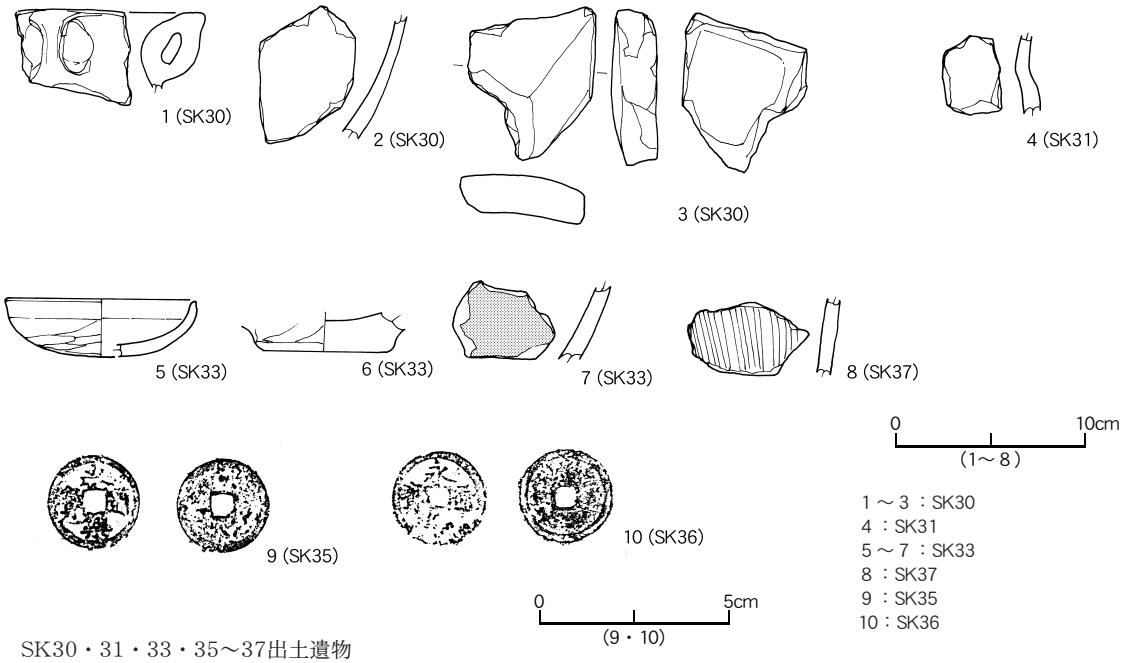
第64図　SK30～37実測図

0.90m、南北軸0.53m、深さ33.0cmである。長軸方向はN－83°－Wを示す。底面は平坦であるが、硬化面や踏み固めた痕跡は認められない。壁面は外傾して立ち上がる。覆土は暗褐色土の単層で、埋め戻し土層である。

出土遺物がなく、時期は明瞭ではないが、覆土の状況から中・近世の土坑の可能性が高い。

SK35（第64・65図）

調査区中央北部、３－Ｅ区に位置する。SK32に切られ、SI12・SK36を切っている。墓坑である。平面形は東



第65図　SK30・31・33・35～37出土遺物

西に長い隅丸長方形を呈する。規模は東西軸1.78m、南北軸1.26m、深さ19.6cmである。長軸方向はＮ－90°を示す。底面は平坦であるが、硬化面や踏み固めた痕跡は認められない。壁面は外傾して立ち上がる。覆土は暗褐色土の単層で、埋め戻し土層である。

出土遺物として銭貨が1枚南西隅の底面で出土している。第65図９は「永楽通寶」(明、1408年)で、銭径2.51cm、厚さ0.18cm、重さ3.74gを測る。錆化が進んで読みづらい箇所もみられるが、文字は比較的鮮明である。遺構の時期は中世後期と推定する。

SK36（第64・65図）

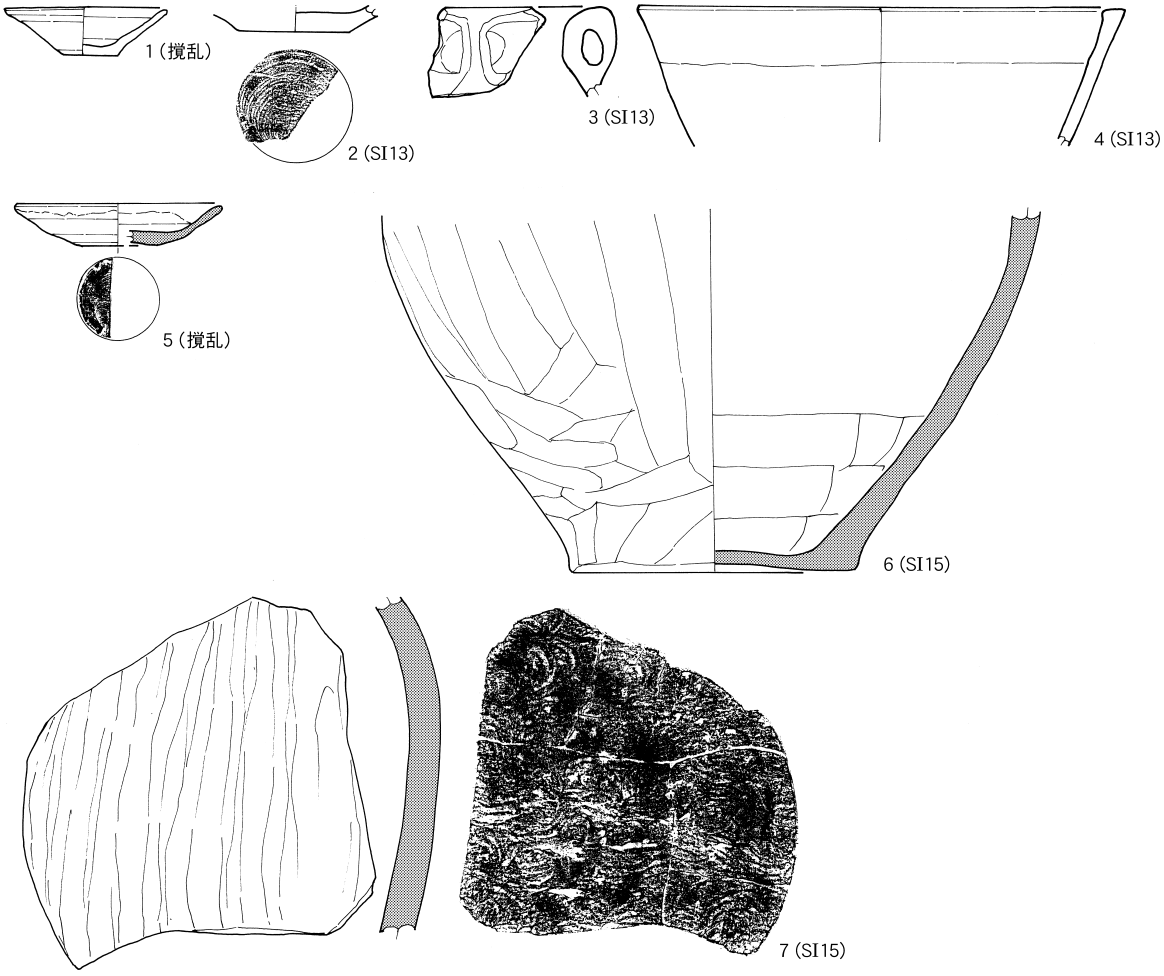
調査区中央北部、３－Ｅ区に位置する。SK35・36に切られ、北側が攪乱を受けてい。墓坑である。平面形は東西に長い長方形を呈するものと推定される。確認できる規模は東西軸0.99m、南北軸0.72m、深さ17.9cmである。長軸方向はＮ－２°－Ｅを示す。底面は平坦であるが、硬化面や踏み固めた痕跡は認められない。壁面は外傾して立ち上がる。覆土は暗褐色土の単層で、埋め戻し土層である。

出土遺物として銭貨が1枚東壁際の底面で出土している。第65図10は「永楽通寶」(明、1408年)で、銭径2.54cm、厚さ0.14cm、重さ3.42gを測る。錆化が進んで読みづらく文字は「永」のみやや鮮明である。遺構の時期は中世後期と推定する。

SK37（第64・65図）

調査区西部、３－Ｃ、４－Ｃ区に位置し、SI08を切っている。平面形は正方形を呈し、規模は東西軸2.12m、南北軸2.02m、深さ21.4cmである。底面は平坦であるが、硬化面や踏み固めた痕跡は認められない。壁面は外傾して立ち上がる。覆土は暗褐色土の単層で、埋め戻し土層である。

出土遺物は、土師器が覆土中で検出された。第65図８は甕の胴部破片である。外傾して立ち上がる。時期は９世紀と推定する。



第66図　遺構外出土の中・近世遺物

0　10cm

第７節　遺構外出土遺物（第66図）

中近世の遺構外出土遺物として土師質土器、陶器が検出されており、まとめて掲載した。なお、出土地点はそれぞれ個別に括弧書きで示している。

１は土師質土器小皿の完存品である。ロクロ成形で底部は回転糸切りで切り離されている。見込みは窪みがみられる。15世紀後半から16世紀前半に比定される。撹乱より出土。２も土師質土器皿の底部破片である。ロクロ成形で底部は回転糸切りである。中世後期から近世であろう。３・４は土師質土器内耳鍋の口縁部破片である。３は内耳が付けられている。15世紀後半から16世紀前半に比定される。５は古瀬戸、鉄釉緑釉小皿である。ロクロ成形で、底部は回転糸切りで切り離されている。鉄釉は口縁部内外面に掛かっている。古瀬戸後期で15世紀前半から中葉に比定される。撹乱より出土。６は常滑の胴下半部の破片である。平底から胴部が内彎気味に大きく開く。内外面ともヘラナデ成形である。中世後半に比定される。７は陶器甕の胴部破片である。東海系と推定されるが、産地は明瞭ではない。近世であろう。

（小川和博・遠藤啓子）

第５章　まとめ

１．はじめに

今回調査対象となった東成井東原遺跡は、石岡市の東端で、園部川の左岸に位置している。今回1,630㎡の面積を調査し、竪穴住居跡20軒、溝跡1条、井戸跡1基、墓坑を含む土坑37基が検出された。これらの遺構の時期は古墳時代後期、奈良・平安時代、中・近世と長期に亘って営まれた遺跡であることが判明した。しかし、調査区の約40%は後世の攪乱を受けていたため、検出できなかった遺構が存在することは確実である。しかも完掘できた住居跡はわずか1軒のみであった。ここでは十分な見解を見いだせない可能性が大きいが、少なくとも本調査区で調査された竪穴住居跡および土坑についての調査知見を整理しておきたい。

２．古墳時代後期の竪穴住居跡について

いわゆる鬼高期に相当する竪穴住居跡は、SI01・02・03・04・08・09・12・14・17・19・20の11軒で、検出軒数の半分に相当する。調査区の全面に分布していることから、後期の大集落の存在を予想させる。したがって、調査区の北側に広がることは確実であろう。またこれらは他時期の遺構との切り合いを除いて重複することがないことも大きな特徴として挙げることができる。また少なくとも出土遺物をみる限り、６世紀後半から７世紀前半と比較的時間差の幅はないが、ほぼ同時に存在したかは不明である。ここで改めて11軒の竪穴住居跡を集約すると下記のとおりとなる。

住居番号	平面形	東西軸	南北軸	方位	主柱穴	カマド	貯蔵穴	時期
SI01	方形	(4.60)	4.65	N－20°－W	3(4)	北壁	有	6C後半
SI02	方形	(1.7)	(3.0)	N－44°－W	0(?)	(北西)	不明	6C後半
SI03	方形	(1.23)	(1.79)	N－42°－W	0(?)	(北西)	不明	6C後半
SI04	方形	(2.82)	5.32	N－53°－W	2(4)	北西壁	有	7C前半
SI08	長方形	5.78	4.71	N－29°－E	0	(北)	無	後期
SI09	方形	4.86	4.93	N－37°－W	4	北西壁	不明	6c後半
SI12	方形	(3.55)	(2.80)	N－25°－W	2(4)	北西壁	不明	6c後半
SI14	方形	(2.32)	4.64	N－43°－W	2(4)	北西壁	不明	6c後半
SI17	方形	(5.56)	(3.31)	N－08°－W	1(4)+1	(北西)	不明	6c後半
SI19	方形	(1.22)	(1.10)	N－16°－W	0(?)	(北)	不明	後期
SI20	方形	(2.73)	(1.25)	N－09°－W	1(4)	(北)	不明	6c後半

※単位：m、(　)：現存値

以上11軒はいずれも攪乱もしくは未調査区域に掛かっていることから完掘された住居跡は皆無であり、検討するのに十分なデータを提供しているとはいいがたいが、ある程度は構築の傾向は窺えるものと思われる。まず住居跡の規模に関しては、一辺５m以上を有するものがSI04・08・17の３軒である。SI04は半分以上確認できていないものの、カマド、貯蔵穴、壁溝を有し、主柱穴４本柱構造のうち２本が検出されており、当該期の典型的な住居形態である。またSI17も大半が未調査区域に掛かり、やはり同じような状況となっているものの、南壁辺が確実に６mを超えることが判明しており、当調査区内において最大規模を呈している。検出された柱穴２本は主柱穴と梯子穴であり、４本柱構造であることが判る。なお、SI08については床面近くまで攪乱を受け、大型土坑が重複しているなど、カマドや柱穴など未確認であり、出土遺物の少なさも加わり検討する条件は良好ではない。次に４m台ではSI01・09・14の３軒が相当する。この中でSI09は５m近い住居跡で、４本柱構造を呈し、壁溝も全周する。またSI01とSI14は貯蔵穴の付設を除くとその規模は酷似している。それぞれ遺構は半分の検出であるが、出土遺物の豊富さも共通している。なお、規模が確定できない残りのSI02・03・12・19・20の５軒も後者の４m台に収まるものと推定され、卓越する大型住居跡の存在は確認できず、むしろ均一的な住居跡群により構成された集落跡であることが窺える。

なお、集落構成の時期を知る上で参考となるのが、各遺構の出土遺物の様相である。当調査により判明した古墳時代の時期については、概ね６世紀後半から７世紀前半頃と推察される。これらを系統的にその変遷を跡付けることができる器種のひとつに坏がある。坏はSI03・08・19を除き比較的纏まって出土している。大別すると須恵器を模倣したいわゆる「坏身模倣坏」と「埦形坏」である。前者は口縁部と体部に明瞭な境をもち、口縁部が内傾、直立もしくは外傾するものである。後者は口縁部と体部の境は明瞭ではなく、短い口縁部が内傾もしくは直立し、外傾するものは体部から直接立ち上がる。これらはさらに全体の器形から細分化が行われている。今後はこれら二者の組成を含めて論じる必要を感じている。因みに比較的纏まっているSI01では３：６の割合である。これが基準とならないとしても、「坏身模倣坏」の比率が多い段階、「埦形坏」の比率が多い段階では明らかに時間差があり、その比率から個々の形態を吟味し、全体の編年を組み立てることも可能であろう。

なお、こうした竪穴住居跡以外に土坑が確認されている。土坑覆土中から出土した遺物のうち、古墳時代に比定される土坑はSK07・11・15・22・24の５基である。SK11やSK15から６世紀後半の坏や甑が、SK07やSK24からは７世紀前半の坏が出土しており、長方形しくは方形を呈している。墓坑としての機能を有していたものと推測される。但しSK33から６世紀後半に比定される土師器坏が出土している。しかし、平面形や柱穴の配置から判断して、形態的に中世であり、流れ込み資料の可能性があることから除外した。

３．奈良・平安時代の竪穴住居跡について

本遺跡における奈良・平安時代の遺構として確認した竪穴住居跡は７軒である。遺物をみる限り、８世紀前半から９世紀前半に比定される。ここで改めて竪穴住居跡を概観すると下記のとおりである。

住居番号	平面形	東西軸	南北軸	方位	主柱穴	カマド位置	時期
SI05	方形	(3.21)	(2.61)	N－11°－W	1(4)	北壁	9C前半
SI06	方形	4.48	4.3	N－13°－W	0	北壁	9C前半
SI07	方形	4.32	4.57	N－15°－E	0	(北)	9C前半
SI10	方形	(2.25)	3.24	N－18°－W	0	(北)	9C前半
SI13	方形	4.63	(3.71)	N－0°	不明	北壁	8C後半
SI15	方形	4.72	4.14	N－0°	4＋1	北壁	8C後半
SI16	方形	(2.62)	3.02	N－12°－W	0	(北)	8C前半

※単位：m、(　)：現存値

以上７軒の構築年代は、竪穴住居跡から出土している土器の年代により判断したもので、８世紀前半から9世紀前半にかけてである。従来から検討されてきた住居跡の属性の共通性から構築時期の同時存在の可能性が高まることは事実であるが、土器編年の精緻にわたる昨今では、こうした形態の類似性だけの状況証拠だけでは解決できない問題も多く単純ではない。しかし、属性の類似性は、とくに出土遺物の少なさを充欠することは確かである。

一般的に県内の竪穴住居跡は古墳時代と比較すると、奈良・平安時代では規模の縮小化が見てとれるが、ここでは古墳時代では５～６m台が３軒あるものの、４m台も纏まっていた。その傾向は８世紀以降も同様で、４m台がSI05・06・07・13・15の５軒である。残りが３m台でSI10・16の２軒である。この４m台での問題は柱の設置である。カマドは北壁辺に設置されていても、柱穴の設置が判然としない。一辺４m台のSI05とSI15とは時間差があるものの、両者ともに４本柱構造である。このに対し、SI06とSI07は無柱穴住居跡である。いずれもSI05と同時期であり、４本柱の設置については建物の強度や機能、あるいは施主の嗜好の差などの問題を含め簡単に処理することはできないであろう。

つぎに出土遺物について全体的にその出土量は少ない。ここで産地が判明している須恵器を概観してみると、まず８世紀前半に比定されているSI16で出土した坏が新治窯産である。また９世紀前半に比定されているSI06で出土している高坏と蓋やSI0７の蓋も同様新治窯産である。一方８世紀第３四半期に比定されているSI15の須恵器のうち、第31図３・４・７の坏、同図９の有台坏、同図12の瓶類は木葉下窯もしくは大淵窯跡群産である。

やはり古墳時代と同様に、竪穴住居跡以外に土坑が確認されている。土坑覆土中から出土した遺物のうち、古代に比定される土坑はSK16～21・23・25・37の9基である。ここでも遺物の流れ込みの可能性も指摘されるが、

古代の土坑として判断した。平面形は円形・方形・長方形を呈している。円形はSK16がある。出土遺物は小破片のみである。方形はSK17・23・25・37の４基で土師器の小破片が出土している。この時期前代と同様に長方形土坑が際だっている。SK19・20・21のうち、SK20から多くの須恵器が出土した。坏は二次底部面が手持ちヘラケズリ技法で、いずれも新治窯産であり、甕や長頸瓶も新治窯産である。また有台盤、蓋は木葉下窯産で、これらは９世紀前半に比定されている。これらは全体的に形状が整っており、やはり墓坑としての機能をもっていたものと判断できる。

４．中世の遺構について

土坑のうち、古墳時代および古代に属する14基以外の土坑を中世から近世の時期と判断した。そのほか井戸跡１基と溝跡１条も同様である。あいにくすべての土坑から遺物の出土があるわけではなく、むしろほとんどないに等しい。それでも遺構の性格を示す遺物の出土がある。六道銭とみられる銭貨、墓坑と推定されている粘土貼り土坑である。まとめとして出土遺物が少ないため土坑を平面形から分類する。

ａ類：粘土貼り土坑である。隅丸長方形を呈する。(SK27・30・31・32)

ｂ類：無柱穴で長方形を呈する。(SK01・05・06・08・09・12・26・28・29・34・35・36)

ｃ類：無柱穴で方形を呈する。(SK10・13・14)

ｄ類：長方形土坑に柱穴が設置されている。(SK33)

ｅ類：円形を呈する。(SK02・03・04)

以上２３基を分類した。全体的に遺物の出土が少なく、時期を確定できるものはSK30・31・35・36の他に粘土貼り土坑であるSK27・32の６基のみである。まずａ類である粘土貼り土坑が４基検出されている。この粘土貼り土坑はその平面形によって時期差があることが判明しており、当遺跡の隅丸長方形もしくは隅丸方形は中世が主体であり、円形・楕円形は近世が多いとされており(吉原1994)、ここではいずれも隅丸長方形であること、またSK30やSK31で中世後期(15世紀後半から16世紀前半)の内耳鍋の出土から確実に中世後期に比定することができる。またｂ類の長方形土坑のうち、SK35、SK36から六道銭と推定される銭貨が出土しており、人骨は確認できなかったが、墓坑としてよいであろう。そのほかこうした遺物等が出土していないが、この形状から墓坑と判断できる。本来ならば粘土貼り土坑を含め調査区全体は中世の墓域と判断してよい。ここで墓域の広がりや成立の背景について言及していかなければならないが、今回の調査では十分に果たすことができなかった。

今後は園部川流域の周辺遺跡の検討を加えながら本遺跡の古墳時代から古代集落および中世の墓域の展開を明らかにすることによって、その評価をえることとなろう。

（小川和博・大渕由紀子）

参考文献

大久保隆史2011『猫松遺跡　長原遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告第348集　(財)茨城県教育財団

樫村宣行1993「茨城県南部における鬼高式土器について」『研究ノート』２号(財)茨城県教育財団

佐々木義則2000『武田石高遺跡　奈良・平安時代編』（(財）ひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告　第19集）

曾根俊雄他2012『東成井山ノ神遺跡』石岡市教育委員会、㈱ノガミ

吉原作平1994「粘土張り墓壙についての一考察」『研究ノート』３号(財)茨城県教育財団

第２表　東成井東原遺跡出土土器観察表

試掘調査出土土器観察表

挿図番号	番号	種別	器種	計測値(cm) 口径	器高	底径	器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
第4図	1	土師器	甕	-	-	-	外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。	黒色	石英・長石	胴部破片	T70
第4図	2	土師器	甑	-	(6.7)	5.8	外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。	灰黄橙色	黒色粒子・石英・長石	底部1/4残存	T77
第4図	3	土師器	甕	-	-	-	外面ヘラナデ。内面ヘラナデ。	橙色	石英・長石	胴部破片	T70
第4図	4	土師器	甕	-	-	-	外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。	褐灰色	石英・長石	胴部破片	T70
第4図	5	土師器	甕	-	(1.5)	6.0	外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。底部ヘラケズリ。	灰白色	黒色粒子・石英・長石	底部1/2残存	T77

遺構外出土土器観察表

挿図番号	番号	種別	器種	計測値(cm) 口径	器高	底径	器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
第7図	1	縄文土器	深鉢	-	-	-	細沈線文、太沈線文	褐灰色	石英・長石	胴部破片	田戸下層式
第7図	2	縄文土器	深鉢	-	-	-	太沈線文	赤褐色	石英・長石	胴部破片	田戸下層式
第7図	3	縄文土器	深鉢	-	-	-	平行沈線文	浅黄橙色	石英・長石	胴部破片	田戸下層式
第7図	4	縄文土器	深鉢	-	-	-	細沈線文	にぶい褐色	石英・長石	胴部破片	田戸下層式
第7図	5	縄文土器	深鉢	-	-	-	細沈線文	浅黄橙色	石英・長石	胴部破片	田戸下層式

SI01出土土器観察表

挿図番号	番号	種別	器種	計測値(cm) 口径	器高	底径	器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
第10図	1	土師器	坏	12.6	4.6	-	外面横ナデ、ヘラナデ。 内面横ナデ、ヘラナデ、ヘラミガキ。	浅黄色	黒色粒子・石英・長石	口縁部一部欠損	黒色処理
第10図	2	土師器	坏	14.0	(4.2)	-	外面横ナデ、ヘラケズリ。 内面横ナデ、ヘラナデ。	にぶい黄褐色	黒色粒子・石英・長石	体部1/6残存	赤彩
第10図	3	土師器	坏	15.0	(3.7)	-	外面横なで、ヘラケズリ。 内面横ナデ、ヘラナデ。	浅黄橙色	黒色粒子・石英・長石	体部1/8残存	赤彩
第10図	4	土師器	坏	15.4	5.1	-	外面横ナデ、ハケ、ヘラケズリ。 内面ヘラナデ、ヘラミガキ。	黒褐色	黒色粒子・石英・長石	口縁部一部欠損	黒色処理
第10図	5	土師器	坏	14.0	(3.5)	-	外面横ナデ、ヘラケズリ。 内面横ナデ、ヘラナデ。	にぶい黄色	黒色粒子・石英・長石	体部1/4残存	
第10図	6	土師器	坏	14.0	(3.5)	-	外面横ナデ、ヘラケズリ。 内面ヘラナデ。	黒色	石英・長石	体部1/5残存	黒色処理
第10図	7	土師器	坏	13.0	(3.8)	-	外面横ナデ、ヘラケズリ、ヘラミガキ。 内面横ナデ、ヘラナデ。	橙色	黒色粒子・石英・長石	体部1/3残存	赤彩
第10図	8	土師器	坏	13.0	(3.3)	-	外面横ナデ、ヘラケズリ。 内面横ナデ。	黒色	石英・長石	体部1/2残存	黒色処理
第10図	9	土師器	坏	13.0	(3.1)	-	外面横ナデ、ヘラケズリ。 内面横ナデ、ヘラナデ。	浅黄橙色	黒色粒子・石英・長石	体部1/6残存	
第10図	10	土師器	甕	14.0	(8.9)	-	外面オサエ、ヘラケズリ。 内面ヘラナデ。	橙色	黒色粒子・石英・長石	体部1/4残存	
第10図	11	土師器	甕	16.0	(6.8)	-	外面横ナデ、ヘラケズリ。 内面横ナデ、ヘラナデ、ヘラミガキ。	橙色	黒色粒子・石英・長石	体部1/6残存	
第10図	12	土師器	甕	16.0	(7.8)	-	外面横ナデ、ヘラケズリ。 内面ヘラナデ。	黒褐色	黒色粒子・石英・長石	体部1/8残存	
第10図	13	土師器	甕	15.0	(16.5)	-	外面横ナデ、ヘラケズリ。 内面横ナデ、ヘラナデ。	にぶい黄橙色	黒色粒子・石英・長石	体部1/2残存	
第10図	14	土師器	甕	18.0	(5.5)	-	外面横ナデ、ヘラケズリ。 内面ヘラナデ。	浅黄橙色	黒色粒子・石英・長石	口縁部1/6残存	
第10図	15	土師器	甕	15.0	(2.5)	-	外面横ナデ。内面ヘラナデ。	橙色	黒色粒子・石英・長石	口縁部1/8残存	
第10図	16	土師器	甕	-	(3.9)	7.0	外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。底部ヘラケズリ。	淡黄色	黒色粒子・石英・長石	底部1/3残存	
第10図	17	土師器	甕	-	(1.7)	6.0	外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。底部ヘラケズリ。	にぶい黄橙色	チャート・石英・長石	底部1/4残存	
第10図	18	土師器	甕	-	(3.1)	4.2	外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。底部ヘラケズリ。	淡橙色	黒色粒子・石英・長石	底部1/2残存	
第10図	19	土師器	甕	-	(3.2)	6.0	外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。底部ヘラナデ。	赤橙色	石英・長石	底部1/2残存	

SI02出土土器観察表

挿図番号	番号	種別	器種	計測値(cm) 口径	器高	底径	器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
第12図	1	土師器	坏	11.0	(3.5)	-	外面横ナデ、ヘラケズリ。 内面横ナデ、ヘラナデ。	にぶい黄色	黒色粒子・石英・長石	口縁部1/4残存	赤彩

SI03出土土器観察表

挿図番号	番号	種別	器種	計測値(cm) 口径	器高	底径	器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
第14図	1	土師器	甕	18.0	(8.1)	-	外面横ナデ、ヘラケズリ。 内面横ナデ、ヘラナデ。	灰褐色	チャート・石英・長石	口縁部1/8残存	
第14図	2	土師器	甕	12.0	(2.8)	-	外面横ナデ、ヘラケズリ。 内面横ナデ、ヘラナデ。	にぶい褐色	石英・長石	口縁部1/8残存	
第14図	3	土師器	甕	-	(4.2)	10.0	外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。底部ヘラケズリ。	灰褐色	チャート・石英・長石	底部3/4残存	

SI04出土土器観察表

挿図番号	番号	種別	器種	計測値(cm) 口径	器高	底径	器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
第17図	1	土師器	坏	14.0	(3.7)	-	外面横ナデ、ヘラケズリ。 内面横ナデ、ヘラナデ、放射状ヘラミガキ。	黒褐色	石英・長石	口縁部1/8残存	黒色処理
第17図	2	土師器	坏	-	(3.0)	-	外面横ナデ、ヘラケズリ。 内面ヘラナデ。赤彩。	橙色	黒色粒子・石英・長石	体部1/4残存	赤彩
第17図	3	土師器	坏	13.4	2.8	5.0	外面横ナデ、ヘラケズリ、ヘラミガキ。 内面横ナデ、ヘラナデ、放射状ヘラミガキ。	黄褐色	石英・長石	1/4残存	黒色処理

挿図番号	番号	種別	器種	計測値(cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
				口径	器高	底径					
第17図	4	土師器	坏	14.0	(2.2)	-	外面横ナデ、ヘラケズリ。 内面横ナデ。	黒褐色	石英・長石	口縁部1/12残存	黒色処理
第17図	5	土師器	甕	15.2	15.7	6.4	外面横ナデ、ヘラケズリ。 内面横ナデ、ヘラナデ。底部ヘラケズリ。	にぶい橙色	黒色粒子・石英・長石	口縁部・体部一部欠損	
第17図	6	土師器	甕	18.0	(3.7)	-	外面横ナデ。内面横ナデ。	オリーブ黒色ｄ	石英・長石	口縁部1/8残存	
第17図	7	土師器	甕	18.0	(7.0)	-	外面横ナデ、ヘラケズリ。 内面横ナデ、ヘラナデ。	にぶい褐色	石英・長石	口縁部破片	
第17図	8	土師器	甕	16.0	(9.2)	-	外面横ナデ、ヘラケズリ。 内面ヘラナデ。	黒色	黒色粒子・石英・長石	口縁部1/8残存	
第17図	9	土師器	甕	13.4	(5.0)	-	外面横ナデ、ヘラケズリ。 内面横ナデ、ヘラナデ。	にぶい橙色	チャート・石英・長石	口縁部残存	
第17図	10	土師器	甕	-	(7.5)	9.0	外面ヘラケズリ、ヘラナデ。 内面ヘラナデ。底部木葉痕。	浅黄橙色	チャート・石英・長石	底部1/4残存	
第17図	11	土師器	甑	25.0	20.5	9.0	外面横ナデ、ヘラケズリ。 内面横ナデ、ヘラナデ。	黄橙色	黒色粒子・石英・長石	1/2残存	
第17図	12	土師器	甑	24.0	(21.0)	7.4	外面横ナデ、ヘラケズリ。 内面横ナデ、ヘラナデ、ヘラケズリ。	にぶい黄褐色	黒色粒子・石英・長石	口縁部1/4残存 底部1/2残存	
第17図	13	土師器	甑	22.0	(10.5)	-	外面横ナデ、ヘラケズリ。 内面横ナデ、ヘラナデ。	黄褐色	黒色粒子・石英・長石	口縁部1/4残存	

SI05出土土器観察表

挿図番号	番号	種別	器種	計測値(cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
				口径	器高	底径					
第20図	1	土師器	甕	22.0	(6.2)	-	外面横ナデ。内面横ナデ。	にぶい赤褐色	石英・長石	口縁部1/4残存	
第20図	2	土師器	甕	23.0	(2.9)	-	外面横ナデ。内面横ナデ。	にぶい褐色	石英・長石	口縁部破片	
第20図	3	須恵器	坏	12.0	(2.5)	-	ロクロ成形。	灰白色	石英・長石	口縁部1/8残存	
第20図	4	須恵器	坏	-	(5.2)	10.0	ロクロ成形。	灰色	石英・長石	底部1/4残存	
第20図	5	須恵器	蓋	-	3.5	15.2	ロクロ成形。 外面天井部回転ヘラケズリ。	灰色	石英・長石	口縁部1/2欠損	新治窯産ヵ
第20図	6	須恵器	蓋	15.2	(2.5)	-	ロクロ成形。自然釉。 外面天井部回転ヘラケズリ。	灰色	石英・長石	口縁部2/3残存	岩間窯産

SI06出土土器観察表

挿図番号	番号	種別	器種	計測値(cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
				口径	器高	底径					
第23図	1	土師器	甕	23.0	(5.7)	-	外面横ナデ。内面横ナデ。	橙色	石英・長石	口縁部1/6残存	
第23図	2	土師器	甕	23.0	(3.7)	-	外面横ナデ。内面横ナデ。	にぶい黄橙色	石英・長石	口縁部1/12残存	
第23図	3	須恵器	高坏	-	(2.6)	-	ロクロ成形。	灰色	石英・長石	体部破片	新治窯産
第23図	4	須恵器	蓋	-	(1.6)	-	ロクロ成形。 外面天井部回転ヘラケズリ。	灰色	石英・長石	天井部破片	新治窯産

SI07出土土器観察表

挿図番号	番号	種別	器種	計測値(cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
				口径	器高	底径					
第25図	1	土師器	高台付坏	-	(2.0)	7.0	ロクロ成形。高台貼付。内面黒色処理。	にぶい橙色	石英・長石	底部1/2残存	黒色処理
第25図	2	土師器	甕	16.0	(2.5)	-	外面横ナデ。内面横ナデ。	橙色	石英・長石	口縁部破片	
第25図	3	土師器	甕	-	5.0	8.4	外面ヘラナデ。内面ヘラナデ。底部木葉痕。	灰黄褐色	石英・長石	底部1/2残存	
第25図	4	須恵器	坏	13.6	(3.1)	-	ロクロ成形。	灰色	石英・長石	口縁部1/8残存	
第25図	5	須恵器	坏	12.0	(3.7)	-	ロクロ成形。	灰白色	石英・長石	口縁部1/8残存	
第25図	6	須恵器	高台付坏	13.0	(5.0)	-	ロクロ成形。	灰色	石英・長石	口縁部1/8残存	
第25図	7	須恵器	坏	-	(1.7)	7.0	ロクロ成形。二次底部手持ちヘラケズリ。	灰白色	黒色粒子・石英・長石	底部1/4残存	新治窯産
第25図	8	須恵器	蓋	11.0	(1.5)	-	ロクロ成形。 外面天井部回転ヘラケズリ。	灰色	石英・長石	口縁部1/6残存	
第25図	9	須恵器	長頸瓶	-	(3.3)	-	ロクロ成形。外面自然釉。	明オリーブ灰色	石英・長石	体部破片	

SI08出土土器観察表

挿図番号	番号	種別	器種	計測値(cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
				口径	器高	底径					
第28図	1	土師器	甕	-	-	-	外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。	灰白色	黒色粒子・石英・長石	胴部破片	

SI09出土土器観察表

挿図番号	番号	種別	器種	計測値(cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
				口径	器高	底径					
第31図	1	土師器	坏	14.6	4.3	2.0	外面横ナデ、ヘラケズリ。内面横ナデ、ヘラナデ。	橙色	黒色粒子・石英・長石	口縁部一部欠損	
第31図	2	土師器	坏	-	(1.2)	2.0	外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。	灰黄褐色	黒色粒子・石英・長石	底部残存	十字ヘラ記号
第31図	3	土師器	小形甕	12.2	8.5	5.8	外面横ナデ、ヘラケズリ。内面横ナデ、ヘラナデ。 底部ヘラケズリ。	黒褐色	チャート・石英・長石	口縁部1/3欠損	
第31図	4	土師器	甕	18.0	(12.5)	-	外面横ナデ、ヘラケズリ。内面横ナデ、ヘラナデ。	浅黄橙色	黒色粒子・石英・長石	口縁部残存	
第31図	5	土師器	甕	16.6	(16.0)	-	外面横ナデ、ヘラケズリ。内面横ナデ、ヘラナデ。	灰白色	黒色粒子・石英・長石	口縁部1/2残存	
第31図	6	土師器	甕	14.0	(5.1)	-	外面横ナデ、ヘラケズリ。内面横ナデ、ヘラナデ。	にぶい橙色	黒色粒子・石英・長石	口縁部1/6残存	
第31図	7	土師器	甕	23.0	(3.0)	-	外面横ナデ。内面横ナデ。	橙色	黒色粒子・石英・長石	口縁部1/8残存	
第31図	8	土師器	甕	-	(11.5)	8.0	外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。底部ヘラケズリ。	浅黄橙色	黒色粒子・石英・長石	底部2/3残存	外面赤彩

挿図番号	番号	種別	器種	計測値(cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
				口径	器高	底径					
第31図	9	土師器	甕	-	(5.4)	7.0	外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。底部ヘラケズリ。	にぶい黄橙色	黒色粒子・石英・長石	底部残存	
第31図	10	土師器	甕	-	(2.1)	8.0	外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。底部ヘラケズリ。	黒褐色	黒色粒子・石英・長石	底部1/3残存	
第31図	11	土師器	甕	-	(2.0)	8.0	外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。底部ヘラナデ。	褐灰色	雲母・石英・長石	底部1/4残存	
第31図	12	土師器	甑	24.4	(12.8)	-	外面横ナデ、ヘラケズリ。内面横ナデ、ヘラナデ。	灰白色	黒色粒子・石英・長石	口縁部残存	
第31図	13	土師器	甑	24.0	(8.0)	-	外面横ナデ、ヘラケズリ。内面横ナデ、ヘラナデ。	灰白色	黒色粒子・石英・長石	口縁部1/3残存	
第31図	14	土師器	甑	-	-	-	外面ヘラナデ。内面ヘラナデ。	にぶい橙色	黒色粒子・石英・長石	把手のみ残存	

SI10出土土器観察表

挿図番号	番号	種別	器種	計測値(cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
				口径	器高	底径					
第33図	1	土師器	坏	-	(1.4)	9.0	ロクロ成形。二次底部回転ヘラケズリ。 内面ヘラミガキ。底部ヘラ切り。	橙色	雲母・石英・長石	底部1/4残存	墨書土器「木上ヵ」黒色処理
第33図	2	須恵器	甕	-	(5.3)	13.4	外面ヘラケズリ。内面ナデ。	黒褐色	雲母・石英・長石	底部1/4残存	
第33図	3	須恵器	甕	-	-	-	外面ヘラナデ。内面ヘラナデ。	黒褐色	石英・長石	体部破片	

SI12出土土器観察表

挿図番号	番号	種別	器種	計測値(cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
				口径	器高	底径					
第37図	1	土師器	坏	12.4	3.9	5.0	外面横ナデ、ヘラケズリ。内面横ナデ、ヘラミガキ。	黒色	チャート・石英・長石	口縁部1/4残存	黒色処理
第37図	2	土師器	高坏	-	(3.3)	-	外面横ナデ、ヘラケズリ、ヘラミガキ。 内面横ナデ、ヘラナデ。放射状ヘラミガキ。	褐色	黒色粒子・石英・長石	1/6残存	
第37図	3	土師器	甕	21.0	(3.4)	-	外面横ナデ。内面横ナデ、ヘラナデ。	灰白色	黒色粒子・石英・長石	口縁部1/8残存	
第37図	4	土師器	甕	-	(2.0)	6.0	外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。底部ヘラケズリ。	褐色	黒色粒子・石英・長石	底部1/4残存	

SI13出土土器観察表

挿図番号	番号	種別	器種	計測値(cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
				口径	器高	底径					
第40図	1	土師器	甕	-	-	-	外面横ナデ、ヘラケズリ。内面横ナデ。	浅黄橙色	黒色粒子・石英・長石	口縁部破片	
第40図	2	土師器	甕	-	(3.8)	7.0	外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。底部木葉痕。	黒色	黒色粒子・石英・長石	底部1/3残存	
第40図	3	土師器	甕	-	(2.0)	7.0	外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。底部ヘラケズリ。	褐色	チャート・黒色粒子・石英・長石	底部1/4残存	
第40図	4	土師器	甕	-	(2.0)	5.0	外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。底部ヘラケズリ。	褐色	黒色粒子・石英・長石	底部1/4残存	
第40図	5	須恵器	蓋	-	(1.2)	径4.0	ロクロ成形。	灰オリーブ色	黒色粒子・石英・長石	ツマミのみ残存	
第40図	6	須恵器	甕	-	(2.3)	8.0	外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。底部ヘラケズリ。	浅黄色	黒色粒子・石英・長石	底部1/2残存	
第40図	7	須恵器	甕	-	-	-	外面ヘラナデ。内面ヘラナデ。	黄灰色	黒色粒子・石英・長石	体部破片	

SI14出土土器観察表

挿図番号	番号	種別	器種	計測値(cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
				口径	器高	底径					
第43図	1	土師器	坏	15.0	(2.6)	-	外面横ナデ、ヘラケズリ。内面横ナデ、ヘラナデ。	黒褐色	黒色粒子・石英・長石	口縁部1/2残存	黒色処理
第43図	2	土師器	坏	15.0	(3.7)	-	外面横ナデ、ヘラケズリ。内面横ナデ、ヘラナデ。	にぶい褐色	黒色粒子・石英・長石	口縁部1/8残存	赤彩
第43図	3	土師器	坏	15.0	(3.4)	-	外面横ナデ、ヘラケズリ。内面ヘラナデ。	にぶい黄橙色	黒色粒子・石英・長石	口縁部1/6残存	外面赤彩
第43図	4	土師器	坏	-	(3.5)	-	外面横ナデ、ヘラケズリ。 内面ヘラナデ。放射状ヘラミガキ。	黒褐色	黒色粒子・石英・長石	体部1/6残存	黒色処理
第43図	5	土師器	甕	17.6	(8.5)	-	外面横ナデ、ヘラケズリ。内面横ナデ、ヘラナデ。	灰黄褐色	黒色粒子・石英・長石	口縁部1/4残存	
第43図	6	土師器	甕	18.0	(13.8)	-	外面横ナデ、ヘラケズリ。内面横ナデ、ヘラナデ。	にぶい褐色	黒色粒子・石英・長石	口縁部1/4残存	
第43図	7	土師器	甕	17.0	(9.2)	-	外面横ナデ、ヘラケズリ。内面横ナデ、ヘラナデ。	褐灰色	黒色粒子・石英・長石	口縁部1/4残存	
第43図	8	土師器	甕	18.0	(8.6)	-	外面横ナデ、ヘラケズリ。内面横ナデ、ヘラナデ。	灰オリーブ色	黒色粒子・石英・長石	口縁部1/8残存	
第43図	9	土師器	甕	16.0	(6.3)	-	外面横ナデ、ヘラケズリ。内面横ナデ、ヘラナデ。	橙色	黒色粒子・石英・長石	口縁部1/4残存	
第43図	10	土師器	甕	26.0	(7.3)	-	外面横ナデ、ヘラケズリ。内面横ナデ、ヘラナデ。	灰白色	雲母・石英・長石	口縁部1/3残存	
第43図	11	土師器	甕	22.0	(6.0)	-	外面横ナデ、ヘラケズリ。内面横ナデ、ヘラナデ。	にぶい黄橙色	黒色粒子・石英・長石	口縁部1/4残存	
第43図	12	土師器	甕	23.0	(1.9)	-	外面横ナデ。内面横ナデ。	にぶい黄橙色	黒色粒子・石英・長石	口縁部1/6残存	
第43図	13	土師器	甕	28.0	(6.8)	-	外面横なで、ヘラケズリ。内面横ナデ、ヘラナデ。	浅黄橙色	黒色粒子・石英・長石	口縁部1/12残存	
第43図	14	土師器	甕	-	(6.5)	-	外面横ナデ、ヘラケズリ。内面横ナデ、ヘラナデ。	浅黄橙色	チャート・黒色粒子・石英・長石	口縁部1/4残存	
第43図	15	土師器	甕	-	(3.3)	10.0	外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。底部ヘラケズリ。	にぶい褐色	黒色粒子・石英・長石	底部1/3残存	
第43図	16	土師器	甕	-	(2.5)	5.4	外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。底部ヘラケズリ。	浅黄橙色	黒色粒子・石英・長石	底部残存	
第43図	17	土師器	甑	23.0	(8.4)	-	外面横ナデ、ヘラケズリ。内面横ナデ、ヘラナデ。	浅黄橙色	黒色粒子・石英・長石	口縁部1/4残存	
第43図	18	土師器	甑	-	-	-	外面ナデ。	橙色	チャート・黒色粒子・石英・長石	把手のみ残存	

SI15出土土器観察表

挿図番号	番号	種別	器種	計測値(cm) 口径	器高	底径	器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
第46図	1	土師器	甑	29.8	30.5	11.8	外面横ナデ、ヘラケズリ。内面横ナデ、ヘラナデ。	橙色	雲母・石英・長石	1/4残存	
第46図	2	土師器	甕	25.0	(3.3)	-	外面横ナデ。内面横ナデ。	にぶい橙色	雲母・石英・長石	口縁部1/12残存	
第46図	3	須恵器	坏	12.9	4.6	8.2	ロクロ成形。底部静止糸切り。	灰色	黒色粒子・石英・長石	ほぼ完存品	底部ヘラ書き「十」字　木葉下窯もしくは大淵窯跡群産
第46図	4	須恵器	坏	12.4	3.6	8.5	ロクロ成形。底部回転ヘラ切り。	褐灰色	石英・長石	完存品	
第46図	5	須恵器	坏	13.6	(4.0)	-	ロクロ成形。	灰色	石英・長石	口縁部3/4残存	
第46図	6	須恵器	坏	13.0	(3.3)	-	ロクロ成形。	褐灰色	海綿骨針・石英・長石	口縁部1/12残存	
第46図	7	須恵器	坏	-	(2.5)	9.0	ロクロ成形。底部回転ヘラ切り。	灰色	黒色粒子・石英・長石	底部残存	底部ヘラ書き「十」字　木葉下窯もしくは大淵窯跡群産
第46図	8	須恵器	有台盤	17.6	2.6	15.4	ロクロ成形。高台貼付け。	灰白色	黒色粒子・石英・長石	1/12残存	
第46図	9	須恵器	有台坏	20.0	7.3	15.2	ロクロ成形。底部回転ヘラ切り。	灰色	海綿骨針・石英・長石	口縁部1/4残存 底部1/2残存	外面ヘラ書き「才」　木葉下窯もしくは大淵窯跡群産
第46図	10	須恵器	蓋	18.0	(1.5)	-	ロクロ成形。	暗緑灰色	黒色粒子・石英・長石	口縁部1/10残存	
第46図	11	須恵器	蓋	-	-	-	ロクロ成形。	暗オリーブ色	石英・長石	体部破片	自然釉
第46図	12	須恵器	瓶類	-	(6.2)	15.0	ロクロ成形。高台貼付け。	黒色	石英・長石	底部1/4残存	木葉下窯もしくは大淵窯跡群産
第46図	13	須恵器	甕	-	-	-	外面ナデ。内面ナデ。 外面平行タタキ。内面ヘラナデ。	灰白色	黒色粒子・石英・長石	体部破片	
第46図	14	須恵器	甕	-	-	-	外面平行タタキ。内面ヘラナデ。	灰オリーブ色	黒色粒子・石英・長石	体部破片	
第46図	15	須恵器	甕	-	-	-		オリーブ黄色	黒色粒子・石英・長石	体部破片	

SI16出土土器観察表

挿図番号	番号	種別	器種	計測値(cm) 口径	器高	底径	器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
第48図	1	土師器	甕	-	(2.0)	9.0	外面ヘラナデ。内面ヘラナデ。底部木葉痕。	にぶい黄橙色	石英・長石	底部1/4残存	
第48図	2	須恵器	坏	14.0	3.4	7.0	ロクロ成形。底部回転ヘラケズリ。	灰色	黒色粒子・石英・長石	口縁部1/2欠損	新治窯産
第48図	3	須恵器	坏	16.0	4.1	11.4	ロクロ成形。	灰白色	雲母・石英・長石	口縁部一部欠損	新治窯産
第48図	4	須恵器	甕	27.0	(5.2)	-	外面ナデ。内面ナデ。	灰色	黒色粒子・石英・長石	口縁部1/8残存	

SI17出土土器観察表

挿図番号	番号	種別	器種	計測値(cm) 口径	器高	底径	器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
第50図	1	土師器	坏	12.8	5.2	2.0	外面横ナデ、ヘラケズリ。内面横ナデ、ヘラミガキ。	にぶい橙色	黒色粒子・石英・長石	口縁部一部欠損	赤彩
第50図	2	土師器	坏	13.3	4.5	2.5	外面横ナデ、ヘラケズリ。内面横ナデ、ヘラナデ、ヘラミガキ。	にぶい黄橙色	黒色粒子・石英・長石	口縁部一部欠損	赤彩
第50図	3	土師器	坏	14.2	(3.7)	-	外面横ナデ、ヘラケズリ。 内面横ナデ、ヘラナデ、線状ヘラミガキ。	にぶい黄褐色	黒色粒子・石英・長石	口縁部1/3残存	
第50図	4	土師器	坏	13.0	(2.8)	-	外面横ナデ、ヘラケズリ。内面横ナデ、ヘラナデ。	黒褐色	黒色粒子・石英・長石	口縁部1/6残存	黒色処理
第50図	5	土師器	坏	14.0	4.0	4.0	外面横ナデ、ヘラケズリ。 内面横ナデ、ヘラナデ、ヘラミガキ。	にぶい黄橙色	スコリア・石英・長石	1/2残存	黒色処理
第50図	6	土師器	坏	-	(2.2)	4.0	外面ヘラケズリ、ヘラミガキ。 内面ヘラナデ、ヘラミガキ。	黒褐色	スコリア・石英・長石	底部残存	黒色処理
第50図	7	土師器	鉢	18.0	(4.8)	-	外面横ナデ、ヘラケズリ。内面横ナデ、ヘラナデ。	浅黄橙色	黒色粒子・石英・長石	口縁部1/10残存	

SI19出土土器観察表

挿図番号	番号	種別	器種	計測値(cm) 口径	器高	底径	器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
第53図	1	土師器	甕	12.0	(7.8)	-	外面横ナデ、ヘラケズリ。内面横ナデ、ヘラナデ。	灰白色	黒色粒子・石英・長石	口縁部1/4残存	
第53図	2	土師器	甕	-	(2.5)	9.0	外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。底部ヘラケズリ。	にぶい橙色	黒色粒子・石英・長石	底部1/2残存	

SI20出土土器観察表

挿図番号	番号	種別	器種	計測値(cm) 口径	器高	底径	器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
第55図	1	土師器	坏	14.0	(2.5)	-	外面横ナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ヘラナデ、ヘラミガキ。	黒色	黒色粒子・石英・長石	口縁部1/12残存	黒色処理

SK07出土土器観察表

挿図番号	番号	種別	器種	計測値(cm) 口径	器高	底径	器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
第59図	1	土師器	坏	14.6	3.8	6.0	外面横ナデ、ヘラケズリ。内面横ナデ、ヘラナデ。	黒色	黒色粒子・石英・長石	1/3残存	黒色処理
第59図	2	土師器	坏	-	-	-	外面横ナデ、ヘラケズリ。内面横ナデ、ヘラナデ。	暗赤褐色	黒色粒子・石英・長石	口縁部破片	
第59図	3	土師器	甕	-	(1.3)	6.0	外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。底部木葉痕。	赤褐色	雲母・黒色粒子・石英・長石	底部1/4残存	外面赤彩

SK11出土土器観察表

挿図番号	番号	種別	器種	計測値(cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
				口径	器高	底径					
第59図	4	土師器	坏	13.2	4.3	7.0	外面横ナデ、ヘラケズリ、ヘラミガキ。 内面横ナデ、ヘラナデ。	黒色	石英・長石	1/4残存	黒色処理
第59図	5	土師器	坏	10.4	5.0	6.0	外面横ナデ、ヘラケズリ。内面横ナデ、ヘラナデ。	橙色	黒色粒子・石英・長石	口縁部1/8残存 底部残存	赤彩

SK15出土土器観察表

挿図番号	番号	種別	器種	計測値(cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
				口径	器高	底径					
第59図	6	土師器	甕	-	-	-	外面横ナデ。内面横ナデ。	黒褐色	石英・長石	口縁部破片	
第59図	7	土師器	甕	-	(1.8)	8.0	外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。底部ヘラケズリ。	にぶい黄橙色	黒色粒子・石英・長石	底部1/4残存	赤彩
第59図	8	土師器	甑	-	(13.0)	9.6	外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。	明赤褐色	黒色粒子・石英・長石	底部1/3残存	赤彩
第59図	9	土師器	甑	-	-	-	外面横ナデ、ヘラケズリ。内面横ナデ、ヘラナデ。	にぶい橙色	黒色粒子・石英・長石	体部破片	

SK16出土土器観察表

挿図番号	番号	種別	器種	計測値(cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
				口径	器高	底径					
第59図	10	土師器	甕	-	-	-	外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。	橙色	黒色粒子・石英・長石	体部破片	
第59図	11	須恵器	瓶類	-	-	-	外面ナデ。内面ナデ。	灰オリーブ色	色粒子・石英・長石	体部破片	自然釉

SK17出土土器観察表

挿図番号	番号	種別	器種	計測値(cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
				口径	器高	底径					
第59図	12	土師器	甕	-	-	-	外面ヘラナデ。内面ヘラナデ。	にぶい褐色	黒色粒子・石英・長石	体部破片	

SK18出土土器観察表

挿図番号	番号	種別	器種	計測値(cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
				口径	器高	底径					
第59図	13	土師器	甕	-	-	-	外面ヘラナデ。内面ヘラナデ。	黒褐色	雲母・石英・長石	体部破片	

SK19出土土器観察表

挿図番号	番号	種別	器種	計測値(cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
				口径	器高	底径					
第59図	14	須恵器	甕	-	(1.2)	8.0	ロクロ成形。底部ヘラ切り。	灰色	海綿骨針・黒色粒子・ 石英・長石	底部破片	

SK20出土土器観察表

挿図番号	番号	種別	器種	計測値(cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
				口径	器高	底径					
第61図	1	土師器	甕	30.0	(1.4)	-	外面横ナデ。内面横ナデ。	黒褐色	雲母・石英・長石	口縁部1/11 残存	
第61図	2	土師器	甕	20.0	(2.5)	-	外面横ナデ。内面横ナデ。	褐色	雲母・石英・長石	口縁部1/8残存	
第61図	3	須恵器	坏	13.0	4.2	7.6	ロクロ成形。二次底部手持ちヘラケズリ。	灰色	雲母・石英・長石	口縁一部残存 底部1/3残存	新治窯産
第61図	4	須恵器	坏	14.0	4.5	7.4	ロクロ成形。二次底部手持ちヘラケズリ。	灰色	石英・長石	口縁部1/8残存 底部1/4残存	新治窯産
第61図	5	土師器	坏	13.0	(4.0)	-	ロクロ成形。二次底部手持ちヘラケズリ。	にぶい黄色	雲母・石英・長石	口縁部1/8残存	新治窯産
第61図	6	須恵器	坏	14.0	(3.6)	-	ロクロ成形。	灰色	石英・長石	口縁部1/12 残存	
第61図	7	須恵器	坏	-	(3.6)	8.0	ロクロ成形。二次底部手持ちヘラケズリ。	灰色	雲母・石英・長石	底部1/3残存	新治窯産
第61図	8	須恵器	坏	-	(3.0)	7.2	ロクロ成形。底部回転ヘラ切り。	灰色	黒色粒子・石英・長石	底部1/4残存	岩間窯産
第61図	9	須恵器	盤	-	(3.2)	11.5	ロクロ成形。高台貼付け。	オリーブ黒色	黒色粒子・石英・長石	底部破片	自然釉、 新治窯産
第61図	10	須恵器	蓋	-	-	-	ロクロ成形。	灰オリーブ色	黒色粒子・石英・長石	体部破片	自然釉、 木葉下窯産
第61図	11	須恵器	甕	-	-	-	外面平行タタキ。内面ヘラナデ。	灰色	雲母・石英・長石	体部破片	新治窯産
第61図	12	須恵器	甕	-	-	-	外面平行タタキ。内面ヘラナデ。	灰色	雲母・石英・長石	体部破片	新治窯産
第61図	13	須恵器	長径瓶	-	-	-	ロクロ成形。	灰色	石英・長石	肩部破片	新治窯産

SK21出土土器観察表

挿図番号	番号	種別	器種	計測値(cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
				口径	器高	底径					
第63図	1	須恵器	甕	-	-	-	外面平行タタキ。内面ヘラナデ。	灰色	雲母・石英・長石	体部破片	

SK22出土土器観察表

挿図番号	番号	種別	器種	計測値(cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
				口径	器高	底径					
第63図	2	土師器	甕	-	-	-	外面横ナデ。内面横ナデ、ヘラナデ。	にぶい黄橙色	黒色粒子・石英・長石	口頸部破片	

SK23出土土器観察表

挿図番号	番号	種別	器種	計測値(cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
				口径	器高	底径					
第63図	3	土師器	甕	-	-	-	外面ヘラナデ。内面ヘラナデ。	にぶい黄橙色	雲母・石英・長石	体部破片	
第63図	4	土師器	甕	-	-	-	外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。	橙色	黒色粒子・石英・長石	体部破片	赤彩

SK24出土土器観察表

挿図番号	番号	種別	器種	計測値(cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
				口径	器高	底径					
第63図	5	土師器	坏	12.0	(2.7)	-	外面横ナデ、ヘラケズリ。内面横ナデ、ヘラナデ。	浅黄橙色	黒色粒子・石英・長石黒	口縁部1/12残存	外面赤彩
第63図	6	土師器	甕	-	-	-	外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。	灰黄色	色粒子・石英・長石	体部破片	

SK25出土土器観察表

挿図番号	番号	種別	器種	計測値(cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
				口径	器高	底径					
第63図	7	土師器	甕	-	-	-	外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。	褐色	黒色粒子・石英・長石	体部破片	

SK30出土土器観察表

挿図番号	番号	種別	器種	計測値(cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
				口径	器高	底径					
第65図	1	土師質土器	内耳鍋	-	-	-	外面ナデ。内面ナデ。	黒色	黒色粒子・石英・長石	耳部のみ残存	
第65図	2	土師質土器	内耳鍋	-	-	-	外面ナデ。内面ナデ。	にぶい褐色	黒色粒子・石英・長石	体部破片	

SK31出土土器観察表

挿図番号	番号	種別	器種	計測値(cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
				口径	器高	底径					
第65図	4	土師質土器	内耳鍋	-	-	-	外面ナデ。内面ナデ。	黒色	黒色粒子・石英・長石	体部破片	

SK33出土土器観察表

挿図番号	番号	種別	器種	計測値(cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
				口径	器高	底径					
第65図	5	土師器	坏	10.2	3.0	4.0	外面横ナデ、ヘラケズリ。内面横ナデ、ヘラナデ。	灰褐色	スコリア・石英・長石	口縁部1/6残存	
第65図	6	土師器	甕	-	(2.0)	7.4	外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。底部ヘラケズリ。	にぶい黄橙色	黒色粒子・石英・長石	底部1/4残存	
第65図	7	土師器	甕	-	-	-	外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。	明赤褐色	黒色粒子・石英・長石	体部破片	赤彩

SK37出土土器観察表

挿図番号	番号	種別	器種	計測値(cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
				口径	器高	底径					
第65図	8	土師器	甕	-	-	-	外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。	にぶい黄橙色	黒色粒子・石英・長石	体部破片	

遺構外出土土器観察表

挿図番号	番号	種別	器種	計測値(cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
				口径	器高	底径					
第66図	1	土師質土器	小皿	8.8	2.5	3.2	ロクロ成形。底部回転糸切り。	灰白色	黒色粒子・石英・長石	完存品	15C後半～16C前半撹乱出土
第66図	2	土師質土器	皿	-	(1.4)	6.2	ロクロ成形。底部回転糸切り。	にぶい橙色	黒色粒子・石英・長石	底部	
第66図	3	土師質土器	内耳鍋	-	-	-	外面ナデ。内面ナデ。	灰褐色	黒色粒子・石英・長石	耳部のみ残存	
第66図	4	土師質土器	内耳鍋	26.0	(7.1)	-	外面ナデ。内面ナデ。	黒色	黒色粒子・石英・長石	胴部破片	
第66図	5	陶器	鉄釉小皿	11.2	2.2	4.4	ロクロ成形。底部回転糸切り。	にぶい褐色	石英・長石	1/2残存	古瀬戸後期(15C前半～中葉)撹乱出土
第66図	6	陶器	甕	-	(19.0)	15.4	外面ナデ。内面ナデ。	にぶい褐色	石英・長石	胴部下半部	常滑窯産
第66図	7	陶器	甕	-	-	-	ロクロ成形、内面青海波紋	灰オリーブ	石英・長石	胴部破片	近世(東海産ヵ)

写 真 図 版

1．航空写真（西から）

2．航空写真（北東から）

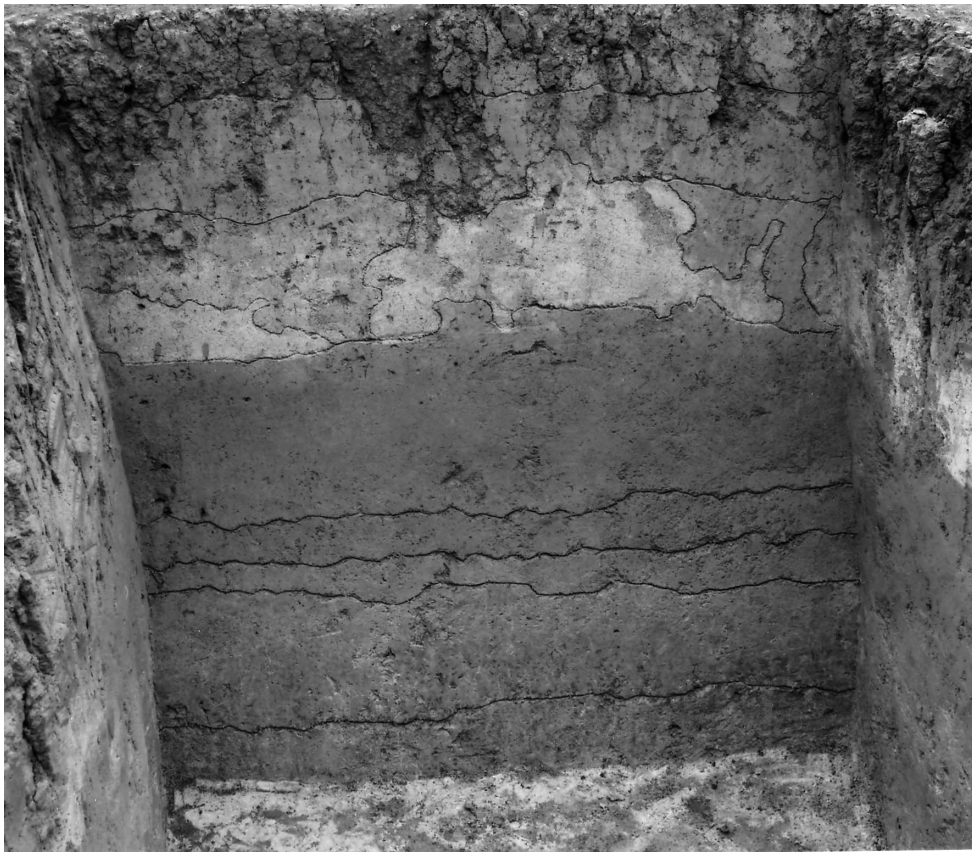
1．遺跡遠景（南から）

2．遺跡調査前近景（北東から）

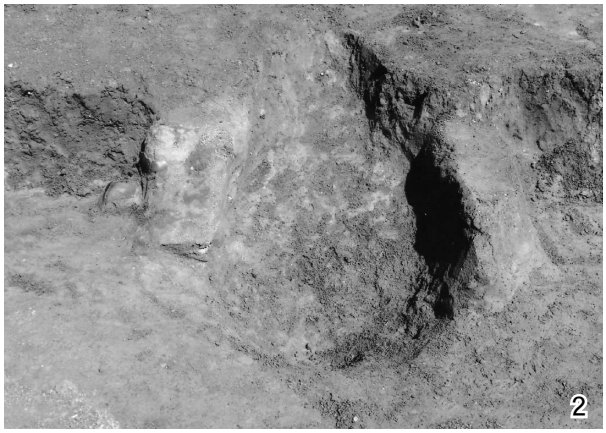
1．調査区全景（西から）

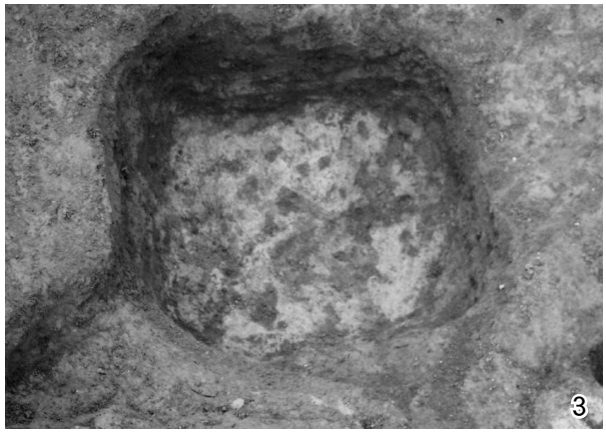
2．調査区全景（東から）

1．調査区全景（真上から）



2．基本層序（南東から）

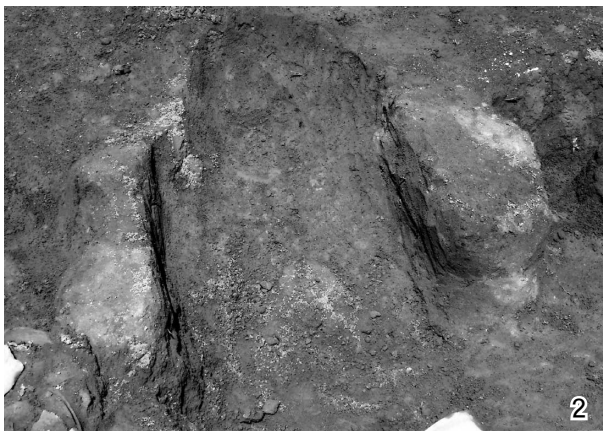


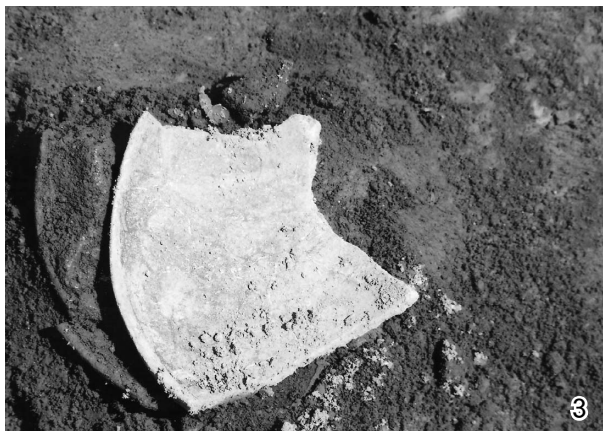


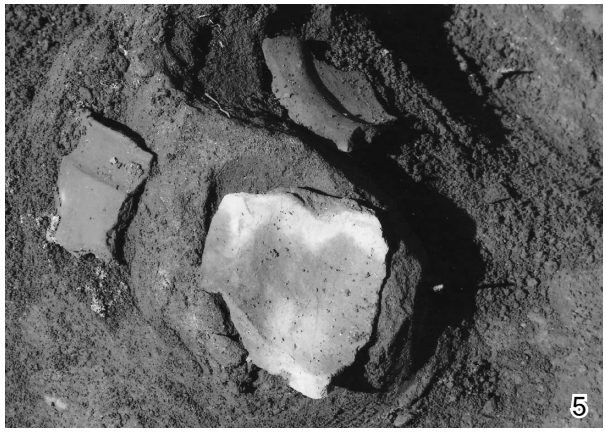
1．SI01全景（南から）
2．SI01カマド（南から）
3．SI01貯蔵穴（南から）
4．SI01遺物出土状況
5．SI01遺物出土状況

１．SI02全景（南西から）

２．SI03全景（北東から）

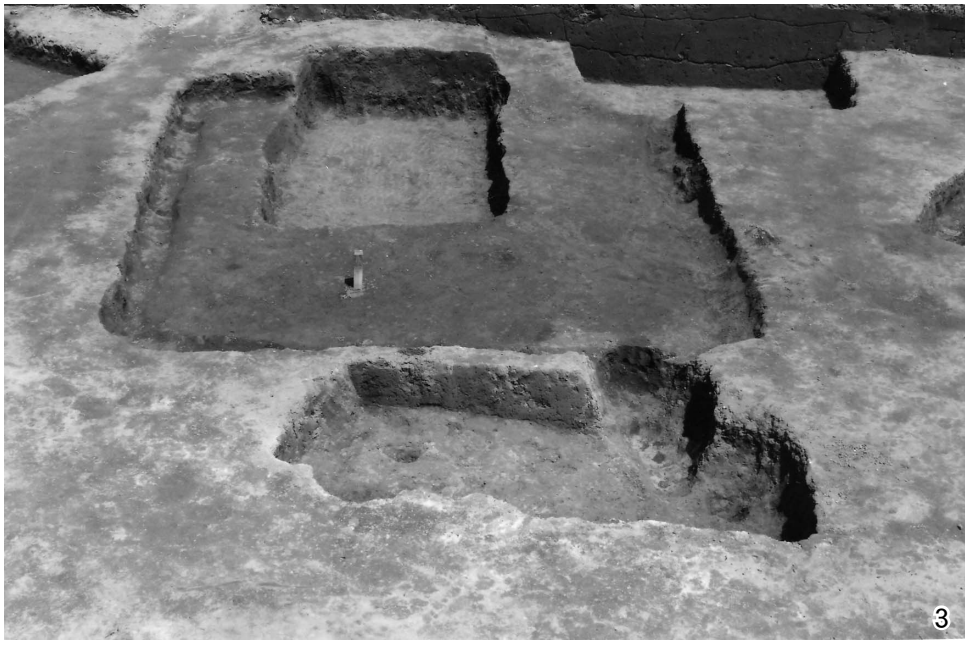


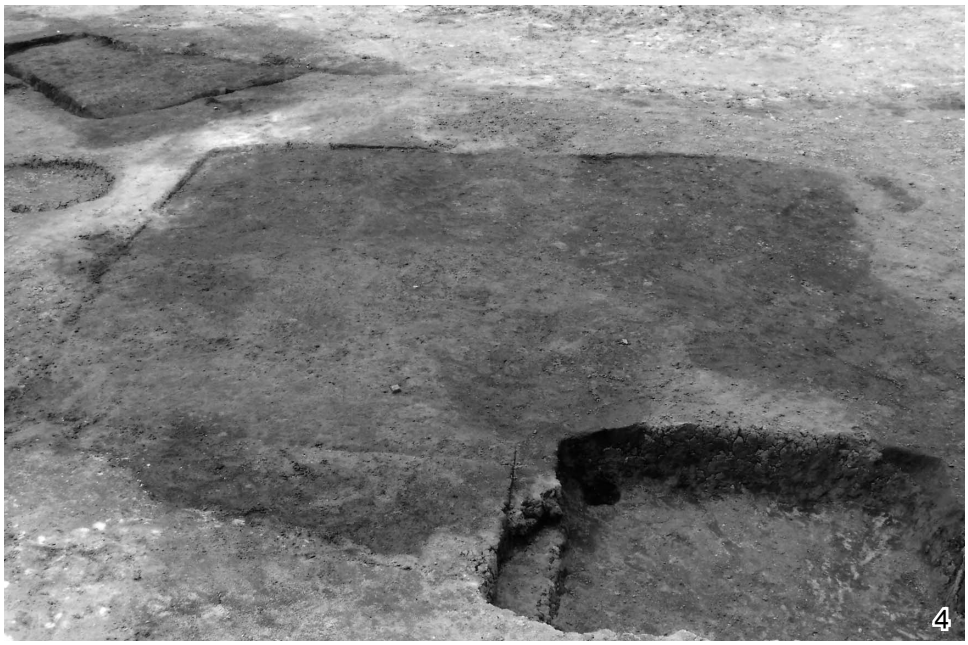




1．SI04全景（南東から）　　3～5．SI04遺物出土状況
2．SI04カマド（南東から）

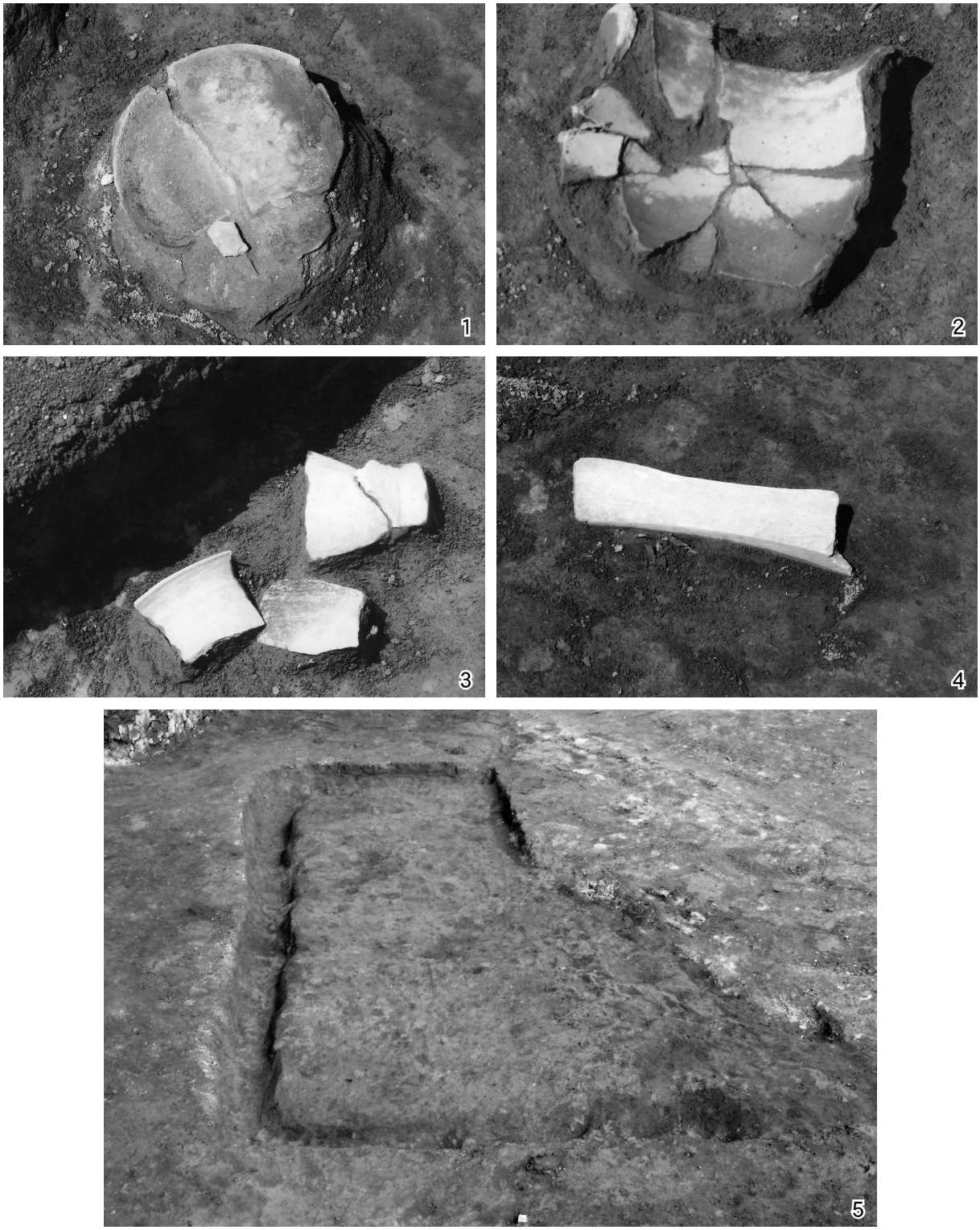
1．SI05全景（南から）　　3．SI05遺物出土状況
2．SI05カマド（南から）　　4．SI06全景（南から）





1．SI06カマド（南から）
2．SI06遺物出土状況
3．SI07、SK20・21全景（南から）
4．SI08全景（南から）

1．SI08掘方（東から）
2．SI09遺物出土状況（南東から）
3．SI09全景（南東から）
4．SI09カマド（南東から）
5．SI09遺物出土状況（1）



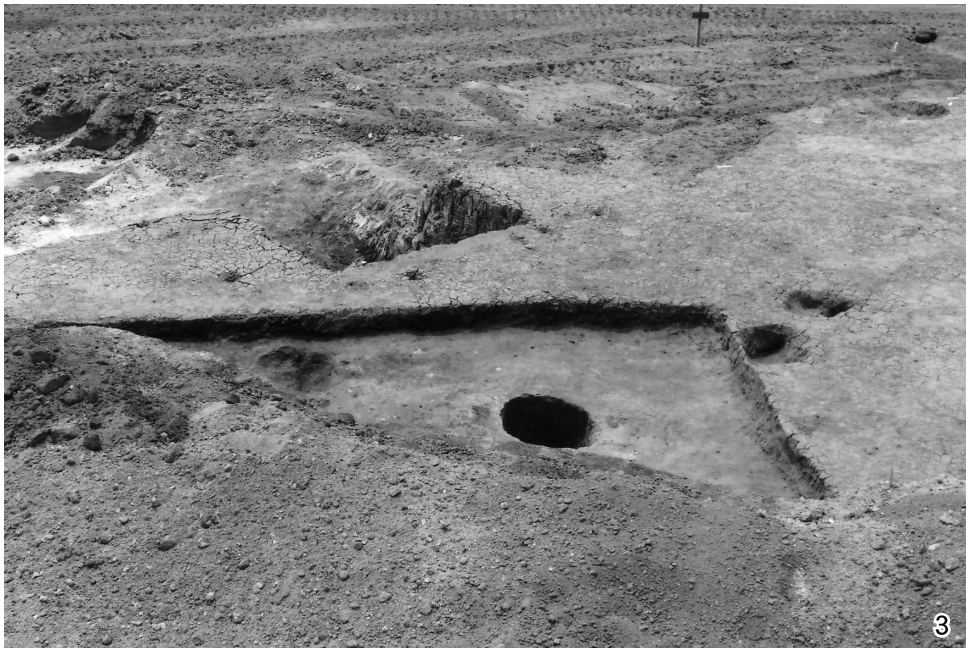
1～4．SI09遺物出土状況（2）
5．SI10全景（南から）

1．SI11全景（北から）　　3．SI12カマド（南から）
2．SI12全景（南から）　　4．SI12遺物出土状況

1．SI13全景（南から）
2．SI13カマド（南から）
3．SI14全景（南東から）

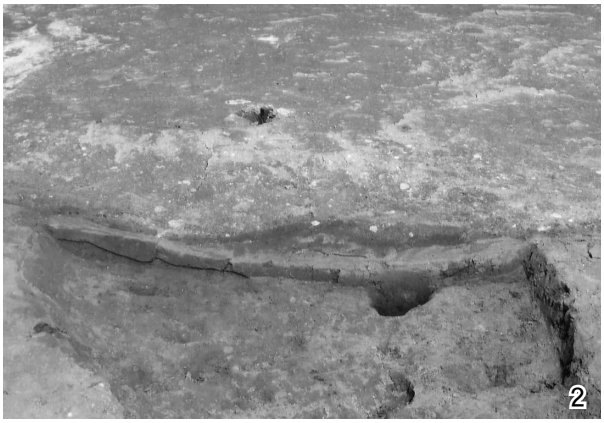
1．SI14カマド（南から）　　4．SI15遺物出土状況（南から）
2・3．SI14遺物出土状況　　5．SI15全景（南から）

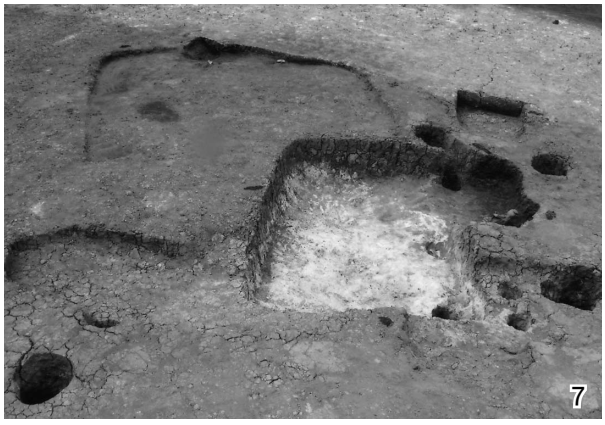
1．SI15カマド（南から）　　5．SI16全景（南から）
2～4．SI15遺物出土状況



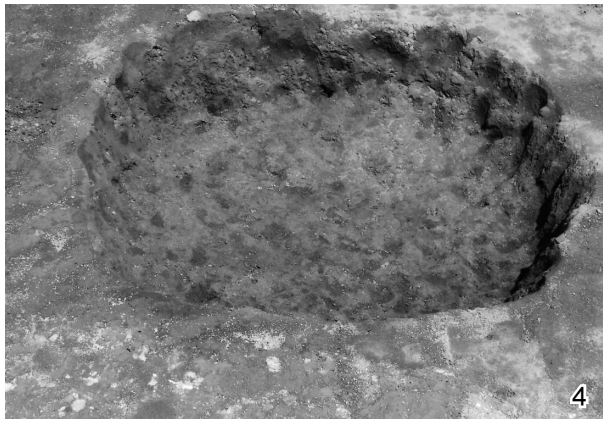
1．SI16遺物出土状況（南から）
2．SI16遺物出土状況
3．SI17全景（北から）
4・5．SI17遺物出土状況

1．SI18全景（西から）
2．SI19全景（南から）
3．SI20全景（北から）

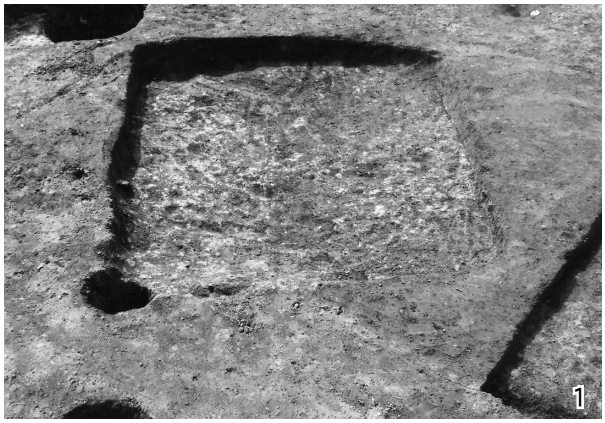


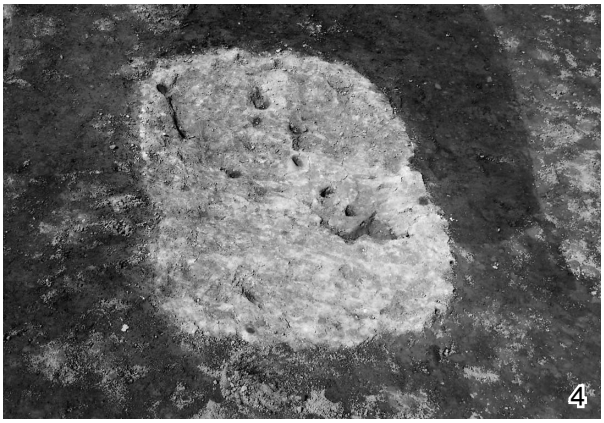


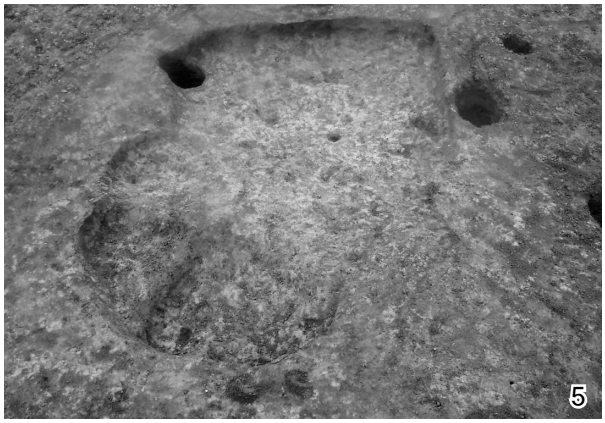
1．SE01（北から）
2．SD01（南から）
3．SK01・02（西から）
4．SK03（南から）
5．SK04（北から）
6．SK05（北から）
7．SK06～11（南から）
8．SK11（南から）

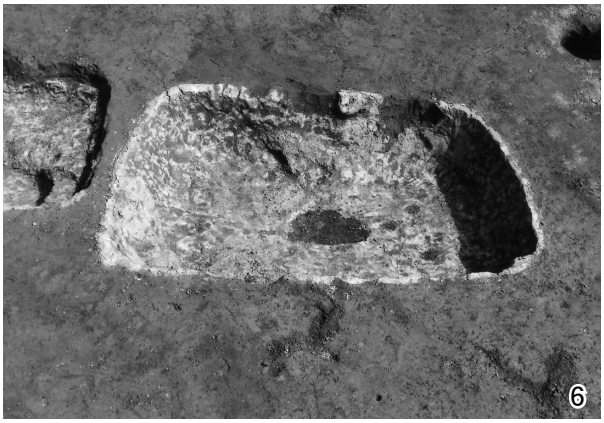


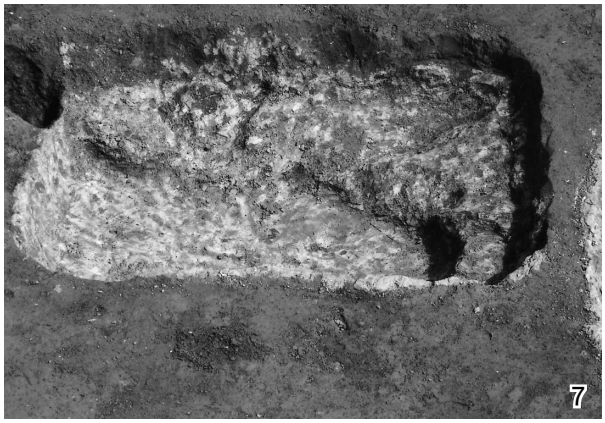
1．SK12（南から）
2．SK13～15（北から）
3．SK15（南から）
4．SK16（南から）
5．SK17・18（南から）
6．SK19（南から）
7．SK20・21（南から）
8．SK22・23（南から）

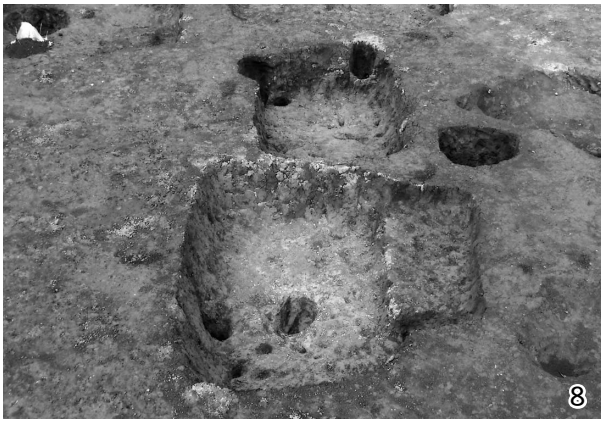




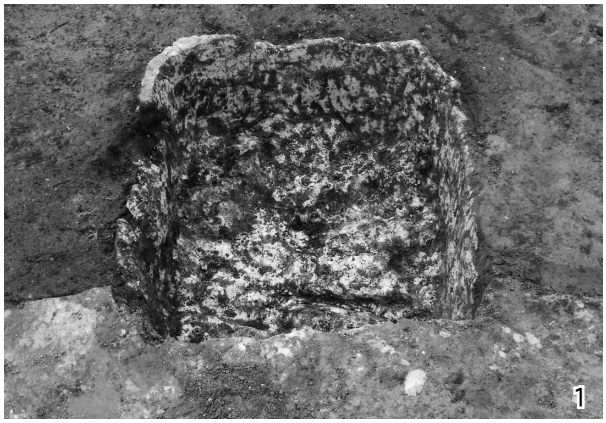


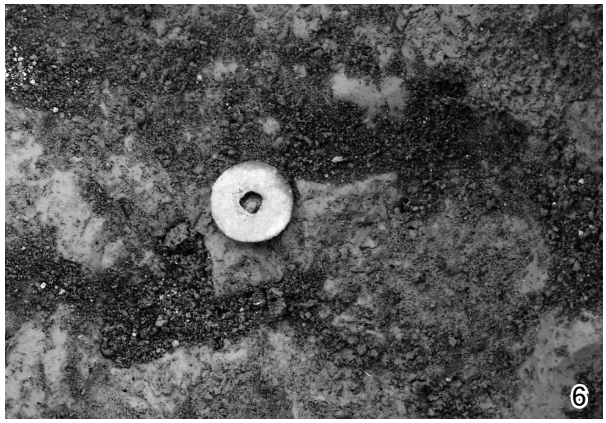


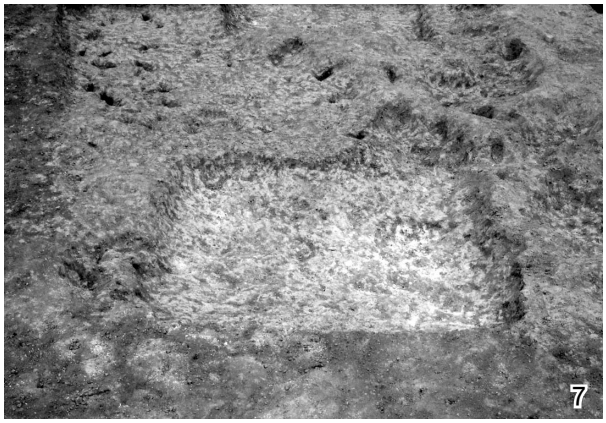


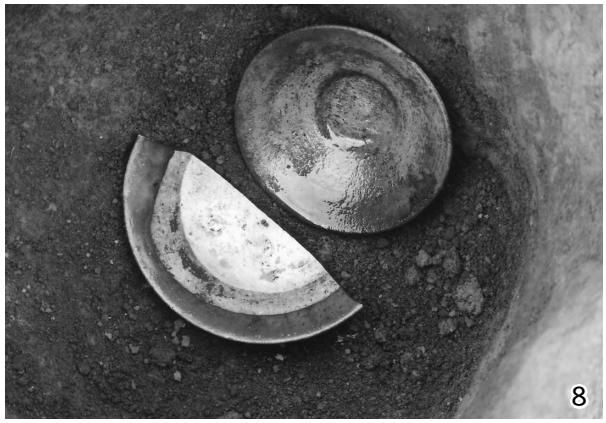


1．SK24（東から）
2．SK25（東から）
3．SK26（南から）
4．SK27（南から）
5．SK28・29（西から）
6．SK30（南から）
7．SK31（南から）
8．SK30・31・34（東から）

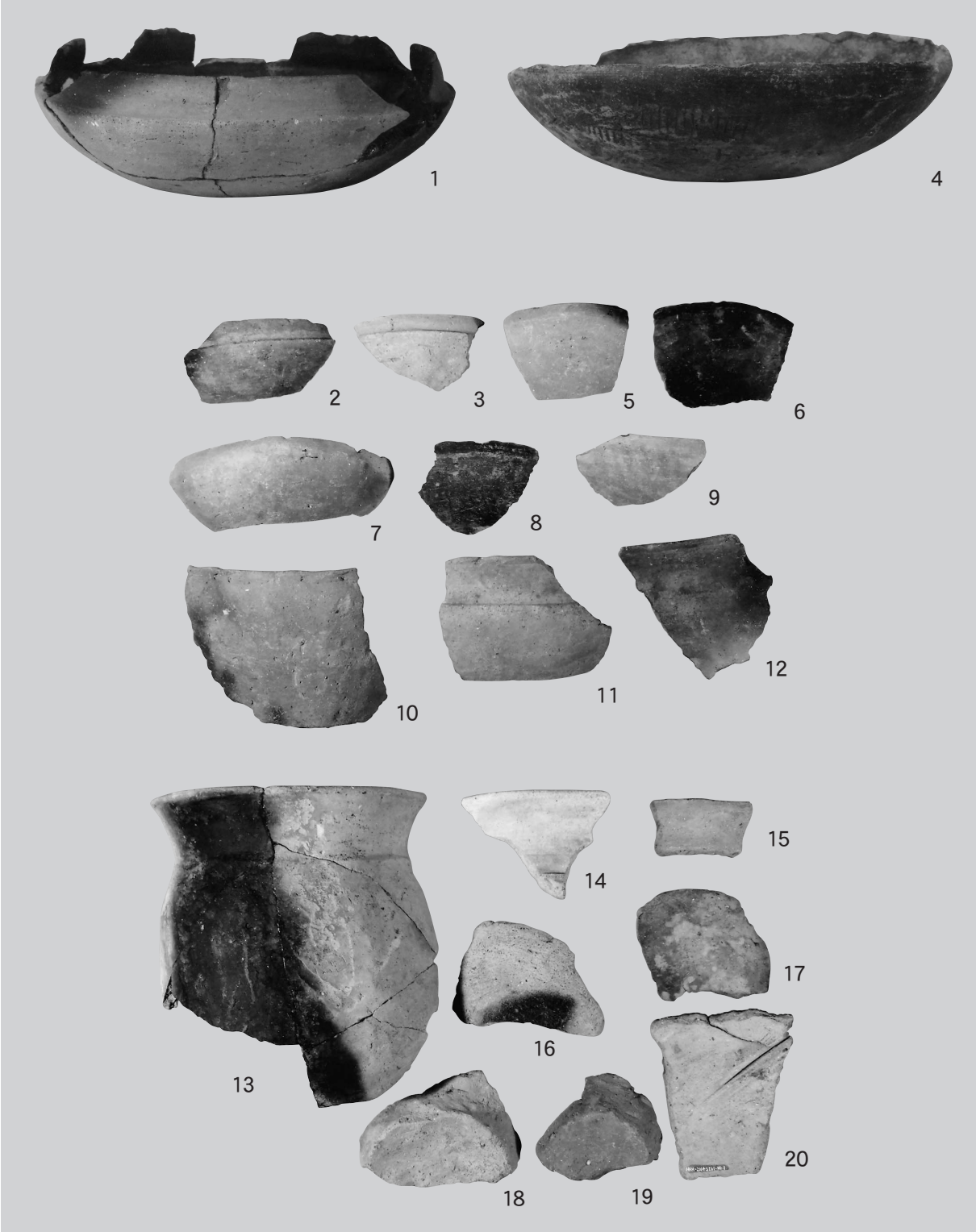






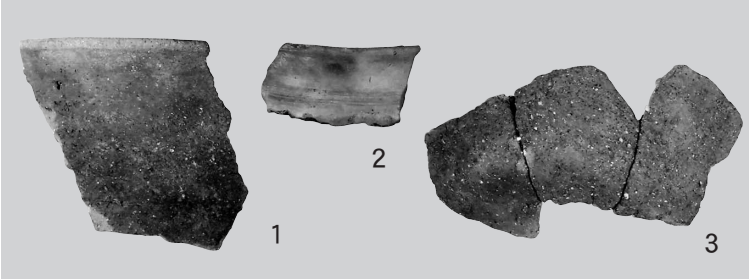


1．SK32（北から）
2．SK32（北から）
3．SK33（南から）
4．SK35・36（北から）
5．SK35遺物出土状況
6．SK36遺物出土状況
7．SK37（南から）
8．撹乱出土遺物

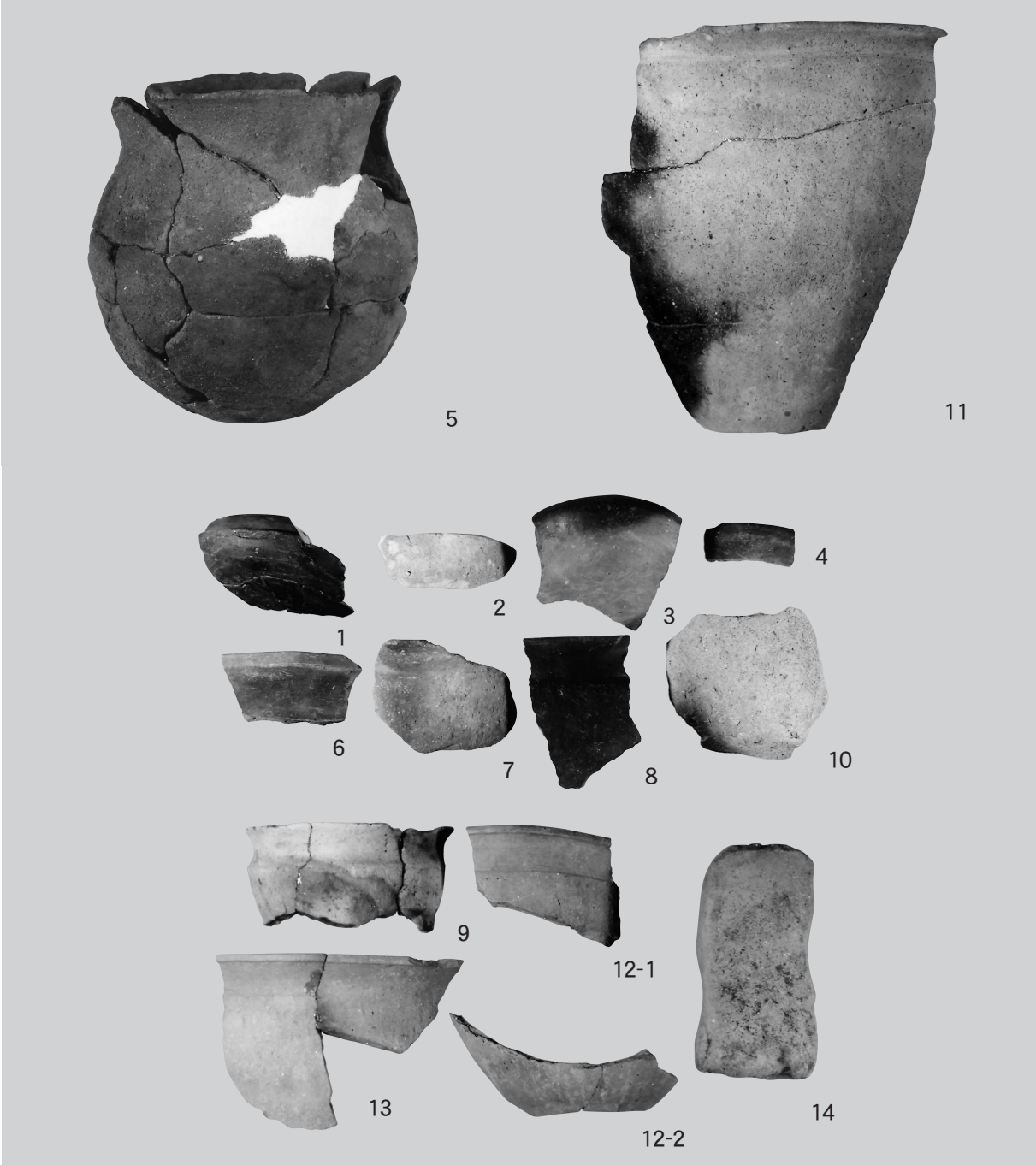


1．SI01出土遺物

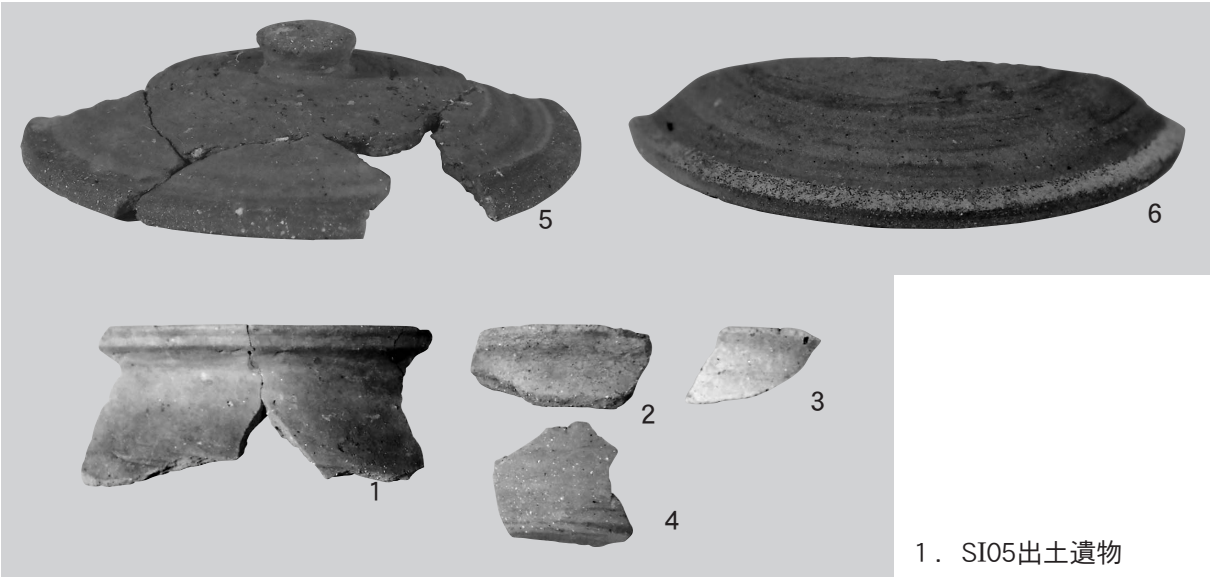
1．SI02出土遺物



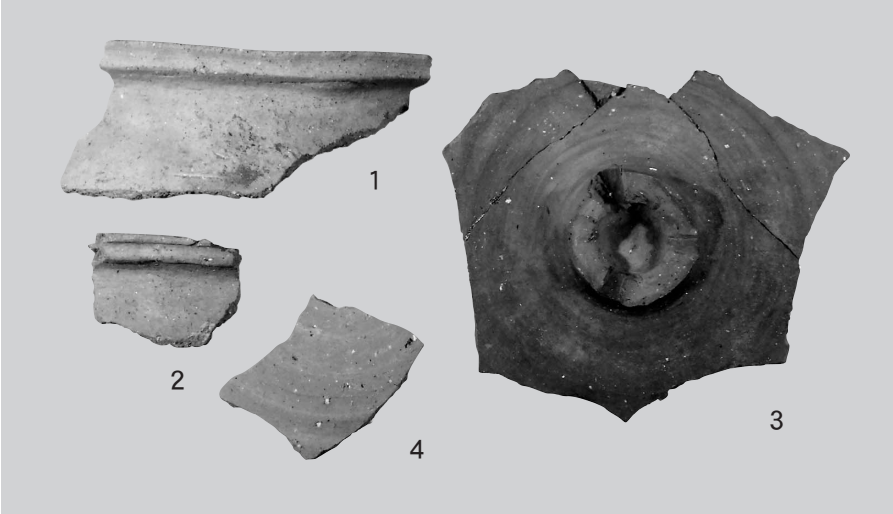
2．SI03出土遺物



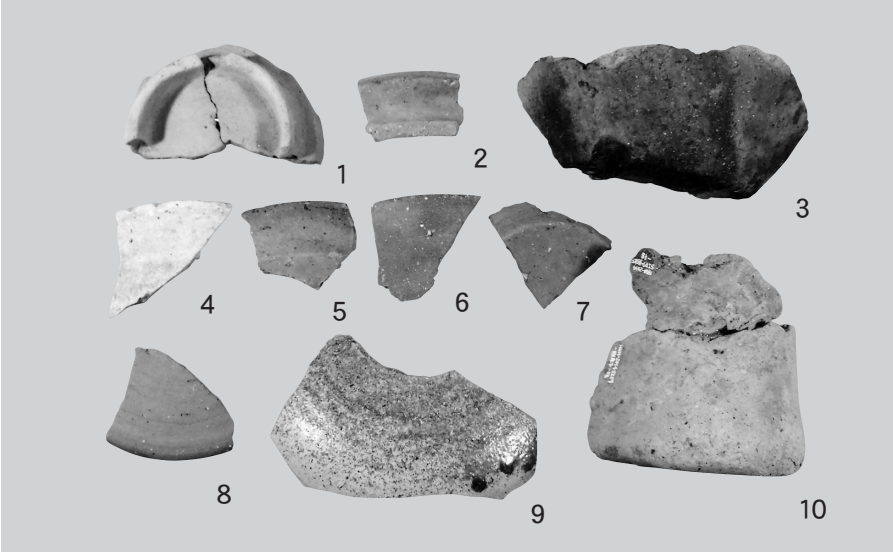
3．SI04出土遺物



1．SI05出土遺物

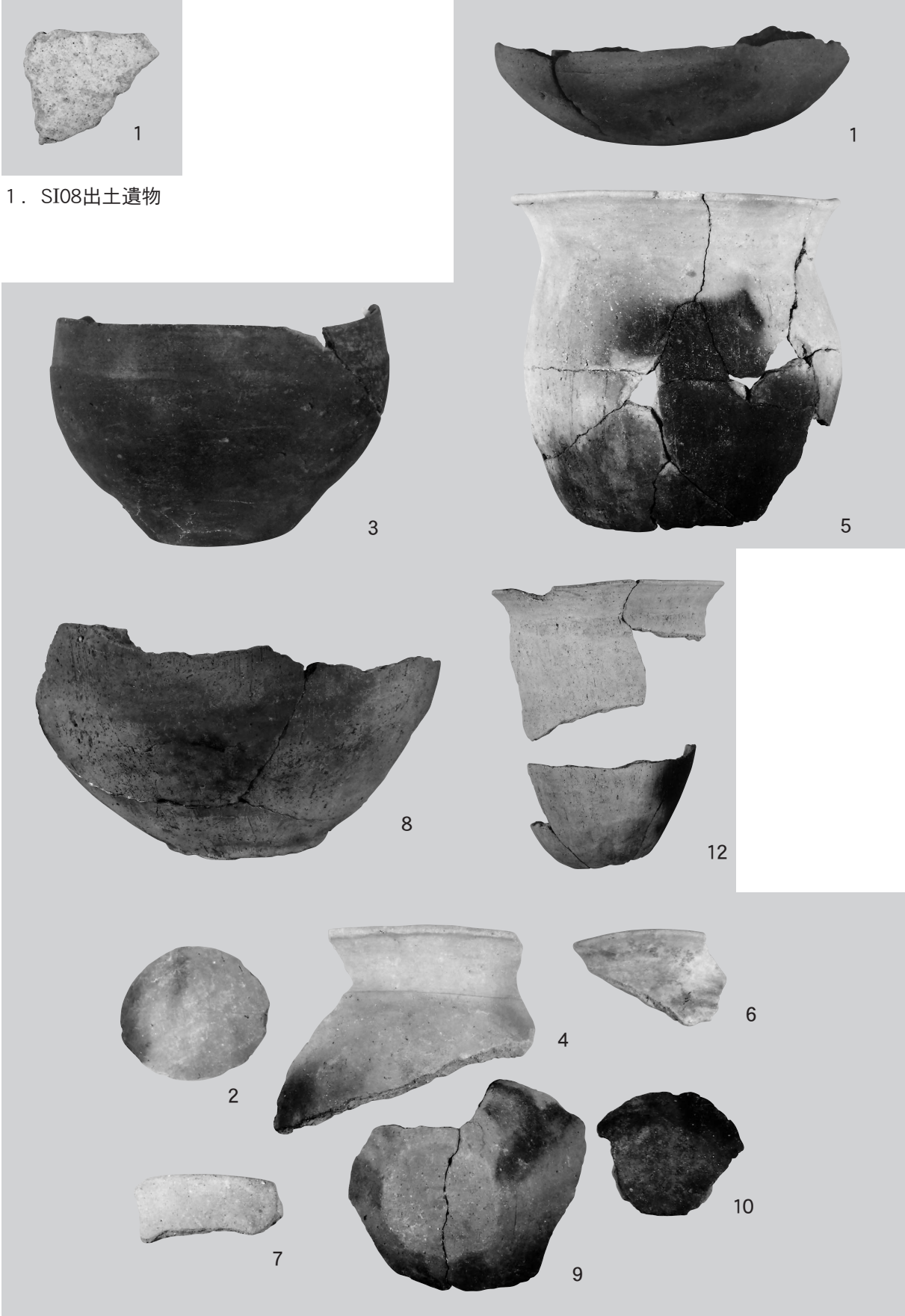


2．SI06出土遺物

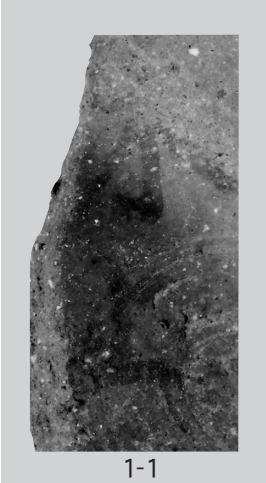


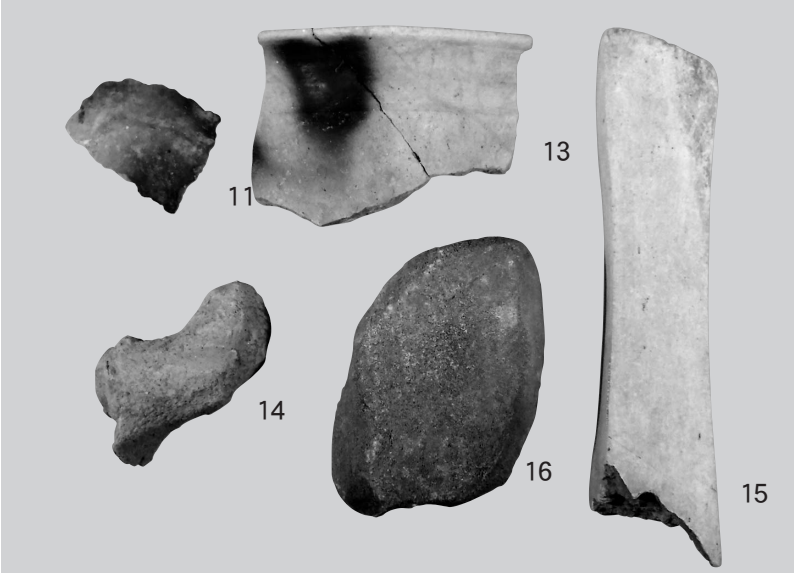
3．SI07出土遺物

1．SI08出土遺物

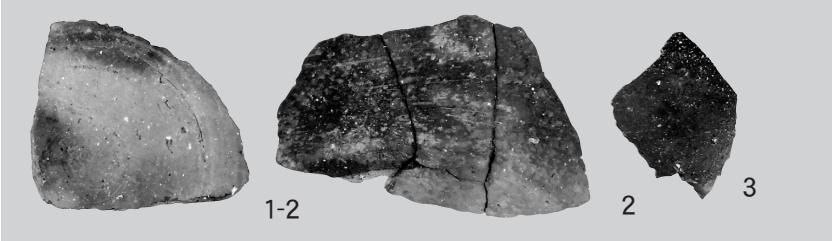


2．SI09出土遺物（1）



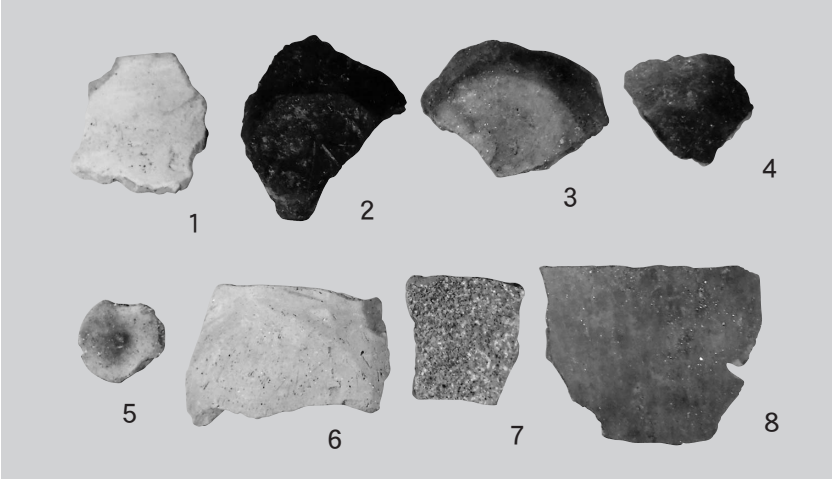


1．SI09出土遺物（2）

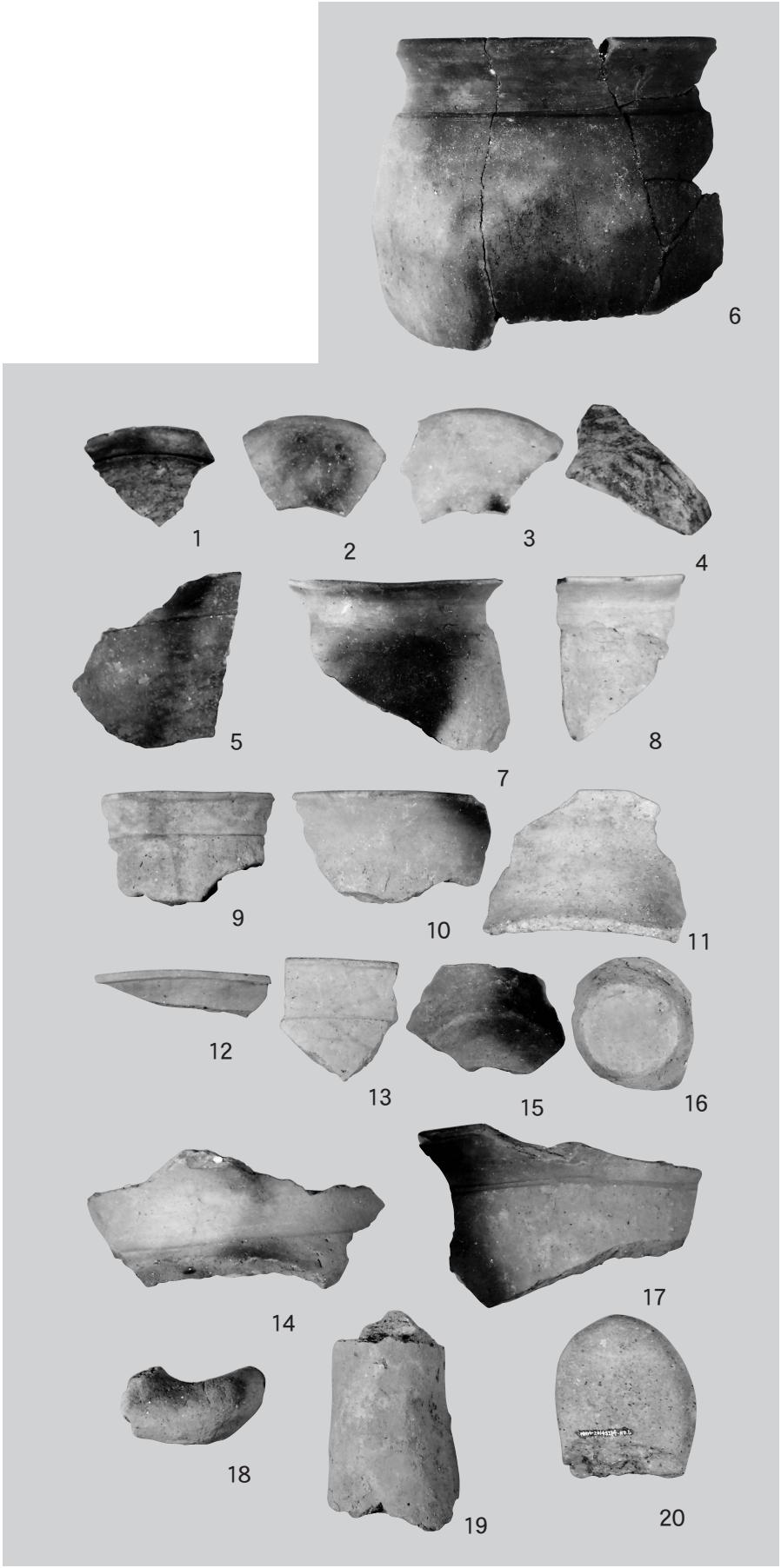


2．SI10出土遺物

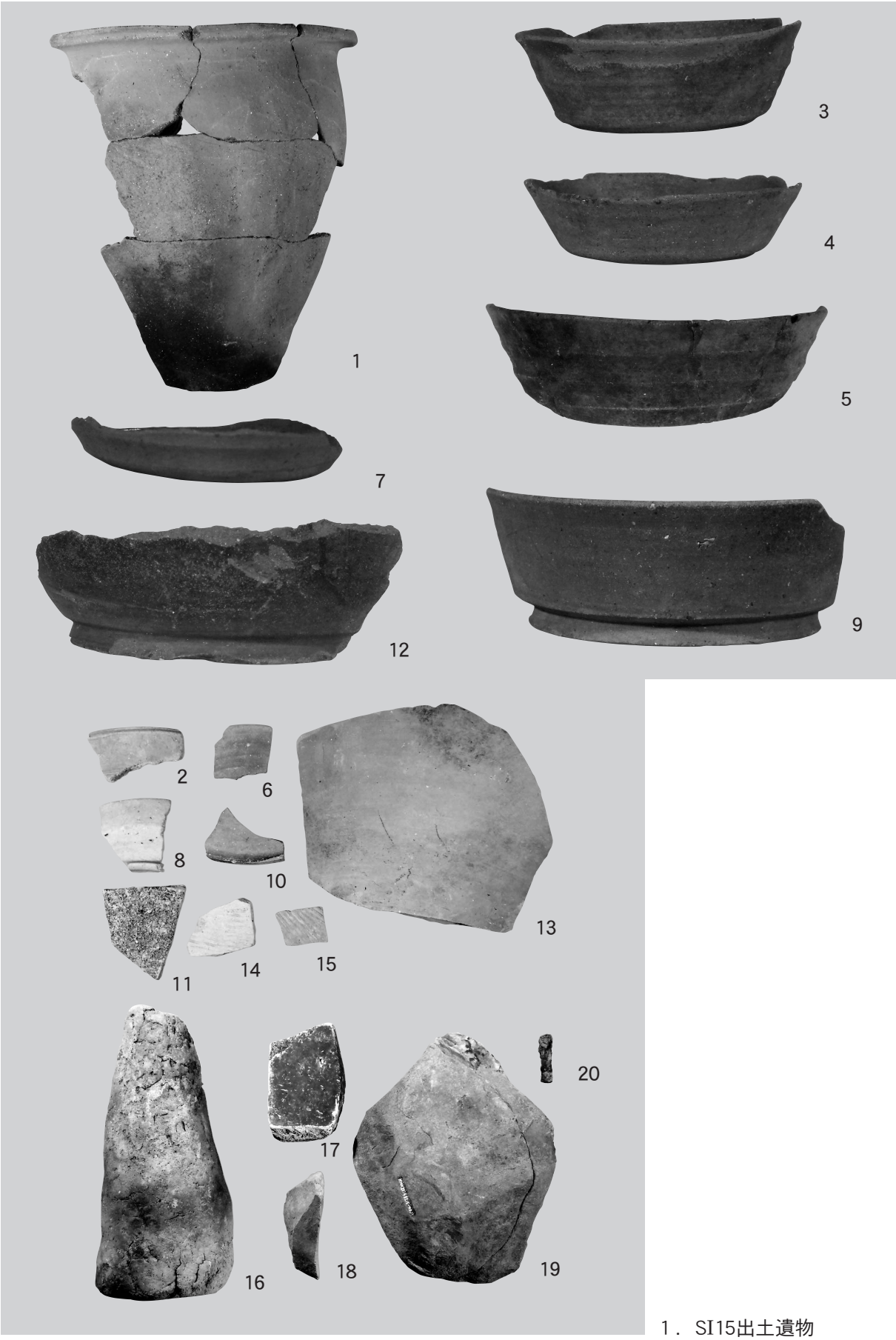
3．SI12出土遺物



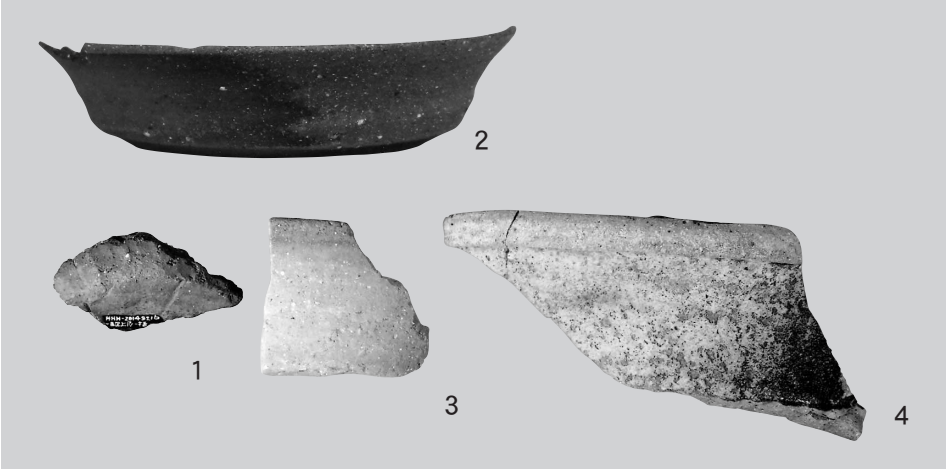
4．SI13出土遺物



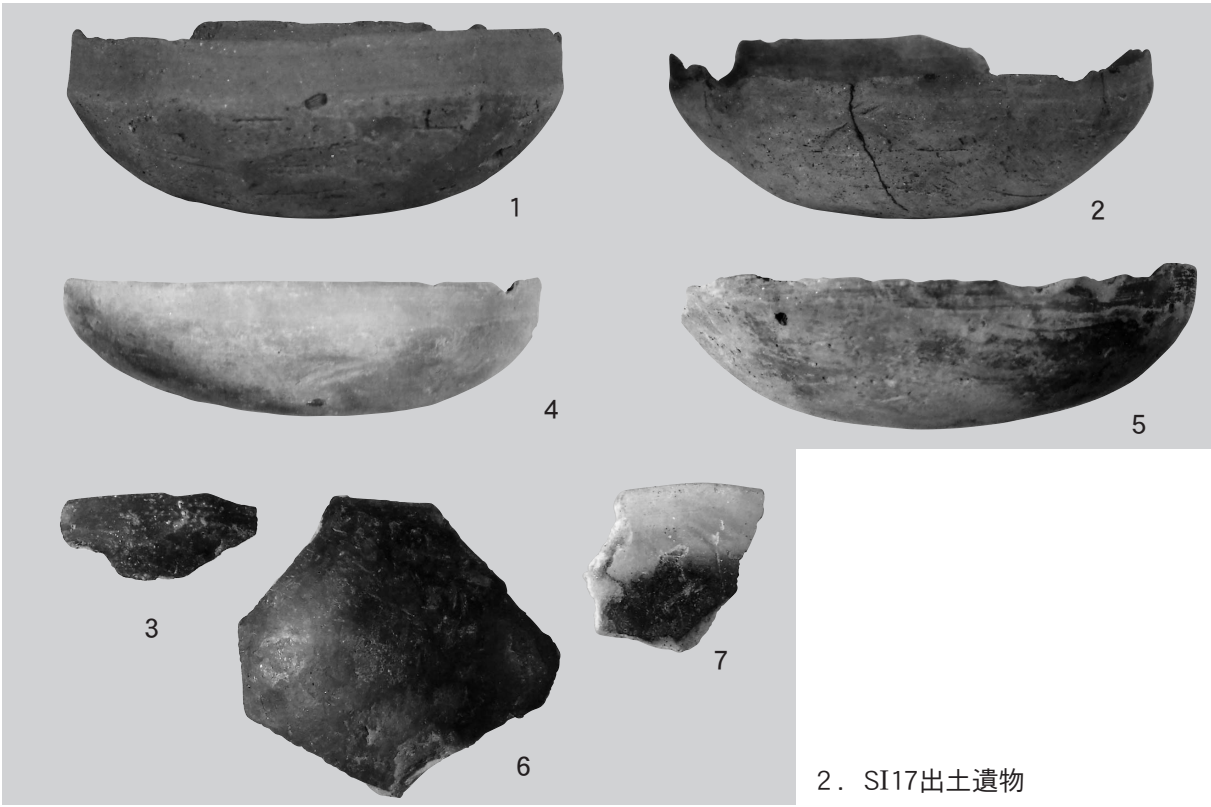
1．SI14出土遺物



1．SI15出土遺物

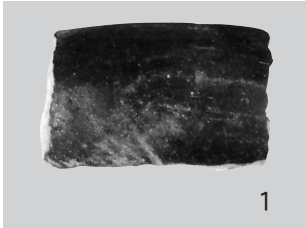


1．SI16出土遺物

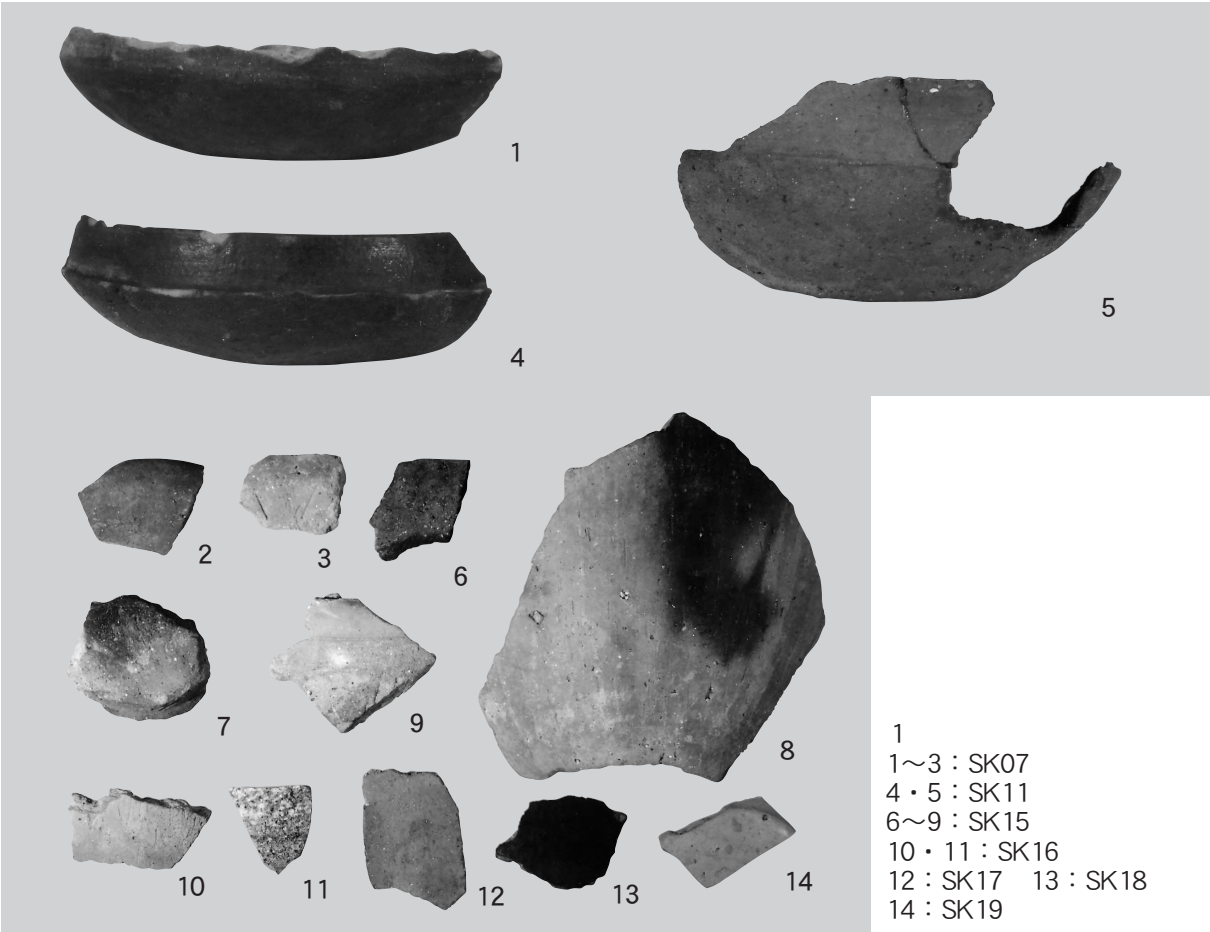


2．SI17出土遺物

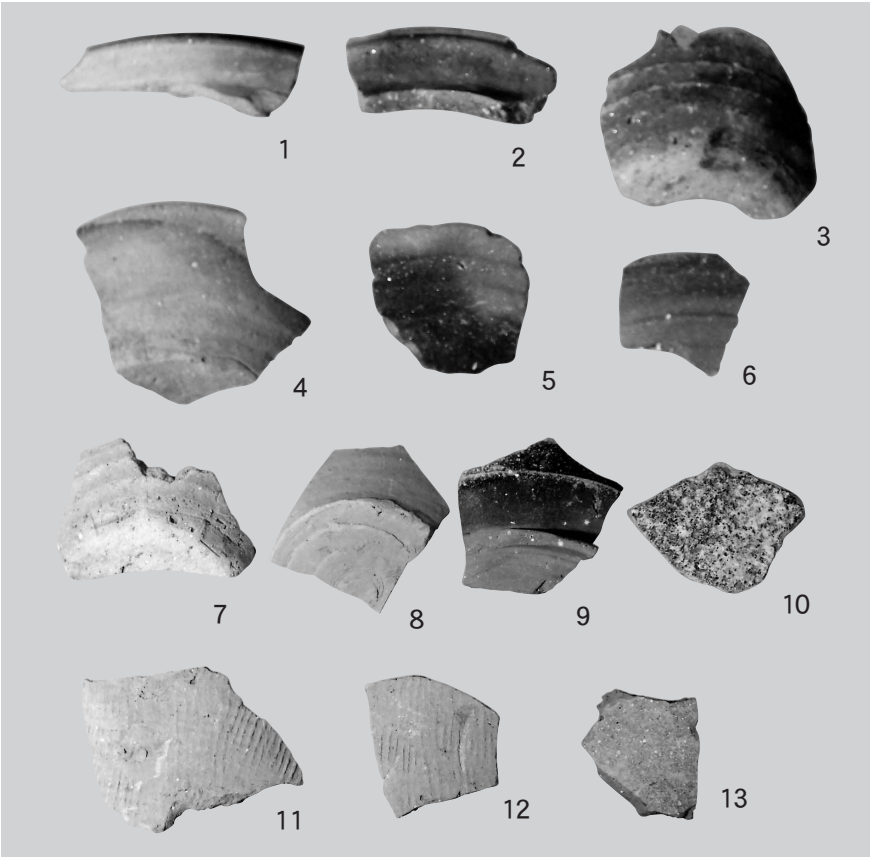
3．SI19出土遺物



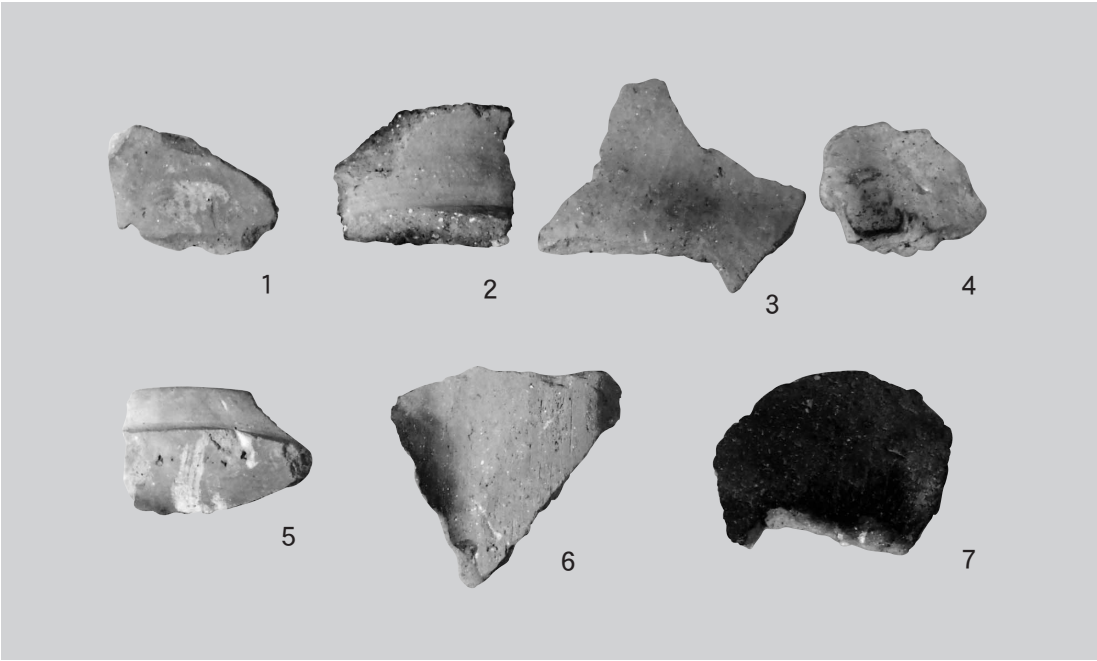
4．SI20出土遺物



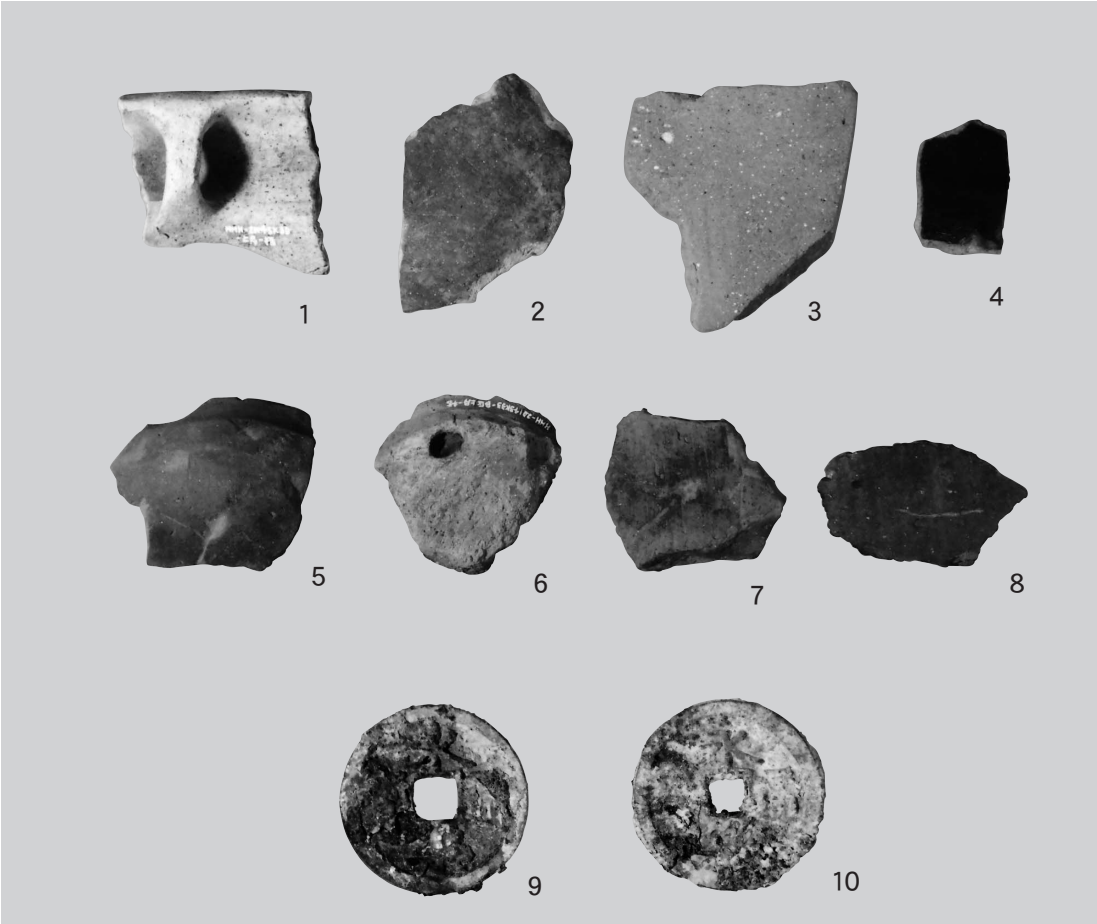
1
1～3：SK07
4・5：SK11
6～9：SK15
10・11：SK16
12：SK17　13：SK18
14：SK19



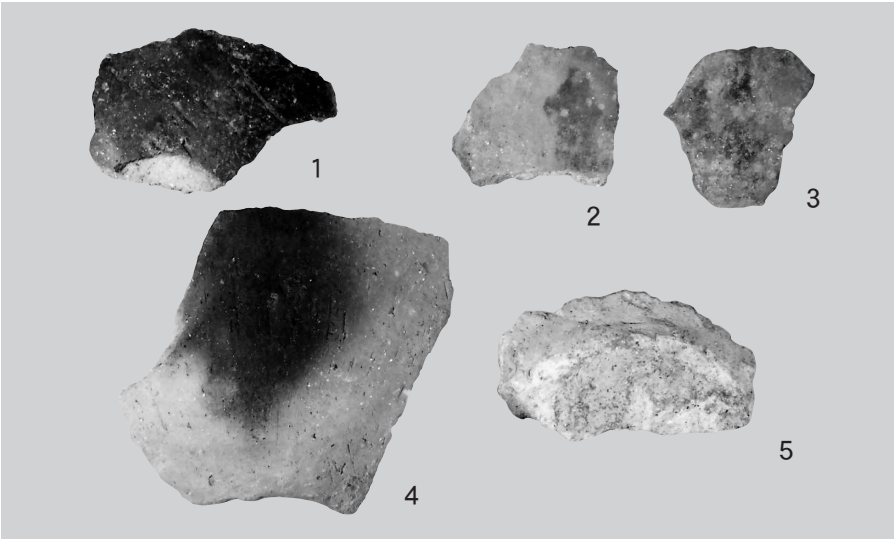
2　1～13：SK20



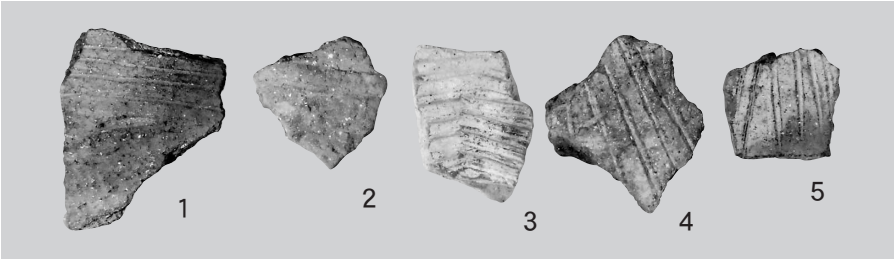
1　1：SK21　2：SK22　3・4：SK23　5・6：SK24　7：SK25



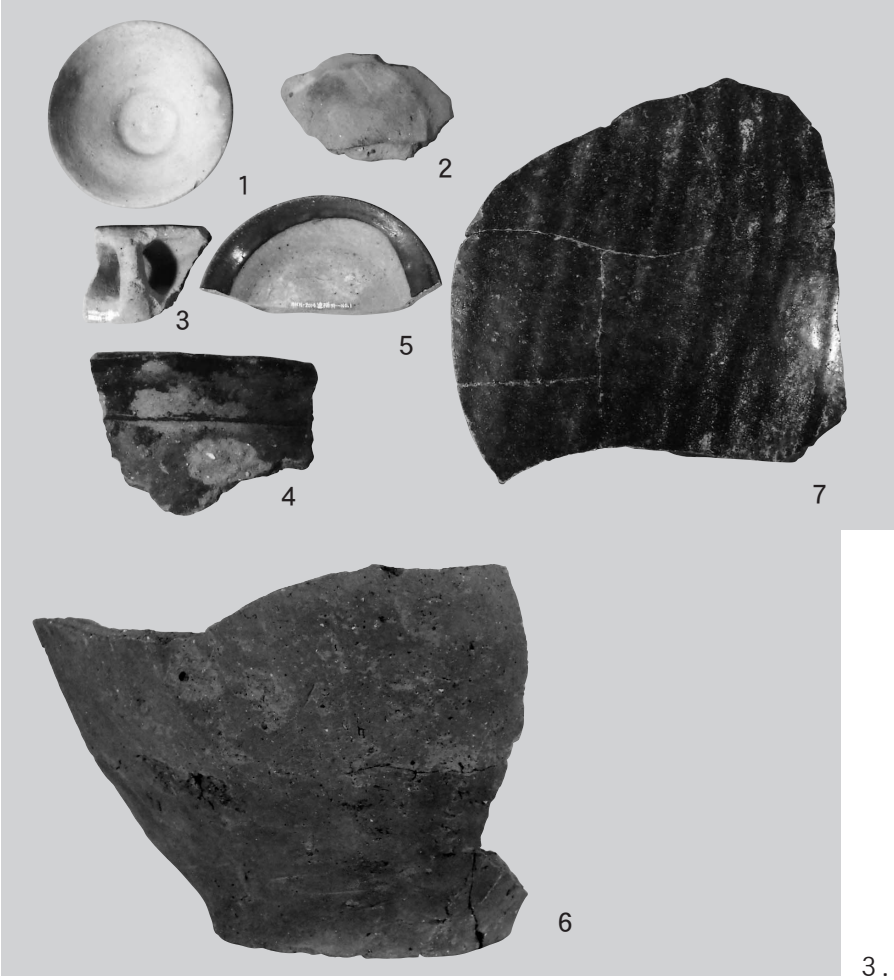
2　1～3：SK30　4：SK31　5～7：SK33　8：SK37　9：SK35　10：SK36



1．試掘調査出土遺物



2．遺構外出土縄文土器



3．遺構外出土中・近世遺物

報告書抄録

ふりがな	いしおかしひがしなるいひがしはらいせき
書　　名	石岡市東成井東原遺跡
副　書　名	H26県営畑地帯総合整備事業に伴う発掘調査
シリーズ名	石岡市埋蔵文化財調査報告書
編著者名	谷仲俊雄・小川和博・大渕淳志・遠藤啓子・大渕由紀子
編集機関	有限会社　日考研茨城　〒300－0508 茨城県稲敷市佐倉3321－1 TEL.029－892－1112
発行機関	石岡市教育委員会　〒315-0195　茨城県石岡市柿岡5680番地１　TEL.0299-43-1111
発行年月日	西暦2015(平成27)年３月20日

収録遺跡（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
東成井東原遺跡（ひがしなるいひがしはら）	石岡市東成井1407ほか（いしおかし ひがしなるい）	08463	140	36度15分29秒	140度16分32秒	20140710～20140922	1,630㎡	県営畑地帯総合整備事業

所収遺跡	種　別	主な時代	主　な　遺　構	主な遺物
東成井東原遺跡	集落跡	古墳時代 奈良･平安時代 中世	竪穴住居跡　20軒 井戸跡　1基 溝跡　1条 土坑　37基	縄文土器、土師器、須恵器、土師質土器、陶器、土製支脚、銭貨、鉄製品、石製品

要約	当遺跡は、古墳時代から中世にかけての複合遺跡である。調査対象地は南に突出する舌状台地の先端部付近に相当し、主に古墳時代後期と奈良・平安時代の竪穴住居跡が検出されており、集落の南端にあたるものと推定される。また中世の土坑は、調査区の中央に集中しており、粘土貼り土坑を含め墓域として使用されたものであろう。なお、大規模な構成の撹乱を受けているとはいえ、当時の集落の変遷を知るうえで貴重な資料になるものと思われる。

石岡市埋蔵文化財調査報告書

東 成 井 東 原 遺 跡

－H26県営畑地帯総合整備事業に伴う発掘調査－

発行年月日　2015（平成27年）３月20日
編集・発行　石岡市教育委員会
〒315-0195　茨城県石岡市柿岡5680番地1
Tel 0299-43-1111
有限会社　日考研茨城
〒300-0508　茨城県稲敷市佐倉3321-1
Tel 029-892-1112
印刷・製本　有限会社　田辺印刷
〒298-0123　千葉県いすみ市苅谷663-4
Tel 0470-86-2298